

顔微笑すと、意旨作廢生。師云く、「二虎争ふ時、其の勢生せず。僧云く、「世尊云く、「吾れに正法眼藏有り、摩訶大迦葉に分付す」と、又作廢生。師云く、「愁人に説向すれば人を愁殺す。」僧云く、「今日和尚説法、人有りて、花を獻せば、未審し如何が顯示せん。」師云く、「也た争奈せん破顔の人を得ざることを。」

乃ち云く、「吉祥の座に坐して、切に木椀子を覓めて眼睛を換へんと要す。明星を見るに及んで、果然として錯を將つて錯に就く、此れより定を起つて大地を賣弄す。山僧直に得たり暗地裏に點頭することを。諸禪徳、爾如し點頭を解する底ならば、取次に敢て、牛畔の供を肯はず。」

雪に因つて上堂、「譬へば大地一片の雪の如し、見る底は之を白と謂ひ、踏む底は之を冷と謂ふ。只だ見ざる踏まざる底の如きんば、又作廢生か道はん。」拂子を以て禪床を撃つこと一下す。

除夜小參、僧問ふ、「一年三百六十日、交頭結尾別に生涯有り、如何が大用現前することを得ん。」師云く、「頂上に骨無く領下に鬚有り。」進んで云く、「北禪今夜露地の白牛を烹て分歳す、檢點し將ち來れば正に是れ殘盃冷肉。和尚什麼を將つてか大

即ち佛果なり。
⑤ 陀羅尼は、能持、能遮、總持等と譯す。こゝには觀、或は智と通稱するものにして、智慧能く無邊の事理を究め、恒河沙の法門を統攝するが故に名づく。

⑥ 華嚴昇兜率天宮品に曰く、「爾の時世尊復た神力を以て此の菩提樹下及び須彌頂夜天宮を離れずして、兜率天一切妙寶所莊嚴殿に往詣す。」

⑦ 吉祥の座、觀佛三昧海經觀相品に見ゆ。略に云く、「即ち天舞清淨柔軟なるを把つて名けて吉祥と曰ふ、菩薩受けじつて、地に鋪いて坐す。」

⑧ 佛出山の時、身形消瘦、尼連禪河の畔に於て一の牧牛の女人乳糜を供養するの故事あり。詳かに釋迦譜三に出づ。

衆に施設せん。師云く、「大家這裏に在り。」進んで云く、「三陽交泰萬彙亨る、定めて是れ來年臘麥熟せん。」便ち禮拜す。師云く、「妨げず道著することを。」

乃ち云く、「年窮り歳盡く、結角羅紋、木馬飛んで天に上り、泥牛走つて海に入る。誰か陰陽の變化、氣候の遷謝を管せん。大底鼻孔下に向つて垂る、多年曆日相干らず。所以に道ふ、日日是れ好日、時時はれ好時と。交頭結尾別に生涯有り。」拂子を撃つて云く、「天淨うして知らず雲の去る處、地寒うして留め得たり雪の多き時。」

正旦上堂、僧問ふ、「元正啓祚、萬物咸く新なり、衲僧門下何の祥瑞か有る。」師云く、「方袍圓頂。」進んで云く、「與麼なるときは則ち年年是れ好年、日日是れ好日、什麼と爲てか還つて新有り舊有ることを得る。」師云く、「一回拈出すれば一回新なり。」進んで云く、「謂つ可し堯風舜日和氣霽然、樵唱漁歌共に豊年を樂むと。」便ち禮拜す。師云く、「方に知る爾は是れ其の言を識ることを。」

乃ち云く、「日暖に風和して百花競ひ發く、人傑に地靈にして色觀る可きに足れり。且く道へ、其の中慶賀の事作廢生。」卓拄杖、「伏して惟れ、箇箇道體、起居萬福。」

元宵上堂、「我見燈明佛、本光瑞如此。眼中的瞳子面前の人、寶山未だ嘗て會と不會とを説かず。个个燈影裏に向つて身を轉すること莫れ。」拂子を撃つて下座。

佛涅槃上堂、「無邊身の供を許さず、工巧の和羅飯を喫す。胡亂に賣

⑨ 佛、無邊身菩薩の供養を受くるの因縁、大涅槃經壽命品に

銷して其の時を知るに非ず。鳴伊鳴伊、年年二月是れ仲春。

三月旦上堂、「甘草は先に生じ苦草は後に生ず。好し蠶麥熟す天平に地平なり。忽ち此の漢有つて出で來つて、和尚與麼の説話、是れ佛法と爲んか是れ世法とせんかと道はゞ、山僧他に向つて擲擲して道はん、三月三卯無きも田家必ず飽くと。」

上堂、「春山は青く春水は緑なり、是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ず。且く道へ、畢竟是れ什麼ぞ。」拂子を擲つて云く、「常に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」

出づ。

①和羅飯は方語に曰く、家常飯なり。

②五維祖田家四時占候語に云く、「三月三卯無ければ田家米飽かず、三月初三雨ふれば桑葉人の取る無し、三月初三晴るれば桑上銀瓶を掛く。」

大德寺語錄終

筑州太宰府萬年崇福禪寺語錄

侍者宗貞編す

山門、「門頭の實地、个个踏著す。甚に因つてか諸人、我れに随つて入得す。」喝一喝す。

佛殿、「前佛後佛、隱顯一に非ず。咄。新長老が證明に因らずんば、知んぬ他一對の無孔鐵。」

土地堂、「護法先づ須らく主人公を識得すべし。阿誰か是れ主人公。」齒を扣くこと三下して云く、「東西南北、一等の家風。」

祖師堂、「者の一隊の老漢、惜しい乎者裏に坐在することを。」坐具を提起して云く、「若し此の令を行せずんば誰か敢て扶起することを得ん。」

方丈、「拄杖を横へて云く、「關中の主、能く本分の草料を與ふることを解す。烏鶯薄舌、胡亂に欸を供し去ること莫れ。」拄杖を靠く。

拈帖、「溫潤の文、格調の氣、直饒ひ衲被蒙頭なるも、奚ぞ讓を以て之れ

①崇福開山は大應國師、元、太宰府に在りしを、黒田長政入國の後、現今の東公園千代の松原に移せしなり。大燈國師行狀に、「元弘元年辛未太宰府小貳藤居士、名は頼尙、其の父妙慧居士と横岳山崇福寺に住せんことを請ふ、而住すること一期にして本寺に歸る。」

②山門は三門なり、佛地論に云く、「大宮殿あり、三解脱門を所入の處と爲す、大宮殿は法空涅槃に喩ふ。」三解脱門とは、謂く、空門、無相門、無作門なり。今寺院は是れ持戒修造して涅槃に至るを求むる

が義と爲さん。」

山門の疏、「言を語に成し、語を言に成す、如何如何。官には針をも容れず。」

法座、「諸人喚んで高廣の座子と作す、山僧喚んで者箇の座子と作す、何が故ぞ。」一歩して云く、「只だ與廢の地に到るが爲なり。」

師、「障座、香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に蒸向して恭しく爲に今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬歲萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、龍圖永く固く、玉葉彌芳しからんことを。」

次に香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に蒸向して、征夷大將軍の爲に祿算を増崇し奉る。伏して願はくは、高く域中の徳を賛け、長く塞外の命を提げんことを。」

又香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に蒸向して、大檀主筑州の空門泊び、都督司馬の爲に、祿算を増崇し奉る。伏して願はくは、威風を千歳に扇ぎ、佛日を萬世に輝さんことを。」

香を拈じて云く、「此の香、爐中に蒸向して、前住、巨福名山建長禪寺、

先師敎諭圓通大應國師南浦和尚大禪師に供養し、用つて法乳の恩に酌ゆ。」

師衣を斂めて座に就いて云く、「明鏡臺に當り、明珠掌を歴、妍醜を分たんと要する者は、直下に來つて相見せよ。有りや有りや。時に僧有り問ふ、「綠樹陰濃にして夏日長し、樓臺影を倒にして池塘に入る。」師云く、「時節逢ひ難し。」僧云く、「和尚、帝里を辭すれば、皇帝之を留むと、更に甚れの處に向つてか一路を通じ來る。」師云く、「鐵船水上に浮ぶ。」僧云く、「寰中は天子の敎と。聲。」師云く、「誰か恩を承けざらん。」僧云く、「與廢ならば則ち杲日天に麗しく、清風地を匝る。」師云く、「大方外無し。」僧云く、「記得す。」保壽開堂、三聖一僧を推し出す、意旨如何。」師云く、「白雲深き處、金龍躍る。」僧云く、「壽便ち打つ、又作廢生。」師云く、「碧波心裏玉兔驚く。」僧云く、「若し忽ち人有つて一僧を推し出さば、如何が祇對せん。」師云く、「風光愛しつ可し。」僧云く、「者箇は且く置く、今日還つて禁足安居底の道理有りや。」師云く、「大家者裏に在り。」僧云く、「十五日結制は則ち問はず、即今一時に結し去れ看ん。」師云く、「處處の綠楊馬を繫ぐに堪へたり。」僧云く、「恩大にして酔い難し。」師云く、「能く幾人か有る。」僧禮拜す。

國譯大燈師語錄

人、之れに居す、故に三門に由つて入るなり。

梵語に尼師檀、坐具と譯し、又は隨坐衣と譯す、僧侶六物中の一にして座下に敷くものなり。

祖庭事苑に、「今禪林の正殿を以て方丈と爲す、蓋し則を毘耶難城維摩の室に取り、一丈の室を以て能く三萬二千の師子の座を容る、不思議の妙事有るが故なり。」

拄杖は僧の携ふる杖なり。

本分は己の守るべき分限の意にて、草料の料は牛馬の食ふ所の芻豆、即ち「まぐさ」のこと、師家の學者を接する手段を云ふ。

胡亂は曖昧の意。事物起源に「胡亂とは祕書に曰く、五胡、華を亂るの日、漢人の兵を避くる者、事倉卒にして完備する能はず、則ち相率ひ胡亂且

く罷むと云ひて、一時の急に備ふ、今人、事苟且なる者を胡亂と稱するは此に始まる。」

大空門は蓋し妙慧居士を云ふ。智度論に曰く、「涅槃に三門有り、一に空門、二に無相門、三に無作門。」空門と謂ふは諸法を觀じて我我所無く、諸法因縁より生じて作者受者無し、是れを空と名づく、今出家の人、此の門より涅槃の宅に入る、故に空門子と號す。

職原抄に、「筑州太守師、唐名都督少卿。蓋し都督は顯尙を云ふか。」

關東五山第一相州鎌倉巨福山建長興國禪寺は、後深草院建長元年平時頼之れを建創す、開山勅諭大覺禪師、諱は道隆、蘭溪と號す、法を宋國無明慧性禪師に嗣ぐ。

鎮州保壽沼禪師、鎮州三聖院

師乃ち云く、「世尊拈花、迦葉微笑、君子財を愛す、之を取るに道有り。正法眼藏此れより流通す、遞代傳持して虚を受け響を接す。激揚鏗鏘古今を坐斷す。珠回玉轉じて八面玲瓏、其の大機圓應、大道無方なるに迄つては、一賓一主、擒縱擡搦、收放明暗、電轉星飛ぶ。窮するときは則ち變じ、變するときは則ち通す。藍よりも青く、水よりも寒じ。聽教あれ威音那畔に挺拔し、空劫已前に蕭然たり。況んや亦清風明月雅興多く、白雲流水詩緣寬し。四海九州雷動風行、漁歌樵唱共に太平を賀す。正當與慶の時、人人禁足護生、人人剋期取證、皇恩佛恩一時に報じ了る底の事、又作麼生。」拂子を撃つて云く、「版圖遠く奏して堯天濶し、萬物祥を呈して聖情を樂ましむ。」

慧然禪師と同じく臨濟玄に嗣ぐ。
 臨濟錄に云く、「夫れ至理の道の如きんば、評論に非ずして求め、激揚鏗鏘以て外道を摧く。」字彙に鏗鏘は金玉の聲。
 以下二句、易經繫辭傳の語。
 荀子一節學篇に、「背は藍より出でて藍より青く、氷は水より生じて水よりも寒し。」
 會元十一三聖の章に見ゆ。
 家語に云く、「丹の藏する所の者は赤く、漆の藏する所の者は黒し、是を以て君子は必ず其興り處る所の者を慎む。」

復た擧す、三聖道く、「我れ人に逢へば即ち出づ、出づるときは則ち人の爲にせず。興化道く、「我れ人に逢ふときは則ち出でず、出づるときは即ち便ち人の爲にす。」師云く、「二大老、謂つ可し。漆の隠す處は黒く、朱の隠す處は赤しと。若し是れ山僧底ならば、天平に地平なり。」卓拄杖下座。
 當晚小參、僧問ふ、「三月安居、九旬禁足は則ち問はず、遠く華洛を離れて親しく岳峰に到る一句如何。」師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」僧云く、「和尚此の山に住す、何を以てか衆を安せん。」師云く、「

「山色夕陽の時、泉聲中夜の後。」僧云く、「與麼ならば則ち大衆徳に飽き去らん。」師云く、「限り無き清風來つて未だ休せず。」僧云く、「徳山小參答話せず、問話の者有らば三十棒」と、意旨如何。師云く、「去り得て來ること得ず。」僧云く、「趙州小參答話を要す、問話の者有らば一問を置き將ち來れ」と、又作麼生。」師云く、「來り得て去ること得ず。」僧云く、「今夜小參答話を要するか、答話を要せざるか。」師云く、「天外に出頭して看よ、誰か是れ我れ般般の人。」僧云く、「三大老の用處、止だ一般なること莫しや。」師云く、「爾をして休せしむれども也た肯て休せず。」僧云く、「若し此の如くならば、則ち一即ち三、三即ち一。」師云く、「呼喚。」僧云く、「學人今夜小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「手を那邊に撒し去れ。」

① 陵王溪、此君亭、皆崇福の境なり、陵王の故事詳にせず、此君は東坡の時に「此君那ぞ知らざらん。」註に「王子獻竹を愛す、嘗て曰く、何ぞ一日も此の君無かる可けん」と。按するに此の事竹林に近し、故に名づくる也。
 ② 築著碁著は、到る處つきあたること、「がつつりこつつり」と譯すべし。

乃ち云く、「今夜大衆と箇の識面の話有らんことを要す、各各切に宜しく起倒分明なるべし。」陵王溪畔此君亭邊、諸人有ることを知れども未だ主と做ることを得ず。崇福區字件件の數目、山僧主と做つて未だ大毫を辨せず、既に其の居を一にす、甚と爲てか受用同じからざる。還つて會すや。所以に道ふ、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし、明朝頼に是れ結制安居の辰、箇箇慧身を成熟し、坐底立底、築著碁著、自然に者箇に孤負することを得ず。便ち拄杖を卓すること一下す。

復た擧す、雲門因に官有りて問ふ、「佛法は水中の月の如しと、是なりや也た無や。」門云く、「清波透路無し。」師拈じて云く、「答を以て問を見れば、問最も可なり、問を以て答を見れば、答未だ奇ならず。且く道へ、誦訛甚れの處に在る、具眼の禪流、請ふ細素を辨じて看よ。」

次の日上堂、「我が今の衆尋常と同じからず、金剛圈を跳出し、栗棘蓬を吞透す。激電の神機雲の如くに飛び、颯の如くに到る。既にして此の如し、今朝甚に因つてか行かんと要して行かず、住せんと要して住せず、還つて會すや。」拂子を撃つて云く、「塌薩阿竭二千年。」

五月旦上堂、僧問ふ、「聲前に薦得するも未だ是れ作家にあらず、喝下に承當するも猶ほ是れ鈍漢と、什麼と爲てか此の如くなる。」師云く、「石壓して箕斜に出で、岸懸つて花倒に生ず。」進んで云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」師云く、「鳳林叱之。」進んで云く、「記得す、僧、投子に問ふ、「如何なるか是れ十身調御。」投子禪床を下つて立つ、意旨如何。」師云く、「頂上に骨無し。」進んで云く、「又問ふ、「凡聖相去ること多少ぞ。」投子亦禪床を下つて立つ、意那裏に在る。」師云く、「領下に鬚有り。」進んで云く、「若し人有つて、如何なるか是れ十身調御と問はゞ、如何が祇對せん。」師云く、「眼中の童子、面前の人。」進んで云く、「上來一一指示分明、爲人底の一句、又作麼生。」師云く、「三十年後自ら悔い去るも亦定らず。」

乃ち云く、「崇福に三訣有り、若し第一訣に參得せば、爾に許す拄杖頭上に日月を挑ぐることを。」

若し第二訣に參得せば、妨げず拂子頭上に筋斗を打することを。若し第三訣に參得せば、我れ且く爾に問はん、山前麥熟すや也た未だしや。」

端午檀家の補寺齋を謝する上堂、僧問ふ、「今朝五端午、符を書し土を咒することを用ひず、請ふ師現量法門の一句、直下に至論せよ。」師云く、「一峰雲片片、雙欄水潺潺。」進んで云く、「家に白澤の圖無くんば、又作麼生。」師云く、「將に謂へり、問話を要する漢と。」進んで云く、「善財、文殊に撞著する底の時節は且く置く、天澤の三轉語還つて學人が否參を許さんや也た無や。」師云く、「之を鑽るも是、之を仰ぐも是。」進んで云く、「己眼未だ明めざる底、甚に因つてか虚空を將つて布袴と作して著く。」師云く、「脛に毛無く股に肉無し。」進んで云く、「地を劃して牢と爲す底、甚に因つてか者箇を透り過ぎざる。」師云く、「脚下荆棘深きこと數丈。」進んで云く、「海に入つて沙を算ふる底、甚に因つてか針鋒頭上に足を翹つ。」師云く、「爾が鼻孔を築著することを覺ゆるや。」進んで云く、「慙麼ならば則ち金殿も禪を譚じて大いに皇情を悦ばしめ、嶽峰道を聲して禱子を奔走せしむるも、也た未だ分外と爲さざること有り。」師喝して云く、「阿彌が境界に非ず。」進んで云く、「錦上に花を鋪く、又一重。」師云く、「喫。」乃ち云く、「端午天中の節、諸方盡く土を咒し、壁に書して以て妖怪を消す。薬を探る模様を認

● 虛堂錄十行狀に云く、「師兩朝恩遇の寵に感じ、賜ふ所の幣帛を將つて、小庵を望雲亭の東に創し、扁して天澤と曰ふ云々。」
● 論語子罕篇に曰く、「之を仰げば彌々高く、之を鑽れば彌々堅し」とあり。
● 事文前集に云く、「九、五の月五日午時天中節と爲す。」

めて、落草以て伎倆を作す。争か如かん、我が者裏、靈山の付屬を忘れざるの人有つて、忽ち妙術の手を展べて、貧を抜いて富と做す。一衆个个石人の機、鐵漢の用、風吹けども入らず、水洒げども著かず、諸人此の人を見んと要すや。拄杖を卓して云く、「切に忍む、當面に諱却することを。」

和泉和尚至る上堂、僧問ふ、「長松嶺頭風撼撼、飛瀑岸前水潺潺。現成公案、大難大難、如何が履踐せん。」師云く、「好し大難の處に向つて履踐するに。」進んで云く、「慙麼ならば則ち薰風自南來、殿閣生微涼。」師云く、「驢鞍橋を認めて阿爺の下領と作す。」進んで云く、「和尙に三訣有り、一一咨參を許さんや也た無や。」師云く、「何ぞ妨げん、問ひ將ち來ることを。」進んで云く、「若し第一訣に參得せば、偏に許す、拄杖頭上に日月を挑ぐることをと、意旨作麼生。」師云く、「虚空迸裂す。」進んで云く、「若し第二訣に參得せば、妨げず拂子頭上に筋斗を打するをとと、又如何。」師云く、「山嶽起つて舞ふ。」進んで云く、「若し第三訣に參得せば、我れ且く彌に問はん、山前麥熟すや也た未だしやと、意那裏にか在る。」師云く、「眼睛鳥律律。」進んで云く、「者箇の三訣、畢竟什麼邊の事をか明め

得る。」師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」乃ち興化、同參の來るを見て喝する底の公案を擧して、師云く、「古人只だ價の高き處に就くことを要して、其の管賞の義を篤うすることとを缺く。崇福今日和泉和尚の光訪を得て、事自然に函蓋相應す。何が故ぞ。」拂子を撃つて云く、「火を竟めては煙に和して得、泉を擔つては月を帯びて歸る。」

退院上堂、「衲子從來定迹無し、天涯海角情に任せて遊ぶ。一毫頭上に華洛を辭し、三鼓聲中九州を出づ。」

①和泉和尚の傳未だ詳にせず。
②驢鞍橋は驢馬の背骨のこと。
會元十一に「谷隱羅羅師曰く、驢鞍橋を認めて、阿爺の下領と爲すこと莫れ、他の妄想を認めて、自己の佛性と爲すこと莫れ」の意なり。
③眼睛は目の玉、鳥律律、又鳥萃萃に作る、漆黒の意。
④鐵崑崙は、又、渾淪に作る、正字通に「圓にして未だ剖散せざるものを渾淪と云ふ。」
⑤驢鞍橋に云く、「師、同參の來るを見て、法堂に上る、師便ち喝す、僧亦喝す、行くこと三五歩、師又喝す、僧亦喝す、師近前棒を拈す、僧又喝す、師云く、彌看よ踏凌躑は主と作る在り、僧擬議す、師便ち打つて直に法堂を下る、時に僧有り、問ふ、者の僧長の和尙に觸忤すること有りや、師

云く、是れ伊れ傳來也た權有り、也た實有り、也た照有り、也た用有り云々。
⑥公案は公界定むる所の法式案文なり、例へば今の民法、刑法等の如きもの即ち是れなり。神林實訓音義に云く、「乃ち公府の案牘に喩ふるなり、法の在る所は而も正道治まれり、公とは乃ち聖賢一期の報と、天下通途の理なり、案とは聖賢の正文なり、凡そ天下を有つ者は、未だ嘗て公府無くんばならず、公府有つて未だ嘗て案牘無くんばならず、蓋し取つて法と爲して、天下の不正を治するなり、夫れ佛祖の機縁を日づけて公案と曰ふものは、亦之れに由るのみ云々。」
⑦函は「は」なり、蓋は「ふた」なり。函と蓋と相契合して少しの間隙無き様子なり。

崇福寺語錄終

洛陽龍寶山大德禪寺語錄

①横岳を退き本寺に歸る

侍者 惠眼 編す

七月旦上堂、「秋雲清淡、秋水清冷、東西と南北と、觸處嫩涼生ず。且く道へ、其の中の事作麼生。」拄杖を卓して云く、「四海隆平にして煙浪靜に、斗南長く見る 老人星。」

解夏小參、「隨處に主と作る、聖制を横嶽山頭に結び、立處皆眞なり、賞勞を龍寶峰頂に解く。此の事相説せず、時人に孤負せず。破衲雲を逐ふて飛び、草鞋路に隨つて轉ず。左足先づ應ずる處、脚頭是れ通宵。何ぞ必ずしも 臺山慈直の途轍に落ち、流菜肯はざるの道伴を慕はんや。然も是の如くなりと雖も、山僧親切の一句子有り、各各分明に善爲せよ。處處忘却することを得ず」といつて、便ち拄杖を卓すること一下す。

復た文殊、三處に夏を度る公案を擧して、師云く、「文殊、當年列聖の眉毛裏に於て渾身を藏し得ると雖も、二千年後、未だ免れず人の點檢に遭ふ

ことを。何が故ぞ。」拂子を撃つて云く、「雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は磧底に流れて太忙生。」

次の日上堂、「風梧葉に到り露樞花に凝る、無寸草の地其の多きを較べず。莫教あれ語默人の對するに逢ふことを。首を回せば忽然として是れ月華。」

八月旦上堂、「八月初一日、天下太平の節、人人無爲を樂み、箇箇災難絶す。且く道へ、箇の什麼に因つてか是の如くなる。」拄杖を卓すること一下して云く、「分一節。」

中秋上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「靈山に者个を指し、曹溪に者个を語る。我が者裏指さず話らず、還つて親疎有りや也た無や。」又卓一下して云く、「人の此の意を知る無し、我れをして南泉を憶はしむ。」

臘八上堂、「澄月映徹して衆星燦朗たり、箇の中悟處無し、世尊何をか悟道す。」拄杖を卓すること一下して云く、「二千年前二千年後。」

除夜 小參、「日一上月上、晝一上夜一上、窮めて一十二箇月に到り、數へて三百六十日に到る、之を新舊交頭除夜結尾と謂ふ。諸人若し身をして舊年に在らしめば、新定の機を發せず。也た心をして新年に在らしめば、

①横岳は崇福寺の山號なり、行狀に「纒に百日の主と作りて退を告げ、大德に迂歸す」とあり。

②老人星は史記天官書に云く、「南極老人。」注正義に曰く、「老人一星、弧南に在り、一に老極と曰ふ、人主の壽命延長の應と爲り、常に秋分の曙を以て景に見はる、春分の夕丁に見はる、國の長命を見る、故に之れを壽昌と謂ふ、天下安寧人主の憂を見ざるなり。」又「老人見はるれば治安兵の起るを見ず。」

上に一婆子有り、凡そ僧有りて問ふ、臺山の路其處の處に向つてか去る、婆云く、蕪直に去れ、僧纒に行くこと三五歩すれば、婆云く、好箇の師僧、又與麼に去ると、後に僧有り、趙州に舉似す、州云く、待て我れ去りて爾が爲に道の婆子を脚過せん、明日便ち去りて亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ、州歸りて衆に謂つて云く、臺山の婆子、我れに勸過し了らる。」

③碧巖十五則雪竇の頌に云く、「倒一説、分一節云々。」竹を二つに切りて、合するを分一節と云ふ。

④傳燈十八、玄沙備禪師、衆に示して曰く、「且つ吾が正法眼藏、大迦葉に付嘱すと道ふが如きんば、我が道猶ほ月を語るが如し。」曹溪拂子を擧つ、月を指すに演す。

本来の用を失却せん。所以に北禪、露地の白牛を烹、祖翁、半宵の燈を挑ぐ。然も是の如くなりとも雖も、山僧終に與麼の窠窟に入らず。何が故ぞ。簡雪天に連つて白く、春風戸に逼つて寒し。」

復た擧す、僧、香林に問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」林云く、「看よ看よ、臘月盡く。師拈じて云く、「此れ簡の時節、最も是れ愛しつ可し、來日定めて大年、一衆須らく保愛すべし。」

正旦上堂、「鳳曆開元の日、王春肇始の時、雪は北嶺に寒く、梅は南枝に香し。好箇の好時節、龍天須らく匡持すべし。且く道へ、何を以てか驗と爲ん。」拄杖を卓すること一下して便ち下座。

元宵上堂、僧問ふ、「今朝上元の節、處處燈毬を掛く、意旨如何。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「只だ此の正言を將つて、以て天下の春を祝す。」師云く、「言を知るの漢。」進んで云く、「記得す、僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ室内一盞の燈」と、此の意如何。」師云く、「言録、冰よりも冷じ。」進んで云く、「林云く、「三人龜を證して籠と作す」と、又作麼生。」師云く、「利舌、鐵よりも硬し。」乃ち云く、「燈燈相續、燈燈窮り無し。處處夜光の珠を列ね、頭頭夜明符を莊る。只だ此の光輝底、都べて者裏より普し。」拂子を撃つこと一下す。

佛涅槃上堂、僧問ふ、「今宵夜半、世尊涅槃に入る、兒孫何を以てか法乳に酌いん。」師云く、「杜鵑啼

●事苑八に、禪門詰且陞堂、之れを早參と謂ひ、日晡念所、之れを晚參と謂ひ、非時說法之れを小參と謂ふ。
①會元十二、石霜の章に見ゆ。

き断えて月晝の如し。進んで云く、「與麼ならば則ち恩を知つて、恩を報ずることを解す。」師云く、「也た何ぞ妨げん。」進んで云く、「世尊昔靈山會上に在つて一枝の花を拈起す、此の意如何。」師云く、「萬里一條の鐵。」進んで云く、「迦葉獨り微笑す、意、那裡に在る。」師云く、「金、金に博へず。」乃ち云く、「我れ若し滅度すと謂はゞ、我が弟子に非ず、我れ若し滅度せずと謂はゞ、亦我が弟子に非ず。當年若し人有つて、生靈終に辣きことを改めずと道はゞ、但だ釋迦老子を救ひ得るのみに非ず、也た須らく一會の列聖を扶け得べし。何が故ぞ。」良久して云く、「紅霞

碧鷲高低を籠む、芳草野花一様の春。」
三月旦上堂、「山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し。堅固法身太だ端無し、大龍何れの處にか心肝を露す。諸人見得すること無きにあらす、甚に因つてか擧し得ることを解せざる。」拂子を撃つて云く、「又流鶯を逐ふて短牆を過ぐ。」

上堂、「一即ち一切、一切即ち一。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「三祖大師、端無く柳巷を穿つて花街に入る。忽然として幽鳥語喃喃、雲を辭して亂峯に入るに逢著す。合掌低頭して道く、揭諦揭諦と、是れ什麼の道理ぞ、諸人各辨別せよ。」又拄杖を卓して下座。
佛生日上堂、僧問ふ、「釋迦老子、今日初めて閻浮に下る、四衆筵に臨む、願はくは法要を聞かん。」

①會元八、鼎州大龍山智洪弘濟禪師、得法白兆四禪師問ふ、「色身敗壞如何なるか是れ堅固法身。」師曰く、「山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し。」
②三祖鑑智禪師の信心銘の語なり。

師云く、「斧頭元是れ鐵。」進んで云く、「菩提露を滴して楊柳煙を籠む、是れ瞿曇の眞面目なること莫しや。」師云く、「驢鞍橋を認めて阿爺の下領と作すこと莫れ。」進んで云く、「世尊初生下の時、周行七歩、一手は天を指し一手は地を指す、是れ什麼の心行ぞ。」師云く、「鐵丸縫罽無し。進んで云く、「天上天下唯我獨尊と稱す、是れ傍若無人なるにあらずや。」師云く、「他後、雲門一棒の有る在り。進んで云く、「雲門の棒頭、還つて相當るや也た未だしや。」師云く、「焦搏打著す連底の凍。」

乃ち云く、「地を指し天を指して獨尊と稱す、顛言倒語卒に論じ難し。金容萬德誰有つてか看ん、徧界堂堂として常に獨り存す。然も是の如くなりと雖も、一杓の惡水更に放過し難し。拂子を以て禪床を撃つこと一下す。

結夏小參、僧問ふ、「結制已前月白く風清し、豈に是れ慧身を成就する底の時節にあらずや。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「結制已後風清く月白し、甚麼の處に向つてか剋期取證せん。」師云く、「三生六十劫。」進んで云く、「今夜小參緊要の一句、結制の前後に落ちず、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「勘破了也。」進んで云く、「和尚緩天の網子を布いて襦子を籠絡す。忽ち如し金剛圈を透得する底の漢有らば、亦作麼生か他を羅籠し得ん。」師云く、「森森たる夏木杜鵑啼く。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し、隨處に主と作れば、立處皆眞なり」といつて便ち禮拜す。師云く、「且く地に坐して商量せよ。」

乃ち云く、「鵝護の雪薦人の冰、古今結制の榜樣、襦子禁足の風規、三月九句の内、七尺單前に於て身心を澄澹し本智を成熟す。情と無情と一齊に安居、前無く後無く同時に寂定、之を大圓覺を以て我が伽藍と爲し、身心、平等性智を安居すと謂ふ。若し其れ境を逐ふて走作し、物に隨つて紛拏せば、此の處り有ること無けん。正與麼の時、本色行脚の師僧此の 保社に入るか、此の保社に入らざるか。」拂子を撃つて云く、「金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。」

復た擧す、「僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」韶陽只だ箇箇鐵壁を以て、戸牖と爲し去らんことを要す。山僧は然らず、若し人有つて如何なるか是れ諸佛出身の處と問はゞ、便ち佗に對して道はん、鷲峰の山色青更に青と。且く道へ、那箇か親、那箇か疎、分明に辨別して看よ。」

① 山谷、元明に寄する詩に云く、「本、江國と保社を成す。」保社は保伍同社の義なり。

次の日上堂、僧問ふ、「樹頭紅稀に林下綠暗し、好箇の時節、請ふ師提唱せよ。」師云く、「萬里一條の鐵。」進んで云く、「恁麼ならば則ち薰風自南來、殿閣生微涼。」師云く、「之を見て取らざれば、之を思ふこと千里。」進んで云く、「今朝盡く是れ護生安居、當に何事をか圖るべき。」師云く、「黒衣を著け黒柱を護る。」進んで云く、「朝には西天に行き、暮には東土に歸るが如きんば、還つて禁足の分有りや。」師云く、「我が者裏、喚んで走作の漢と作す。」進んで云く、「學人今夏和尚に依附す、何の方便か有る。」師云く、「只だ此の一間何れよりか來る。」進んで云く、「若し樓に登つて望ますんば、焉んぞ滄海の深きこ

とを知らん」といつて便ち禮拜す。師云く、「何ぞ必ずしもせん。」
乃ち云く、「今日是れ結制、一衆各禁足、眼眸重きこと千斤、堂裏兩脚を仰ぶ。是れ今の什麼の道理ぞ。三條椽下に摸索せよ。」

上堂、僧問ふ、「學人心猿未だ穩かならずして意馬奔馳す、願はくは方便を示せ。」師云く、「鐵鏡孔無し。進んで云く、「與麼ならば則ち要津を把斷し去れり。」師云く、「又與麼にし去るや。」進んで云く、「記得す、巖頭、徳山に問ふ、「是れ凡か是れ聖か」と、意、那裏に在る。」師云く、「石は空裡より立つ。」進んで云く、「山使ち喝すと、如何が理會せん。」師云く、「火は水中に向つて焚く。」進んで云く、「若し人有つて、和尚に是れ凡か是れ聖かと問はゞ、響。」師云く、「九九八十一。」

乃ち擧す、「僧、洞山に問ふ、「寒暑到来、如何が回避せん。」山云く、「何を無寒暑の處に向つて去らざる。」僧云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。」山云く、「寒の時は開梨を寒殺し、熱の時は開梨を熱殺す。」山僧は然らず、若し人有つて如何なるか是れ無寒暑の處と問はゞ、只だ他に對して道はん、靜處薩訶と。且く道へ、那箇か親、那箇か疎、諸人各辨別せよ。」

端午上堂、僧問ふ、「今朝正に是れ端午の節、家家艾虎を掛け、處處香湯を浴す。和尚節に應ずる一句、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「黃鶴樓前鸚鵡洲。」進んで云く、「慙麼ならば則ち山は自ら青く、水は自ら緑なり。」師云く、「隨後裏授の

①隨後裏授は、人の後へ隨つて、かさびす義なり。裏は授

漢。進んで云く、「記得す、文殊、善財をして藥を探らしむ。財云く、「手に信せて採り來るに、是れ藥ならざるは無し」と、此の意如何。」師云く、「瞎漢、亂統して什麼をか作ん。」進んで云く、「善財一莖草を拈じて文殊に度與す、文殊云く、「此の藥亦能く人を殺し亦能く人を活す」と、又作麼生。」師云く、「上は是れ天、下は是れ地。」

乃ち云く、「今朝端午の節、妖も無く亦怪も無し。善財の藥を假らず、人人自ら慶快。」拂子を擊つて下座。

半夏上堂、僧問ふ、「一夏已に半を過ぐ、崑崙生鐵を嚼む。半夏已後又如何が履踐し去らん。」師云く、「晨朝は粥、齋時は飯。」進んで云く、「已前已後は且く置く、正當今日直に指示を聞かん。」師云く、「頭、天を頂き脚、地を履む。進んで云く、「記得す、僧、智門に問ふ、「蓮華未だ水を出でざる時如何。」門云く、「蓮華」と、意旨作麼生。」師云く、「水洒げども著かず。」進んで云く、「僧云く、「水を出でて後如何。」門云く、「荷葉」と。還つて端的なりや也た無や。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「水を出づると水を出でざると、相去ること多少ぞ。」師云く、「何ぞ老僧に向つて問ひ將ち來らざる。」進んで云く、「花を移しては蝶の至るを兼ね、石を買うては雲を得ること鏡し」といつて便ち禮拜す。師云く、「呼。」

乃ち拄杖を拈じて云く、「六月熱せざれば五穀熟せず、今日諸人の爲に之を熱し之を熟せしむ。卓拄杖一下して云く、「已に熱し已に熟して後如何。」拄杖を擲下して云く、「天平に地平なり。」

上堂、僧問ふ、「火雲空を焼き普天炎熱、什麼の處に向つてか正に回避することを得ん。」師云く、「迦葉門前風凜凜。」進んで云く、「學人今日 鶴臭布衫を脱却し去れり。」師云く、「淨裸裸地の一句、作麼生か道はん。」進んで云く、「記得す、馬大師、一日陞堂、百丈出でて席を捲く、意那裡にか在る。」師云く、「方木圓孔に投ず。」進んで云く、「大師使ち下座、方丈に歸る、又如何。」師云く、「清風歩に隨つて生ず。」進んで云く、「和尚今日上堂、人の席を捲く無し、豈に是れ無事にし去るにあらずや。」師云く、「子を養つて父に及ばざれば、家門一世に貧し。」進んで云く、「席を捲くと席を捲かざると、那箇か是れ親、那箇か是れ疎。」師云く、「苦なる哉佛陀耶。」

① 鶴臭布衫は汚れて惡臭ある麻の衣と云ふこと。
② 方木は四角なる木、圓孔はまゐりのこと。
③ 以下不得成佛道に至る、法華化城喻品の文。

乃ち云く、「大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道。既に是れ坐道場、甚に因つてか佛法現前せざる。」拂子を擧つて云く、「千里萬里一條の鐵。」

上堂、「一葉落ちて天下秋なり、是の處風流ならずといふこと無し。若し箇の時節を記得せば、終に語黙を將つて耐いす。且く道へ、是れ阿誰が分上の事ぞ。」大衆を喚んで云く、「還つて頂門に獨立することを覺ゆるや。」

解夏小參、僧問ふ、「學人一夏已來、

波波擊擊として過ぎ了る。

剋期取證の事、請ふ師爲に證明せよ。」師云く、「嫩涼秋意簾櫳に入る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し光陰虚しく度らすと。」師云く、「直饒ひ備實に度るも也た何ぞ是ならん。」進んで云く、「記得す、雲門因に僧問ふ、「初秋夏末、前程忽ち人有つて問はゞ、如何が祇對せん。」門云く、「大衆退後」と、意旨作麼生。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」進んで云く、「僧云く、「過什麼の處にか在る。」門云く、「我れに九十日の飯錢を還し來れ」と、又作麼生。」師云く、「平出。」進んで云く、「前程問過の事は即ち且く置く、即今和尚如何が期過せん。」師云く、「一拶を消せず。」進んで云く、「柳栗横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る」といつて便ち禮拜す。師云く、「脚下泥深し。」

① 波波は奔走して安からざるの貌、擊擊は引きまはして忙しきなり。
② 剋は刻と同意、定むること、日數を限り、其の期間中に、大事の證明を取らんと欲するなり。

乃ち云く、「秋初夏末、季熱未だ散せず、自恣賞勞、箇箇缺くこと無し。時に隨ひ節に應じて漏逗せずといふと無く、理に就き事に就いて現前せずといふと無し。軒かに知んぬ會するときは則ち途中受用、龍の水を得るが如く、會せざるるときんば則ち世諦流布、羝羊の藩に觸るるに似たり。畢竟與麼にし去るも、步步清風起る、佛手も遮ること得ず。人心等閑に似たり、路頭踏著して曾て瞋らず。萬里の神光頂後の相、然も是の如くなりと雖も、只だ雲門の我れに九十日の飯錢を還し來れと道ふが如きんば、是れ阿誰が分上の事ぞ。」拂子を擧つて

云く、「樵子の徑に因らすんば、争か葛洪が家に到らん。」

復た翠巖夏末、徒に示す公案を擧して、師拈じて云く、「一畝の地、三蛇九鼠。」

次の日上堂、僧問ふ、「衲僧家四月十五、他を結つて得ず、七月十五、他を解つて得ず、

畢竟什麼の處に向つてか安身立命せん。」師云く、「須彌南畔の閻浮樹。」進んで云く、「與麼ならば則ち

西風一陣來、落葉兩三片。」師云く、「矮子、戯を看る。」進んで云く、「昔老宿有り、一夏師僧の爲に説

話せず、僧有り、嘆じて云く、「我れ只麼に空しく一夏を過す、敢て和尚の佛法を説くことを望まず、

正因の二字を聞くことを得ば也た得てん」と、意旨如何。」師云く、「黄金を抛却して碌駟を捧ぐ。」進

んで云く、「老宿聞いて云く、「閑梨、擧速すること莫れ、若し正因を論せば

一字も也た無し」と道ひ了つて、齒を扣いて云く、「我れ端無く恁麼に道

ふ」と、又作麼生。」師云く、「三千八百。」進んで云く、「隣壁に又老宿有り、

聞いて云く、「好一釜の羹、兩顆の鼠糞に汗却せらる」と、意那裏にか在

る。」師云く、「同病相怜む。」進んで云く、「和尚一夏已來、什麼の法を説い

てか人の爲にす。」師云く、「山青く水緑なり。」進んで云く、「長河を攪いて

酥酪と爲し、大地を變じて黄金と作す。」便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨

げん。」

①金剛明經玄義に、一に正因佛性とは正に中正を謂ふ云々。宗鏡錄二に云く、若し自心を了せば頓に佛慧を成ぜん、謂つ可し百川を會して一源と爲し、衆塵を掃つて一丸と爲し、錘錘を融して一金と爲し、酥酪を變じて一味と爲すことなと。

乃ち擧す、趙州因に僧辭す、州云く、「有佛の處住することを得ざれ、無佛の處急に走過せよ。三千

里外人に逢ふて錯つて擧すること莫れ。」僧云く、「與麼ならば則ち去らじ。」州云く、「摘楊花摘楊花。」

師云く、「趙州若し後語無くんば、須らく是れ人の點檢に遭ふべし。何が故ぞ。風は八月より涼しく、

月は七月より明かなり。」

八月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「月月月初一、雨無きを吉と爲し、今月初一、雨有るを吉と爲す。且

く道へ、吉甚れの處にか在る。」拄杖を卓すること一下して云く、「吉吉、吾れは道はん最も吉と。」拄杖

を靠けて下座。

上堂、「西風一陣來、落葉兩三片。鋼鑿生鐵を著く、佛祖渾べて辨せず。

辨せず辨せず、諸人且く那邊に過ぎよ。」

重陽上堂、僧問ふ、「今朝是れ九九の日、諸方盡く佳辰を賞す。衲僧

門下常機に墮せず、節に應ずる一句、願はくは法要を聞かん。」師云く、「秋晚頰に寒し、今个萬福。」進

んで云く、「只だ菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る底の如きんば、未審し和尚如何か證明

せん。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「古德云く、「重陽九日菊花新なり」と、又是れ什麼の道

理をか呈す。」師云く、「答話を謝す。」

乃ち云く、「菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。靖節只だ其の愛することを知つて、其

の用ひることを知らず、今日重九、作廢生か用ひ得ん。拂子を撃つて云く、「二三三三、二三三三。」
 上堂、擧す、官有り、雲門に問ふ、「佛法は水中の月の如しと、是なりや不や。」門云く、「清波透路無し。」官云く、「和尚何れよりか得たる。」門云く、「再問復た何れよりか來る。」
 官云く、「正與麼の時如何。」門云く、「重疊たり關山の路。」師云く、「雲門、官には針をも容れず、官人私に車馬を通ず。點檢し將ち來れば、兩り俱に失利。何ぞや。」賢聖の法に従つてより來、未だ嘗て殺生せず。「拄杖を卓して下座。」

開爐上堂、「無賓主の話、十八の高人、一回擧し來れば一回是れ新なり。其の意旨を問ふに及んで、大半便ち道ふ、知らざる最も親しと。阿呵呵、只だ爐下煖かにして春に似んことを要す。」

上堂、「南山の松北嶺の雪、夜雨晝晴、太平節を得たり。達磨東土に來り二祖西天に行く。行脚の禪和子、目前を失却すること莫れ」といつて、喝一喝す。

上堂、「一切の諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆此の經より出づ」と。忽ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「君に勸む此の一盃の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人無からん。」

①増一阿含經に曰く、「殊囉、城に入り、乞食して還り來りて佛に白して云く、我れ向きに城に入り乞食す、婦の重妊を見て我れ是の念を作す、衆生苦を受く、何ぞ斯に至る。佛言く、汝往いて婦人に告げて言へ、我れ賢聖の法に従つてよりこのかた、未だ嘗て殺生せず、此の至誠の語を持す、此の母人をして他無きを得せしめんと。殊囉教の如くす、母人聞き已つて胎み、解脫することを得たり。」

②一切諸佛云々、金剛經の文。

冬至小參、僧問ふ、「葭管灰を飛し、繡紋線を添ふ。陰陽造化に涉らず、願はくは法要を聞かん。師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」進んで云く、「慙麼ならば則ち岸柳未だ眼を開かず、庭梅先づ花を發く。」師云く、「好し與麼にし去れ。」進んで云く、「記得す、僧、百丈に問ふ、「如何なるか是れ奇特の事。」丈云く、「獨坐大雄峰」と、還つて端的なりや也た無や。師云く、「要津を把定して凡聖を通せず。」進んで云く、「僧禮拜すと、又作廢生。」師云く、「頂上を撈破せず。」進んで云く、「丈便ち打つと、如何が理會せん。」師云く、「令に依つて行ず。」進んで云く、「古人は則ち且く置く、即今和尚に如何なるか是れ奇特の事と問はゞ、如何が祇對せん。」師云く、「三十年後、面熱し汗出でん。」進んで云く、「虎穴に入らずんば、争か虎子を得ん」といつて、便ち禮拜す。師云く、「我が爲に將ち得來れ看ん。」

乃ち云く、「六陰謝し盡して一氣方に生ず、鐵樹花を開き、石筍條を抽んづ。衲僧家若し者裏に向つて轉身し來らば、自然に枯枯燥燥、得失是非一時に放却せん、也た是れ省錢飽き易き底の事。古來淨悄悄地なるも、之を争ふに足らず、何ぞ須ひん歩を運んで阿伽門を念ずることを。而今多くは是れ時を知つて節を知らず、猶ほ妨げず東西南北鳥飛び兔走ることを。直饒ひ山僧が背後に向つて問訊するも、也た山僧敢

③虛堂錄九蓮庵忌拈香に云く、「松源の省錢を使はず、衲僧の鑽口訣を用ふるに慣る。侯麟錄に云く、「五代周の太祖の時、王章財賦を掌る、舊、出入皆八十を以て陌と爲す、章始めて入る者は八十、出づる者は七十七を以て之れを省陌と謂はしむ。」

④詩經説約二邪風に、「憂心悄悄群小に憚らる、」註に「悄悄は憂への貌。」

⑤阿伽は梵語、清淨水、功德水等の譯あり。

て横に點頭だもす可からず。何が故ぞ。拄杖を卓して云く、「國清うして才子貴く、家富んで小兒嬌る。」復た擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ趙州。」州云く、「東門南門西門北門。」僧云く、「這箇を問はず。」州云く、「爾趙州を問ふ」と。拈じて云く、「機を以て機を奪ひ、毒を以て毒を攻むることは、趙州老漢之れ無きにあらず。其れ奈何せん八十行脚の事、猶ほ未だ全く用ひざることに在り、若し全く用ひ去ることを得ば、兒孫滿堂今に至るまで繁興せん。」

次の日上堂、僧問ふ、「霜大野に飛び風林丘を戒しむ、普天普地寒威凛然、更に什麼の處に向つてか回避し去ることを得ん。」師云く、「陽氣發する時硬地無し。」進んで云く、「瓊瓊未だ動せざるに全機顯露、朕兆纔に分れて觀體現成。時節に涉らず言薦を借らず、親切の一句願はくは擧揚を聞かん。」師云く、「家家觀世音。」進んで云く、「慈明牌を掲げ、皓老布衲を洗はず。點檢し將ち來れば、早く是れ劍去つて久し。寶山今日別に條章有ること莫しや。」師云く、「一冬二冬、又手當何。」

乃ち云く、「瑞雪地に滿ち、祥雲天に翻る。龍寶山頂和氣霽然、好箇の時節君が爲に報じて知らしむ。一氣言はず有象を含む、萬靈何れの處にか無私を謝せん。」

進退兩班を謝する上堂、「竿頭に一步を進めて大千沙界に全身を現す、歩を退いて已に就く、萬が中一箇も失はず。蓋し是れ與麼の人にして與麼の行履を作す者なり、大衆此の人を見んと要すや。雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は洞底に流れて太忙生。」

臘八上堂、僧問ふ、「釋迦老子六年冷坐、臘八の夜に返到して始めて方に開悟し去る。未審し今の何事をか悟り得たる。」師云く、「鼻孔、上唇に掛く。進んで云く、「未だ明星を見ざる時、已に雪山雪白く、明星を一見して後、又雪山雪白し。這裏端的の事、和尚如何が甄別せん。」師云く、「鐵丸縫解無し。」進んで云く、「只だ一人有り、眞を發して源に歸するが如きんば、大地の衆生何れの處に向つてか去る。」師云く、「爾が眼睫上に向つて去る。」進んで云く、「恁麼ならば則ち謂つ可し、劫外一壺の春、更に好し優曇花綻びて普天香し」といつて、便ち禮拜す。師云く、「道ふことは即ち道ひ得たり。」

乃ち云く、「盡く謂ふ、世尊膺月八夜成道と、是なることは則ち是、敢て諸人に問ふ、如何なるか是れ成する底の道。若し是れ識得せば、恩を報ず

① 瓊瓊は天文を量るの器械なり。
② 朕兆は物の生ぜんとする「きざし」なり。
③ 觀は見と同じ。
④ 楞嚴六破に云く、「梵音阿那波婁吉底輪、此に觀世音と曰ふ、能所境智に従ひ、以て名を立つる也、佛に値ひ法を觀す、皆、其の師とする所、師資相承相連無し、耳聞思修慧諸行

の通途なり、一佛の音聲を以て群品を化せざる有る無く、一機の耳根より教を聞き解悟せざる有る無し、是に由つて彼の佛此れ從り入らしむ。」
⑤ 呂氏春秋十五に云く、「楚人江を渉る者有り、其の劍舟中より水に墜つ、遽に其の舟を刻んで曰く、是れ吾が劍の墜つる所と、舟止つて其の劍を求むるより水に入り、之れを求む、舟已に行く、而して劍行せず、劍を求むる此くの若き、惑はずや。」
⑥ 行は躬行、履は履踐なり。
⑦ 法華序品に云く、「初善、中善、後善、其の義深遠、其の語巧妙。」徐注に云く、「初め頓教大乘七善を開くなり、初中後は即ち頓教、序正、流通なり、此れを時節善と名づく、其の義深遠則ち頓教了義の理、此れを名づけて義善と爲す、其

るに分有らん、若し也た識不得ならば、拂子を擧つて云く、^①初中後三大劫。

除夜小參、僧問ふ、「舊歲今宵去る、甚れの處に向つてか去る。」師云く、「頭上一堆の塵。」進んで云く、「新年明日來る、甚れの處よりか來る。」師云く、「脚下三尺の土。」進んで云く、「還つて新舊に涉らざる底有りや也た無や。」師云く、「有り。」進んで云く、「如何なるか是れ新舊に涉らざる底。」師云く、「大底鼻孔向下に垂る。」進んで云く、「記得す。」感首座、法昌に問ふ、「昔日北禪分歲、露地の白牛を烹る、和尚今夜分歲、何の施設か有る。」昌云く、「騰雪天に連つて白く、春風戸に通つて寒し」と、意旨作廢生。師云く、「兩口一舌無し。」進んで云く、「感云く、『大衆如何が喫せん。』昌云く、『嫌ふこと莫れ冷淡にして滋味無きことを。一飽能く萬劫の飢を消す』と、此の意如何。」師云く、「鬼、漆桶を争ふ。」進んで云く、「感云く、『是れ何人か置辨す。』昌云く、『無慚愧の漢、來處も也た知らず』と、又作廢生。」師云く、「彼此出家兒。」進んで云く、「古人は即ち且く置く、和尚今夜分歲、何の施設か有る。」師云く、「且く待て、^②童行有つて報じ去らん。」進んで云く、「大衆如何が喫せん。」師云く、「鼻よりして入る可からず。」進んで云く、「是れ何人か置辨す。」師云く、「衣鉢閣中常に相逢ふ。」進んで云く、「和尚與廢の施設、古人とは是れ同劫。」

の語巧妙即ち頓教八音の吐く所なり、理を會し直に菩薩心を説く、此れを語善と爲す云云。

①會元十六に云く、「北禪賢の法嗣法昌侍過禪師、感首座と歲夜湯を喫する次で、座曰く、昔日云々。」

②南海寄歸傳に云く、「白衣、苾芻の所に詣りて、専ら佛典を誦し、落髮を求むるを童子と號す」と。即ち行者の屬なり。

か是れ別か。師云く、「備に許す、疑ふこと三十年せよ。」進んで云く、「鶴は飛ぶ千尺の雪、龍は起る一潭の水」といつて、便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」乃ち云く、「今宵膺月三十夜、家家爆竹結尾を賞す。或は歌吹の音を操り、或は鐘鼓の響を促して、來日新年の吉を祝し、萬歲松栢の操を壽す。龍寶山頂の人、未だ必ずしも點頭せずんばあらず。只だ是れ終に悄然の機に墮せず、豈に等閑の風味を將つて、以て合山の龍象に供養せんや。然も是の如くなりと雖も、衆と分歲、各各須らく飽足すべし。拂子を擧つて云く、「趙州の喫茶、雲門の胡餅。」復た擧す、僧、古徳に問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」徳云く、「看よ看よ、膺月盡く。」師云く、「大衆此の僧を見んと要すや、當頭霜夜の月。古徳を知らんと要すや、任運前溪に落つ。然も是の如くなりと雖も、^③靜處婆娑詞。」

③靜處婆娑詞とは、靜かなる處で語するの意。

正旦上堂、僧問ふ、「瑞草嘉運に生じ、林花早春に結ぶ。好箇の時節願はくは擧揚を聞かん。」師云く、「箇箇道體、起居萬福。」進んで云く、「恁麼ならば則ち元正啓祥、萬物咸く新なり。」師云く、「一句に道著す。」進んで云く、「正當今日大年朝、如何なるか是れ新年頭の佛法。」師云く、「風暖かにして鳥聲碎け、日高うして花影重る。」進んで云く、「僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ清淨法身。」門云く、「花藥欄」と、意旨作廢生。」師云く、「眼睛を刺破す。」進んで云く、「僧云く、『便ち恁麼にし去る時如何。』門云く、『金毛の獅子』と、又作廢生。」師云く、「兩重の公案。」進んで云く、「即今和尚に問ふ、如何なるか

是れ清淨法身。師云く、「千峰雪色寒じ。」

乃ち云く、「今日大年朝、山僧渾べて道ふことを解す、大衆箇箇道體、起居萬福。且く道へ、是れ佛法は是れ世法か。」拄杖を卓して云く、「東西南北、吾が道大いに亨る。」

元宵上堂、僧問ふ、「今宵處處燈を掲げて萬民共に樂む、和尚人の爲に心燈を剔起し來れ看ん。」師云く、「天晴れて日頭出づ。」進んで云く、「慙麼ならば則ち謂つ可し、光明寂照徧河沙と。」師云く、「妨げず道著することを。」進んで云く、「僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ室内一盞の燈。」林云く、「三人龜を證して驚と作す」と、意、那裏にか在る。」師云く、「便宜に遇ふこと空なり。」進んで云く、「與麼ならば則ち昔日の香林、今日の和尚」といつて、便ち禮拜す。師云く、「去ることを好くし、用ふることを好くす。」

乃ち云く、「燈燈相續いで燈燈已むこと無し。且く道へ、此の燈何れの處よりか來る。」卓拄杖一下して云く、「我見燈明佛、本光瑞如此。」

上堂、僧問ふ、「春山亂青を疊み、春水虛碧を漾はす。好箇の時節、願はくは法要を聞かん。」師云く、「雪竇の背後に向つて問訊すること莫れ。」進んで云く、「慙麼ならば則ち日は自ら暖かに、風は自ら和す。」師云く、「老僧が背後に向つて問訊することを休めよ。」進んで云く、「趙州、一庵主を訪うて云く、「有りや有りや。」主、拳頭を豎起す。州云く、「水淺うして是れ舟を泊むる處にあらず」と、意旨作廢生。」師

云く、「蠅、血を見る。」進んで云く、「州又一庵主を訪うて云く、「有りや有りや。」主、拳頭を豎起す。州便ち禮拜讚歎す、如何が委悉せん。」師云く、「鶻、鳩を提ぐ。」進んで云く、「問答已に一般、甚と爲てか一人を肯ひ一人を肯はざる。」師云く、「兩頭に落ちざることを看取せよ。」進んで云く、「若し人有つて、有りや有りやと問はゞ、未審し和尚如何が祇對せん。」師云く、「且去喫茶。」

乃ち擧す、三祖大師道く、「一即ち一切、一切即ち一。」忽ち拄杖を拈じて云く、「者箇は是れ寶山が拄杖子、阿那箇か是れ一。」拄杖を卓すること一下して云く、「只だ能く此の如くならば、何ぞ終らざることを慮らん。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「法身無爲諸數に墮せず、釋迦老子甚に因つてか涅槃の相を示す。」師云く、「涅槃の諸數に墮せざるが爲なり。」進んで云く、「古徳道く、「十方薄伽梵、一路涅槃門」と、且く道へ、如何なるか是れ涅槃門。」師云く、「日は東に出で夜西に落つ。」進んで云く、「五通仙人、世尊に問うて云く、「世尊に六通有り、我れに五通有り、如何なるか是れ那一通。」世尊、「五通仙人」と召す、意旨作廢生。」師云く、「平生の肝膽人に向つて傾く。」進んで云く、「仙人便ち應諾す、世尊云く、「那一通爾我れに問ふ」と、如何が理會せん。」師云く、「依稀として曲れるに似て纔に聽くに堪へたり。又風に別調の中に吹かる。」進んで云く、「後來雪竇、著語して云く、「老胡、元那一

薄伽梵は、衆徳を總攝し、至尊の義、佛の敬稱なり、これに四義又は六義を具す。四義とは一に有徳に名づけ、二に巧に諸法を分別するに名づけ、三に名聲あるに名づけ、四に能く姪姪を破るに名づく。六義とは一に自在、二に熾盛、三に遍照、四に名稱、五に吉祥、六に尊貴。かく多義を含むが故に五種不翻の一なり。

通有ることを知らず、却つて邪に因つて正を打す」と、意、那裏にか在る。師云く、「無影樹下の合同船。進んで云く、「即今和尚に如何なるか是れ那一通と問はゞ、未審し如何が祇對せん。師云く、「三跳後。」

上堂、擧す、雲門云く、「我れ諸人を看るに、二三の機中尙ほ構得するこ
と能はず、空しく袈衣を披して何の益かある。師云く、「山僧は然らず、我
れ諸人を看るに、悉く是れ大機大用の人、剛ひて作佛を要して何の益かあ
る。住みね住みね。一做さゞれば二休せず、風流ならざる處也た風流。」

上堂、「春山は青く春水は緑なり、春雲片片、春鳥喃喃。敢て諸人に問ふ、
吾が宗門中是れ放開か是れ控聚か。个个寮舎に歸つて摸索して看よ。」

四月旦上堂、慕に拂子を竖起して云く、「西天の二十八祖、東土の六祖、
盡く拂子頭上に在つて、心と説き性と説き、立と論じ妙と論ず。山僧忍
俊不禁にして、怪を見て笑ふこと一聲、箇箇面熱し汗出づ。諸人還つて見
るや、若し也た見すんば、拂子を撃つこと一下して云く、「滿地の落花春已
に過ぐ、綠陰空しく鎖す舊莓苔。」

佛生 日上堂、「天を指し地を指して 尊貴に墮す、滿目の青山笑つて點頭す。雲門令を行じてより

後、風流ならざる處也た風流。諸人者裏に向つて會得せば、妨げす恩を報するに分有らん。其れ如し
未だ然らずんば、靜處婆娑訶。」

結夏小參、僧問ふ、「看雲亭上月明明、古巖松下風拂拂。見成公案遮欄を

絶す、言詮に涉らず、願はくは法要を聞かん。師云く、「九九八十一。」進んで
云く、「恁麼ならば則ち山は自ら青く、水は自ら緑なり。師云く、「隨後裏搜
の漢。進んで云く、「九旬禁足、剋期取證は則ち問はず、七尺單前、三條椽
下、學人一夏、如何が履踐せん。師云く、「眼畔重きこと千斤。進んで云く、
「古徳道く、「參は須らく實參なるべく、悟は須らく實悟なるべし」と、如何
なるか是れ實參。師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」進んで云く、「實悟底又如
何。師云く、「何ぞ必せん。進んで云く、「實參實悟、畢竟作麼生。師云く、
「心人に負かざれば、面に懸づる色無し。」

乃ち云く、「言前句後、舌根裏に身を藏し難し、向上向下、慕に 葫蘆子
を搗揆す。背面終に好手に落ちず、首尾何れの處にか萬類を該ねん。遠く
象外に超え迥に天真を脱す。是の處雲山目に溢る、鬧市の大蟲、誰か見ること解せざらん。見る
ことは即ち見る、甚に因つてか文殊の頭は黒く普賢の頭は白し。會得せば三月安居、九旬禁足。規に

① 字典に構は成なり、しなふせ
る。義、こゝは手に入れると
譯すべし。
② 人天眼目曹山三種障の章に曹
山云く、凡情聖見は須らく三
種障を具すべし。一には披毛
戴角、二には不斷聲色、三に
は不受食。稠布納問ふ、披毛
戴角は是れ甚麼の障ぞ、曰く、
是れ顛墮、問ふ、不斷聲色は
是れ什麼の障ぞ、曰く、是れ
隨墮、問ふ、不受食は是れ什
麼の障ぞ、曰く、是れ尊貴障
なり。六根門頭見聞覺に就
いて、只だ是れ他に汚染せら
れざるを將に障と爲す云々。

③ 清蘆は瓢箪なり。
④ 韓非子九に云く、「亂暴太子と
邯鄲に質たり、魏王に謂つて
曰く、今一人市に虎有りと言
はゞ、王之れを信ぜんや、曰
く信ぜず、二人市に虎有り
と言はゞ、王之れを信ぜんや、
曰く信ぜず、三人市に虎有り
と言はゞ、王之れを信ぜんや。
曰く寡人之れを信す。亂暴曰
く、夫れ市の虎無き明か也、
然り而して三人言つて虎と成
す、今邯鄲の魏を去るや、市
に違し、議臣三人に過ぐ、願
はくは王之れを察せよ。」大蟲
は虎なり。

循ひ矩を守つて脚底五色の索を帯びす。其れ如し未だ然らずんば、靜處婆訶。

復た臨濟、衆に示して云く、「一人は孤峰頂上に在つて出身の路無く」の公案を擧して、師拈じて云く、「古來作者、嶮を弄して草に落つ、等しく是れ禁じ難し。只だ是れ人人背後に在つて、點頭せんことを要す。大衆還つて會すや。鬱頭藍已に全身を定す、何ぞ假らん周行して七歩に跨ることを。」

次の日上堂、僧問ふ、「如來の聖制、禁足護生、衲僧朝に西天に遊び暮に東土に歸る。學人此間禁足即ち是か、游歸即ち是か。」師云く、「南番の大

舶主、本、此土の商人。」進んで云く、「已に道ふ禁足安居と、甚に因つてか

文殊、三處に夏を度る。」師云く、「曲終つて人見えす、江上數峰青し。」進んで云く、「記得す、雲門、衆に示して云く、「十五日已前は偏に問はず、十五日已後一句を道ひ將ち來れ」と、意旨作麼生。」師云く、「什麼の處にか去

る。」進んで云く、「自ら代つて云く、「日日是れ好日」と、又作麼生。」師云く、「法堂上寸草生せず。」

乃ち云く、「今朝是れ結制、敢て諸人を諷却せず、只だ現量に因つて以て正法眼藏を擧揚せん。」麤に柱杖を拈じて卓一下して云く、「者箇は是れ龍寶が拄杖子、阿那箇か是れ正法眼藏。若し也た會せずんば、雨過ぎて遠山綠なり」といつて、柱杖を靠けて下座。

解夏小參、「三月安居、九旬禁足、山色夕陽の時、泉聲中夜の後、圓覺伽藍、平等性智。竹に上下

の節有り、松に古今の青無し。今の裏取證無し、誰か慧身を成熟せん。正與麼の時節、衲僧活脱の

處、行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば便ち坐す。東西南北遮障有ること無く、運奔執捉

全く象外に超ゆ。諸人一夏、眉を結び肩を交ふ、今日何ぞ必ずしも苦口叮囑せん。然も此の如くなり

と雖も、拂子を撃つて云く、「君に勸む此の一盃の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人無からん。」

復た翠巖、夏末、衆に示す公案を擧して、師拈じて云く、「翠巖、衆の爲

に力を竭すこと少からず、只だ今の三枚把不住の老凍膿を得たり。若し

中郎が鑑有らば、何ぞ野舎の薪に同じからん。」

上堂、「眞空は有を礙へず、眞空は色に異ならず。忽ち拄杖を拈じて卓一

下して云く、「且く道へ、是れ有か是れ不有か、是れ色か是れ色にあらざる

か。若し是れ劄利の衲僧ならば、水に和して乳を喫せん。其れ或は跼蹐せ

ば、拄杖鼻孔を穿卻せん。」又卓一下す。

大王上將、山に入つて百味の佳齋を下し、合山の供養を伸ぶるを謝し奉る上堂、僧問ふ、「日月輪

邊氣象高く、魚龍穴下蟠根固し。」師云く、「好し。」進んで云く、「上將忽ち山に入つて奇齋を下し來つ

て、大衆に供養す。未審し和尚什麼の法を説いてか此の恩を報ずることを得ん。」師云く、「風行けば草

①大般涅槃經後分上遺教品に曰く、佛復た阿難に告げ玉はく、鬱頭藍非外道法中に入り、四禪八定を修學し、其の教を受行す、吾れ成佛し來つて、其の法を毀謗し漸漸誘導す。

②字彙に舶は海中の大船と。

③後漢書五十蔡邕が傳に曰く、「吳人薪を燒き以て爨く者有り、邑火烈の聲を聞き、其の良木なるを知り、因つて請ふて我を爲る、果して美音有り、而して其の尾猶ほ焦く、故に時人名づけて焦尾琴と曰ふ。」

偃す。進んで云く、「慙廢ならば則ち蘋葉風涼しく、桂花露香し。」師云く、「好し也た與廢にし去れ。」進んで云く、「只だ達磨未だ來らざる已前の如きんば、還つて這箇の消息有りや也た無や。」師云く、「銀山鐵壁。」進んで云く、「來つて後又如何。」師云く、「鐵壁銀山。」進んで云く、「來と未來とは且く置く、如何なるか是れ這箇の消息。」師云く、「鐵壁鐵壁、銀山銀山。」進んで云く、「學人今日小出大遇」といつて、便ち禮拜す。師云く、「手を撒して那邊に去れ。」

乃ち拄杖を横へて云く、「大士三十二應身、天大將軍、最も是れ眞、諸障を摧蕩して慶快を與へ、百福を提持して窮貧を救ふ。大衆者箇の大機大用を會せんと要すや。」拄杖を卓して云く、「看よ看よ、巍巍堂堂、煒煒煌煌。四海九州、威風凜凜。」

材木採り用つて歸る普請並に善源の雲和尚を謝する上堂、拄杖を拈じて云く、「萬仞峰前千仞の底、者邊那邊良材を撰ぶ。斧頭用ひ得たり諸人の力、集めて此に大成して相呼んで回る。正與廢の時作廢生。」拄杖を卓すること一下して云く、「行いては到る水の窮る處、坐しては見る雲の起る時。」

上堂、驀に拄杖を横へて擧す、肇法師云く、「近うして見る可からざる者は物の性のみ。」拄杖を卓

①首楞嚴六に云く、「爾の時觀世音菩薩即ち座より起つて、佛足を頂き、而も佛に白して言く、云々、世尊我れ觀音如來を供養するに由つて、彼の如來、我れに如幻聞、熏聞、修金剛三昧を授けらる、佛如來と慈力を同じうする故に、我が身三十二應と成り、諸の國土に入らしむ。」
②巍巍は山の聳ゆる貌、堂堂は威儀の盛なる貌、容觀威儀の盛にして犯すべからざる形容詞なり。
③文選注に、「煒煒煌煌は、皆、光色亂動、目眩暈して定らざるなり。」
④善源の雲、未だ詳にせず。
⑤肇論物不遷論の文。

して云く、「者箇は是れ寶山が拄杖子、阿那箇か是れ物の性。」又拄杖を卓して云く、「一槌兩當、蓋覆し將ち來る。」

宗持禪尼、逆修拈香、當陽突出して迥に根塵を脱す、天を薰じ地を炙る。舉體全眞、乃佛乃祖、佗に由つて氣を出し、衲僧の巴鼻此れ従り方に親し。況んや是れ宗持大姉、山僧が手を借つて拈出するをや。等閑に一見便見せば、自然に一得永得、生生の正果を感じ、世世の正因を結ぶ。馥郁たる香風徧界に清く、霽然たる和氣恰も春の如し。

除夜小參、年窮り歳盡く、黒漆桶裏に墨汁を盛る。交頭結尾、半夜烏雞飛んで天に上る。所以に師僧家、空劫已前威音那畔より、一日、日未だ嘗て一日を逐はず、一時、時未だ嘗て一時に隨はず。墻壁瓦礫、露柱燈籠、背後面前、眞珠燦爛たり。然も是の如くなりとも雖も、今夜諸人と分歳、其の中國の爲にする一句作麼生。拂子を擧つて云く、「村裏盡く好く儺を驅る、來年定めて是れ熟年ならん。」

①逆は預なり、預め供養を修すること逆修と云ふ。灌頂隨願往生一方淨土普賢菩薩所問經に詳りに出づ。

復た擧す、香林因に僧問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」林云く、「看よ看よ、鴈月盡く」と。師云く、「山僧は然らず、若し人有つて此の問を發せば、便ち佗に答へて道はん、昨日相見の人と。忽ち是れ何人ぞと問はゞ、劈口に便ち擱せん。」

正旦上堂、僧問ふ、「年年是れ好年、日日是れ好日。正與麼の時、請ふ師祝聖せよ。」師云く、「萬年松下に茯苓有り。進んで云く、「恁麼ならば則ち萬民業を樂み謳歌を唱ふ。」師云く、「好音耳に在り、人皆聞く。」進んで云く、「記得す、僧、古徳に問ふ、「新年頭、還つて佛法有りや也た無や」と、意、那裏にか在る。」師云く、「舌頭骨無し。」進んで云く、「徳云く、「元正啓祚、萬物咸く新なり」と、的當なりや也た無や。」師云く、「藕絲孔裏に大鵬に騎る。」進んで云く、「只だ古人の祇對するが如きんば、如何が辨別し去らん。」師云く、「風暖にして鳥聲碎く。」進んで云く、「一句了然として百億を超ゆ。」師云く、「富んでは千口も少しと嫌ふ。」進んで云く、「但だ學人のみに非ず、四衆咸く恩に霑ふ」といつて、便ち禮拜す。師云く、「也た何ぞ妨げん。」

乃ち云く、「今朝大年朝、東廊下にも相賀し、西廊下にも相賀す。喚んで佛法底と作さば、拂子他の與に點頭せん、喚んで世法底と作さば、拄杖他の與に點頭せん。且く道へ、諸人阿那箇の點頭に孰與ぞ。若し此に於て會得せば、便ち山僧が適來个个道體、起居萬福と道ふことを解せん。」

二月旦、材木を出すが爲に大衆を勸下する上堂、「梅腮柳面香を吐き榮を競ふ、春山春水緑を湛へ藍を疊む。衲子清興、時なる哉時なる哉、備に許す始めは芳草に隨ひ去り、又須らく後に落花を逐うて回るべし。忽ち回り來る時如何。箇箇萬福萬福。侍者、急手にこの好茶を點じ將ち來れ。」
佛生日上堂、僧問ふ、「青春已に去り、朱夏初めて臨む。瞿曇今日降生、此れは是れ現成底、請

ふ師別に擧揚せよ。」師云く、「健丸縫縛無し。」進んで云く、「二月十五會て滅せず、甚に因つてか鶴林中に雙趺を示す。」師云く、「天上の星、地下の木。」
僧云く、「四月八日會て生せず、甚と爲てか九龍、水を吐いて金軀を灌沐す。」師云く、「九九八十一。」僧云く、「天を指し地を指して、天上天下唯我獨尊と道ふ。」師云く、「芍薬花開く菩薩の面。」僧云く、「雲門云く、「我れ當時若し見しかば、打殺して狗子に與へて喫卻せしめん」と、意旨作麼生。」師云く、「邪に因つて正を打す。」僧云く、「雪竇云く、「我れ若し見しかば、便ち與に禪牀を掀倒せん」と、意、那裏にか在る。」師云く、「手を把つて相共に高峯に上る。」僧云く、「二大老の用處、是れ同か是れ別か。」師云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」僧云く、「上來一一指示を蒙る、向上宗乘の事、又如何。」師便ち喝す。

●爾釋釋天に、「春を青陽と爲す、氣青くして溫暖、夏を朱明と爲す、氣赤くして光明。」

乃ち拄杖を拈じて卓一下して云く、「淨法界身、天を撐へ地を拄ふ、本出沒無し、瓜を種きて瓜を得たり。便ち恁麼に領じ去らば、恩を報するに分有らん。其れ如し未だ然らずんば、二龍溫涼の水。」
結夏小參、僧問ふ、「線暗く紅稀にして孟夏漸く熱す。應節の一句願はくは提唱を聞かん。」師云く、「薰風自南來、殿閣生微涼。」僧云く、「禁足安居、誰か我れに似たる、角を掛くる羚羊、蹄を露さす。」師云く、「路の上る可き有れば、高きも人更に行く。」僧云く、「朝に西天に到り、暮に東土に歸る。是れ什麼人の分上の事ぞ。」師云く、「是れ安居底の分上の事。」僧云く、「恁麼ならば則ち一聲の黃鳥青山の

國譯大燈師語錄

外、風光を占斷して主人と作る。那裏よりか與廢地なることを得たる。僧云く、「松源に三句有り、吝參を許さんや也た無や。」師云く、「何ぞ妨げん、問ひ將ち來ることを。」僧云く、「大力量の人、甚に因つてか脚を擡げ起さざる。」師云く、「草鞋露に和して重し。」僧云く、「口を開くこと甚に因つてか舌頭上に在らざる。」師云く、「牙齒一具の骨を見ず。」僧云く、「明眼の衲僧、甚に因つてか脚跟下紅絲線斷えざる。」師云く、「脚頭也た脚底。」僧云く、「學人今夜小出大遇」といつて便ち禮拜す。師云く、「人に向つて作廢生か舉せん。」

乃ち云く、「西天の嚴規、東土の嚴令、齊しく箇の劊利の漢、大坐當軒底の事有ることを知らんことを要す。克く此の事を得れば、三月安居、九旬禁足、天も覆ふこと得ず、地も載すること能はず。日用四威儀の中、全く聲色堆上に坐して、専ら聲色堆の主宰と做る。箇の中領覽有れば、都べて魔界に墮す。所以に道ふ、大圓覺を以て我が伽藍と爲して、身心平等性智に安居すと。警喜警瞋、理會無し、新羅夜半日頭明かなり。然も是の如くなりとも雖も、諸人切に忌む腦を刺して膠盆に入ること。何が故ぞ。」良久して云く、「綠樹陰濃にして夏日長し、樓臺影を倒にして池塘に入る。」

復た徳山小參答話せず、問話の者有らば三十棒といへる公案を擧して、師拈じて云く、「盡く謂ふ、口を開けば即ち錯り、舌を動すれば即ち乖くと。殊に知らず九曲の黄河、底に混じて流る。」
次の日上堂、僧問ふ、「西天の舊令、東土共に遵ふ。諸方様に依つて葫蘆を畫く。龍寶門下の標格、

作廢生。」師云く、「山僧に孤負すると莫れ。」進んで云く、「綠水青山元來安居、露柱燈籠終日禁足、衲僧家甚に因つてか別に規矩を立す。」師云く、「嚴師、好弟子を出す。」進んで云く、「恁麼ならば則ち行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。」師云く、「更に須らく子細にすべし。」進んで云く、「記得す、乾峰、衆に示して云く、「法身に三種の病、二種の光有り、須らく是れ一一透得して始めて穩坐地を解すべし。」意那裏にか在る。」師云く、「緇に想ふ、會理に人有ること。進んで云く、「雲門便ち衆を出でて云く、「庵内の人、什麼と爲てか庵外の事を見ざる」と、意旨作廢生。」師云く、「果然。」進んで云く、「峰呵呵大笑すと、又如何。」師云く、「身を藏すに路無し。」進んで云く、「門云く、「猶ほ是れ學人が疑處在り。」如何が委悉せん。」師云く、「争臣有るときは則ち君不義に落ちず。」進んで云く、「古人底は且く置く、作廢生か是れ正當今日の法要。」師云く、「水到れば渠成る。」

①經に云く、「天子、諍臣七人有れば、無道と雖も其の天下を失はず、諸侯、諍臣五人有れば無道と雖も其の國を失はず、大夫、諍臣三人有れば、無道と雖も其の家を失はず、士、諍友有れば則ち令名を離れず、父、諍子有れば則ち身不直に陥らず。」争或は諍に作る。

乃ち拄杖を卓して云く、「二千年前此の制有り、四聖六凡都べて者箇を出でず。二千年後其の例を攀づ、五湖の衲子大家者裏に在り。」又拄杖を卓して云く、「出と不出と在と不在と、且喜すらくは靜處婆娑詞。」

五月旦上堂、僧問ふ、「松竹陰陰として夏日長し、好箇の時節、請ふ師提唱せよ。」師云く、「三十年後

錯つて商量すること莫れ。進んで云く、「恁麼ならば則ち黃鶴樓中玉管を吹く、江城五月落梅花。」師云く、「人遠き慮無きときは必ず近き憂有り。進んで云く、「只だ大地を變じて黄金と作し、長河を攪いて酥酪と爲すことは則ち無きにはあらず。和尙且く道へ、如何なるか是れ向上宗乗の事。」師云く、「南斗は七、北斗は八。進んで云く、「向下又作糜生。」師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」進んで云く、「畢竟如何が領略し去らん。」師云く、「阿彌舌を全うし去らば亦可ならん。」

乃ち舉す、鼓山、新羅の僧に問ふ、「山に上り來つて什麼をか作す。」對へて云く、「和尙を禮拜す。」鼓山云く、「盡世不標、什麼の處に向つてか禮拜せん。」對へて云く、「不標の處に向つて禮す。」鼓山云く、「爾は是れ新羅の人なることを念ふて、爾に二十棒を放す。」師云く、「者の僧、若し盡世不標、什麼の處に向つてか禮せん」といふところに於て、左右を摸著するの勢を作さば、鼓山を拜し得ん。鼓山若し「不標の處に向つて禮せん」といふところに於て、亞身合掌せば、者の僧を接待せん。二り俱に莽齒。爾師僧家、什麼の救處か有る。「拂子を以て禪床を擊つこと一下して下座。」

端午上堂、僧問ふ、「今朝正に是れ端午の節、昔日善財、藥を採り來る憑據、如何が領會せん。」師云く、「一著を放過す。」進んで云く、「將に佳辰に逢

此の問答は禪林類集禮拜の節に見ゆ。

觀會說文に、亞は臙なり、人の背を局するの形に象ると。又廣韻に就なりと。

文殊尸利、佛集を見んと欲して到ることを得る能はず、諸佛各の本處に還る、文殊偈ち諸佛の集る處に到れば一女人有り、佛に近いて定に入る。文殊、佛に白して言く、何ぞ

ふ底、盡大地は是れ藥ならざること莫しや。師云く、「何ぞ必せん。」進んで云く、「恁麼ならば薰風自南來、殿閣生微涼。」師云く、「謂つ可し、諸侯道を避くと。」進んで云く、「記得す、文殊當年、女子の定を出すこと得ざる、意旨作糜生。」師云く、「雲は嶺頭に在つて閑不徹。」進んで云く、「下方の罔明甚と爲てか却つて出し得る。」師云く、「水は淵底に流れて太忙生。」進んで云く、「文殊神力無しと爲んか、罔明神力有りと爲んか。」師云く、「釣魚船上の謝三郎。」進んで云く、「尊貴の路を行かすんば、争か上頭の關を踏まん」といつて便ち禮拜す。師喝して云く、「且く脚下を看よ。」

乃ち云く、「強ひて菖蒲を切ることを用ひず、剛ひて靈符を掛けることを要せず。稍僧家別に長處在り、盡天下の妖怪を消殞し去る。」拄杖を卓して云く、「頭長きこと三尺、知んぬ是れ誰ぞ。相對して無語獨足にして立つ。」

上堂、僧問ふ、「綠樹陰濃を布き、薔薇晚香を吐く。正に好し看雲亭下暑を避くる處、佳景を賞するの句、請ふ師提唱せよ。」師云く、「閻浮樹下笑呵呵。」進んで云く、「無寒暑の田地の如きんば、如何が踏著せん。」師云く、

此の女人佛に近いて坐することを得て而も我れ得ざることを得て、汝此の女を覺し、汝自ら之れに問へ。文殊即ち彈指之れを覺せども、而も覺せず、文殊、佛に白して言く、我れ覺さしむるを得ずと。是の時一菩薩有り、兼諸蓋と名く、即時に下方より來り、佛所に到り立つ、佛、兼諸蓋に告げ玉はく、汝此の女人を覺せと。蓋彈指すれば、此の女人三昧より起つ、文殊、佛に白す、何の因縁を以て、我れ此の女を起たしむる能はざるに、蓋、彈指すれば便ち三昧より起つ。佛言く、汝此の女に因つて菩提心を發し、是の女人、兼諸蓋に因つて菩提心を發す、故に汝能はざるのみ。諸佛要集經下文に詳なり。

「坑に墮ち漸に落つ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち處處の綠楊、馬を繋ぐに堪へたり。」師云く、「蹉過するも也た少からず。」進んで云く、「記得す、古人云く、『大用現前、軌則を存せず』と、如何なるか是れ大用現前底の時節。」師云く、「勘破了也。」進んで云く、「與麼ならば則ち謂つ可し隨處に主と作れば、立處皆眞なりと。」師云く、「雪上に霜を加ふ。」進んで云く、「學人今日親しく法要を聞く、如何が保任せん。」師云く、「疎田水を貯へず。」

五日を以て、赤靈符を作り、心前に著く。
⑥ 醒世錄一に云く、「大海の北に大樹王有り、名づけて闍浮樹と曰ふ、周圍七十由旬、根、地に入ること二十由旬、高さ百由旬、云々、枝葉四面に垂る、四復た五十由旬。」

乃ち擧す、趙州因に僧問ふ、「如何なるか是れ趙州。」州云く、「東門南門西門北門。」僧云く、「這箇を問はず。」州云く、「彌趙州を問ふ」と。師云く、「山僧は然らず、若し如何なるか是れ趙州と問ふこと有らば、只だ他に向つて道はん、石橋度り來るや也た未だしやと。這箇を問はずと道はゞ便ち道はん、山を下り去るを待つて、腋裏に汗出でんと。且く道へ、古人の道ふ底と、那箇か親、那箇か疎。請ふ各辨別して看よ。」

半夏上堂、僧問ふ、「山嵩嶺に連り、地洛川に近し、一機一境、勝槩ならずといふこと無し。唇吻に涉らず如何が津を通せん。」師云く、「心人に負かざれば面に慙づる色無し。」進んで云く、「九旬已に半を過ぐ、諸人自ら時を知る。當頭與麼の時節、學人如何が領略せん。」師云く、「且く者邊に過ぎよ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち杲日天に麗しく清風地を匝る。」師云く、「放下著。」進んで云く、「僧、智門に問

ふ、「蓮花未だ水を出でざる時如何。」門云く、「蓮花」と、此の意如何。」師云く、「風吹けども入らず。」進んで云く、「僧云く、「水を出でて後如何。」門云く、「荷葉」と、又作麼生。」師云く、「水洒げども著かず。」進んで云く、「蓮花、水を出づると未だ水を出でざると相去ること多少ぞ。」師云く、「秦甸幾人か蹈著す。」

乃ち云く、「半夏已前、我れ諸人の爲に隠す、隠せば彌露る。半夏已後、我れ諸人の爲に顯す、顯せば露れず。正當今日半夏隱さず顯さず、我れ諸人の爲に説破せん。」拄杖を卓すること一下して云く、「六月已に熱す、五穀好く熟せん。」
寺莊等公據を賜ふ上堂、拄杖を拈じて云く、「自家の田地觸處全く彰る、公驗一回手に入ることを得て、百劫千生曾て荒れず。正與麼の時作麼生。」拄杖を卓して云く、「皇風と祖風と鎮に扇ぎ、帝道と佛道と遐に昌なり。」又卓すること一下して便ち下座。

① 縱容、又從容に作る、禮記注に云く、「縱容は優游迫らざるの貌。」

重九上堂、「茶菓露を帯び金菊花を發く、大用現前軌則を存せず。諸禪德若し箇の中の意を識らば、南山東籬一家家。」
二月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「雪霽れて千山綠正に濃なり、梅腮柳面轉た^①縱容。君が爲に箇の中の意を報せんと擬すれば、幽鳥喃喃として亂峯に入る。」拄杖を卓すること一下す。

佛涅槃上堂、僧問ふ、「滿街の楊柳緑絲の煙、盡き出す長安二月の天。節に應する一句、請ふ師提唱せよ。」師云く、「寥寥たる天地の間、獨立して望何を極らん。」僧云く、「瞿曇今日般涅槃に入る、未審し什麼の處に向つてか去る。」師云く、「人人の鼻孔裏に向つて去る、還つて覺ゆるや。」僧云く、「慙慙ならば則ち哭底便ち是か、笑底便ち是か。」師云く、「將に謂へり、爾是れ領話せずと。」僧云く、「若し我れ滅度すと謂はゞ、我が弟子に非ず、若し我れ滅度せずと謂はゞ、亦我が弟子に非ずと、意旨作廢生。」師云く、「黃河の點魚。」僧云く、「今日の節に因らすんば、餘日實に逢ひ難し」といつて、便ち禮拜す。師云く、「向後人に向つて錯つて擧すること莫れ。」

乃ち横に拄杖を按じて云く、「雙趺椰を出す事親しみ難し、有も也た人を累し、無も人を累す。瞻部州中休すること得ず、年年二月、萍蘋を費す。」喝一喝、拄杖を擲下して下座。

龍翔正眼の二塔主至上堂、「寶山に一句子有り、只だ人の聽くことを許して人の擧することを許さす。已に是れ人の聽くことを許す、甚に因つてか人の擧することを許さざる。」拂子を撃つて云く、「龍蛇を辨する眼俱に正しく、虎兒を擒ふるの機也た全し。」

上堂、拄杖を卓して云く、「百億の須彌、百億の日月、恒沙の諸佛、恒沙の國土、盡く拄杖頭上に在り。諸人見得せば、妨げず一生參學の事了畢せん。其れ如し未だ然らすんば、眼を開いて瞋睡せ

①左傳隱公三年に云く、「苟も明
信有れば、涇溪沼沚の毛、蘋
蘩蕪藻の菜、芣苢芣苢の器、
潢汙行潦の水、魚鼈に薦むべ
し。」

ん。」又卓一下して下座。

四月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「此の事去來無し、甚に因つて昨日春去り今朝夏來る。物の性一世に住すと道ふに迄つては、肇公也た是れ盲龜空谷に入る。溺僧家牙劍樹の如く、口血盆に似たり、者裏に到つて作廢生か道著せん。若し人の道著する無くんば、拄杖を以て畫一畫して云く、「喜。」

結夏上堂、僧問ふ、「今日はれ結制、結する底是れ何物ぞ。」師云く、「猛虎路に當つて坐す。」僧云く、「慙慙ならば則ち官池水深く、看雲亭高し。」師云く、「吾れ常に此に於て切なり。」僧云く、「只だ老師の兩句子を將つて、七十員の禪佛に布施せん。」師云く、「只だ阿彌のみ有つて吞吐不下。」

②華嚴物不遷論の説なり。

乃ち云く、「是れ箇の水牯牛、山邊水邊頼に自ら無事。今日端無く欄裏に逗入して、鼻貫素頭全く別人の手裏に在り。行かんと要すれども也た能はず、臥せんと要すれども也た能はず。才に情を恣にせんと擬すれば、痛く鞭策を加へて道ふ、叱、者の畜生と。嗚呼嗚、只だ自知す可し。」拂子を撃つこと一下す。

上堂、拄杖を卓して云く、「人情若し者箇に似たらば孔丘、顔回を打殺せん。道情若し者箇に似たらば、達磨、少林を失却せん。」便ち下座。

端午上堂、僧問ふ、「文殊小男、誰が爲にか藥を要す。」師云く、「古佛廟前自ら顛蹶す。」進んで云く、「善財童子採り來る、何の草ぞ。」師云く、「無根滿地、無葉普天。」進んで云く、「父子便を得る處、千古

檢點に遣ふ。師云く、「爾老成の勢有り。」

乃ち云く、「端午天中の節、土を咒し壁に書することを用ひず、只だ一神咒を以て一切の妖怪を消殞し、佛病祖病を除却す。且く道へ、是れ那箇の神咒ぞ。」便ち威を振つて一喝す。

上堂、擧す、三祖云く、「一即ち一切、一切即ち一」と。驀に拄杖を拈じて云く、「三祖大師、非非想天に在つて、一箇の木樵子を擲下して、諸人の眼睛を換却す。忽爾として下り來つて旋轉舞踏す、恰も獨り樂むが如し。而も諸人の見ず知らざるを見て、高聲に唱へて云く、龜毛長きこと三尺、兎角長きこと七尺と。」拄杖を卓すること一下して云く、「參。」

上堂、横に拄杖を按じて擧す、芭蕉、衆に示して云く、「爾に拄杖子有らば、我れ爾に拄杖子を與へん、爾に拄杖子無くんば、我れ爾が拄杖子を奪はん」と。拈じて云く、「芭蕉與奪は無きにあらず、只だ是れ擒縱未在。山僧尋常皴皴鱗鱗地向つて人を出さんと要す。猶ほ一半を救ひ得ざること有り、豈に況んや山形邊の事を吐出するをや。太だ遠くして遠し。」拄杖を卓すること一下す。

傳燈十二にいふ、鄧州芭蕉山慧清禪師は新羅國の人なり、法を南塔涌に嗣ぐ。

解夏上堂、僧問ふ、「三通鼓罷んで四衆筵に臨む、好箇の時節、請ふ擧揚を聞かん。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」進んで云く、「九旬期已に滿つ、衲僧脚頭闊し。正當恁麼の時、如何なるか是れ自恣の一句。」師云く、「柳栗横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」進んで云く、「記得す、洞山云く、

「秋初夏末、直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし」と、意旨如何。師云く、「步步清風起る。」進んで云く、「石霜云く、「門を出れば便ち是れ草」と、又作麼生。」師云く、「草鞋露に和して重し。」進んで云く、「和尚恁麼の答話、是れ古人の與に氣を出すと爲んか、復た古人の與に屈を雪ぐと爲んか。」師云く、「平蕪盡くる處是れ青山。」進んで云く、「與麼ならば、則ち一言別路無し、萬世盡く歸を同じうす。」師云く、「傍觀分有り。」進んで云く、「只だ老師の四五轉語を將つて、甘つて九夏賞勞の功に當つ」といつて、便ち禮拜す。師云く、「謂つ可し南北東西皆可と。」

乃ち擧す、翠巖夏末、徒に示す、「一夏已來兄弟の爲に東説西話す、看よ翠巖が眉毛在りや。」保福云く、「賊と作る人心虚る。」長慶云く、「生せり。」雲門云く、「關。」師云く、「三大老、俱に隻手を出して翠巖の家風を扶樹す。龍寶今夏兄弟の爲に説話せず、看よ眉毛箭鋒の如く長きこと數寸、只だ是れ人の觀破することを缺く。然も是の如くなりと雖も、落霞と孤鶩と齊しく飛び、秋水長天と共に一色。」

八月旦上堂、拄杖を拈じて云く、「向上の一路千聖不傳、八月初一龍寶山前。」拄杖を卓して下座。中秋上堂、擧す、長沙、仰山と月を翫ぶ次で、仰山月を指して云く、「人人盡く這箇有り、只だ是れ用ひ得ず。」長沙云く、「恰も爾を情ふて用ひんや。」山云く、「爾試みに用ひよ看ん。」長沙一踏に踏倒す。仰山起き來つて云く、「爾大いに箇の大蟲に似たり」と。師云く、「仰山起き來つて、果然として用不得と道はゞ、長沙脚を擡げ起さることを見盡さん。然も恁麼なりと雖も、月は中秋に到つて滿ち、

風は八月より涼し。拂子を撃つこと一下す。

九月旦、太上法皇、種種の剪采を恵むに因つて上堂、須菩提、巖中晏坐、帝釋花を雨らす話を擧して、師云く、「天帝釋花を雨らして地を動ずると、太上法皇此の花を恵みたまふと、是れ同か是れ別か。若し別と謂はゞ眼裏に筋無し、若し同と謂はゞ其の意作麼生。」良久して云く、「住みね住みね、秋色登平楓葉の序、西風轉た冷かなり草花の天。」拂子を撃つこと一下す。

重陽上堂、菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。靖節阿

鞦韆の處、衲僧一重の關と作る。且く道へ、他は是れ俗漢の陋韻、甚と爲

てか衲僧一重の關と作る。喝一喝して云く、「參。」

上堂、山僧即今須彌頂上に在つて説法す、諸人もた是れ鐵輪峰頂に在

つて聽法す。坐底立底、賓主歷然、還つて會すや。會得せば盡十方界乾坤大地、諸人の眼睫上に在

て大光明を放つ。其れ如し未だ然らずんば、樹頂老い山顔醉ふ。拂子を撃つこと一下す。

開爐上堂、擧す、趙州、衆に示して云く、「三十年前、南方の火爐頭に箇の無賓主の話有り、直に而

今に至るまで人の擧著する無し」と。師云く、「趙州面皮厚きこと三寸、手を炙つて熱を助けんことを

要須す。其れ爐下春に似たるを如何せん。直饒ひ而今人の擧著する有るも、方に知る三箇の枯柴、品

字に燒く。」

①剪采は遣花なり。

②排面氏族に、陶元亮、晋に在つて淵明と名づけ、宋に在りて潜と名づく、世靖節先生と號す。

上堂、一句去り一句來つて、儼が一平生を慶快す。忽然として傾瀉倒岳、那裏にか入り那裏にか出でん。昨夜三更牛を失却す、天曉起き來つて火を失却す。拄杖を卓すること一下す。
上堂、擧す、盤山云く、「向上の一路千聖不傳。」慈明云く、「向上の一路千聖不然。」師云く、「二大老、只だ鬼、漆桶を争ふことを解す。山僧は便ち道はん、向上の一路千聖齊しく行くと。」

③幽州盤山寶積禪師は、馬祖道一禪師の法嗣なり、傳は燈燈因にあり。

大德寺語錄終

頌古

① 淨居意牖の中に於て叉手す

② 玉函の鑑月秋を期せず、夜靜にして方に知る波浪の別なることを、此れより相逢うて路迷ふに似たり、崔嵬たる檀特硬きこと鐵の如し。

③ 爾の時迦葉諸の比丘に告ぐ、「佛已に茶毗、金剛の舍利は我れ等が事に非ず、我れ等宜しく當に正法を結集して斷絶せしむること無かるべし。」

④ 列三析半信何ぞ通せん、首を回せば白雲眼力空し、鷄足峰前未だ歸り去らず、多羅葉上悲風を動かす。

⑤ 行思禪師、希遷に問うて云く、「汝

① 頌古は古則を頌揚するの意にて、佛祖の間答商量せられたる古則に就いて、韻語の偈頌を以て宗意を發揮したるものを云ふ。宋の天禧年間に、汾陽昭覺禪師、頌古一百則を作らる、是れ頌古の初めなり。

② 釋迦太子たりし時、世間、老、病、死の慘狀を見て、長怖の情に堪へず、獨り出家の法、生死を脫得すると聞き、即ち深く尊信すと説いて佛本行經に詳かなり。又經に據るに、老、病、死、出家、以上四等の事を見て、心に悲喜有り、是の夜一人の天人有り、名けて淨居と曰ふ、窓牖の中に於て叉手して言く、「出家時至れり云

云。

③ 函は古文、淵に同じ。第一句、佛の内體自ら冷然として盡十方を照破し、廣大圓明智慧顯、涅槃の求むべき無きが故に正覺を成ぜんことを期せずとの意なり。第二句、如來本覺の内證より無縁の大慈を發して、正位に證を取り玉はざるの旨を演ぶ。夜靜にして方に知るとは、所謂實際地一塵を受けず、眞如法界自無く他無しと雖も、隨緣差別の幻境の上には生死有り涅槃有り、凡有り聖有り、大慈善巧の願輪に非ずんば、誰れか此の患難を救はん。波浪の別とは、生死千差の苦城を指す。

① 什麼の處よりか來る。「云く、「曹谿より來る。」思乃ち拂子を擧して云く、「曹谿に還つて這箇有りや。」云く、「但だ曹谿のみに非ず、西天にも亦無し。」思云く、「子曾て西天に到ること莫しや否や。」云く、「若し到らば即ち有り。」思云く、「未だ、更に道へ。」云く、「和尚也た須らく一半を道取すべし、全く學人に靠ること莫れ。」思云く、「汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後、人の承當すること無けん。」

② 明暗雙對揚を絶す、愁人未だ説かざるに愁腸斷ゆ、金毛の獅子踞地を解す、冤苦蒼天又一場。

③ 僧、大隨に問ふ、「劫火洞然として大

第三句、太子既に淨居の樊輿に隨つて下化衆生の願海に入り、曠劫不變の願輪に獲ちて方便有餘の化行を行す、恰も初發心地の行人迷倒昏愚なるに似たるを云ふ。第四句は太子既に檀特山に入りて苦修鍊行し、次ぎに雪山に入りて端坐六年、千辛萬苦の體裁、難信難解の様子なり。

④ 結集とは佛の教説を結合編集するの意。
⑤ 列三析半とは展演開敷縱橫羅列の義なり、言るは、縱ひ貝葉金文大いに敷演し大いに展開すと雖も、猶ほ是れ能見所見を出でず、豈に眞の正法を結集すと云ふに足らんやと。
⑥ 此の經を得る者を佛祖聖賢と名づけ、此の經を失ふ者を六趣の衆生と言ふ。此の經緯に

出現する時、上下四維三世古今、全く纏卷有るを見ず、空空寥、虛豁豁、初つて信す楞嚴に所謂、淨極り光通達して寂照虛空を含む、却り來りて世間の事を觀すれば、猶ほ夢中の事に似たりとの意也。
⑦ 鷄足は即ち迦葉尊者を指す、迦葉既に衆に首たり、故に鷄足を言ふときは、則ち畢波羅窟裏結集會上八百八萬の大衆同時に擧ぐ。

⑧ 貝多羅は樹の名、印度にては紙の代用として書寫に用ぬらる。言ふ意は、多少の大阿羅漢、眞に如來の秘經の義に入得せず、故に空しく八教の説相、五時の遺音を執して、以て如來の正法眼藏なりと爲して、不去來の處に去來の相を見、不生滅の地に生滅の悲を懷くをいふ。

⑨ 吉州曹原山行思禪師は法を曹

千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か。隨云く、「壞。」僧云く、「與麼ならば則ち他に隨ひ去る。」隨云く、「他に隨つて去る。」

劫火他に隨つて喚べども回らず、遠く西蜀を離れて去つて還た來る、大千總に者の僧の眼に等し、古佛光中笑口開く。

百丈の懷海、一日衆に謂つて云く、「佛法は是れ小事にあらず、老僧昔し馬大師に一喝せられて、直に得たり三日耳聾し眼暗きことを。」黃檗舉するを聞いて舌を吐く。丈云く、「子已後、馬祖に承嗣すること莫しや。」榮云く、「然らず、今日師の擧するに因つて、馬祖の大機大用を見ることを得たり。然

漢の六祖大師に嗣ぐ。傳燈五に詳に出づ。

石頭希遷禪師は法を青原行思禪師に嗣ぐ、師沙彌たりし時、曹溪の六祖大師に參す、祖の遺命に隨つて遂に青原に見ゆ、原其の來るを見て即ち問ふ、「汝什麼の處より來る。」

第一句、青原父子相見唱拍鼓舞の間、明頭に暗有り、暗頭に明有り、恰も兩鏡相照して中心影像無きに似たるを云ふ。

第二句、父子情思相通じ、志氣相投す、恰も慈人と慈人と峽路に相逢ふて、未だ片言を交へず、目撃の間、中腸先づ回轉するが如きを云ふ。

第三句、鶴林禪師云く、「作麼生か是れ踞地の獅子、青原底と謂はんか、石頭頭底と爲んか。」

第四句、鶴林禪師云く、「青原

曰ふ、未在更に道へと、此の時心腸を傾盡し、肝膽を吐出す、更に者の什麼を道つて、慙慙に逼拶し將ち來る、恰も枯骨を壓して汁を瀦らんと欲する者に似たり。」

大隨眞和尚は法を大安禪師に嗣ぐ。此の問答、傳燈十一に出づ。

第一句、鶴林云く、「大隨他に隨つて去るの一語、一代藏經も詮註し及ばざる、明眼の衲僧も摸索不著、擬議するときは、快裏透へども及ばず、千牛拽けども回らず、所以に道ふ。」

其の僧、大隨の落處を知らず却つて此の間を持して、直に舒州の投子山に往いて前話を舉似す。投子香を焚いて禮拜して云く、「西蜀に古佛有り、出世す、爾且つ速に回れと。其の僧復た回つて大隨に到

も且つ馬祖を識らず、若し馬祖に嗣がば我が兒孫を喪はん。」丈云く、「如是如是。」

一喝耳聾して天地黒し、當機舌を吐いて荆棘を生ず、虚を承け響を接いで意論じ難し、兩兩三三好し動著するに。

保福、長慶、遊山する次で、福、手を以て指して云く、「只だ這裏便ち是れ妙峰頂。」慶云く、「是なることは則ち是、可惜許。」雪竇著語して云く、「今日この漢と遊山して什麼をか圖る。」復た云く、「百千年後無しとは道はじ、只だ是れ少し。」後鏡清に舉似す、清云く、「若し是れ孫公に不ずんば、便ち閻羅野に徧きことを見ん。」

る、隨既に遷化する、二句故に云ふ。

第三句は、今時諸方の宗師、天下の禪流を指す。

古佛光中は、投子の所謂西蜀に古佛有りの語より來る、笑口開くとは、面前者の僧及び今時の人の行履を見るに、室に一場の笑具のみ。

百丈懷海は馬祖の法嗣なり。此の因緣、碧巖十一則の評に詳に出づ。

此の句、百丈、馬祖の一喝を聞いて耳聾し眼暗す、從來大地黒漫漫、從前多少の得力の處を打失して、覺えず佛祖の堂奥に入りし種子を頌す。

此の句、黃檗大師如上の因緣を聞いて、忽ち魂飛び魄散じて覺えず舌を吐く、此れより大機大用を發し、佛祖難入萬劫參天の荆棘を裁みしことを頌す。

此の句、諸方相似の禪徒、末代小果の瞎流の得て論量すべからざることを云ふ。

此の句、今時紙傳佛傳、虚を承け響を接ぐ底の響隔、此に兩兩、彼に三三、從上師資相承の惡窺を聞いて心神驚動すること云ふ。

此の因緣、碧巖二十三則に出づ。保福、長慶、鏡清、總に雪峰の法嗣なり。

華嚴に云く、「普善財童子妙峰頂上に行いて德雲比丘を見んと欲す、七日にして逢はず、一日別峰に在りて相見す。」蓋し善財童子は行人辨道、迷趣の一念子なり、妙峰とは第八觀耶無分別識なり。德雲比丘とは根本無作平等の大智なり、七日にして逢はずとは、七識摩耶傳説識なり。

孫公は長慶の俗姓なり。鶴林云く、「國師今經義を取

⑥ 妙峰孤頂人到り難し、只だ看る白雲飛んで又歸ることを、松檜蒼蒼幾歳をか歴たる、莫救あれ巖畔鳥聲の稀なることを。

⑦ 僧、巴陵に問ふ、「如何なるか是れ提婆宗。」巴陵云く、「銀椀裏に雪を盛る。」

提婆宗分節し難し、誰か道ふ銀椀裏に雪を盛ると、大地山河一等の風、人間天上蕭洒絶。

⑧ 盤山、垂語して云く、「三界無法、何れの處にか心を求めん。」

⑨ 千峰雨霽れて露光冷じ、月は落つ松根蘿屋の前、等閑に此の時の意を寫さんと擬すれば、一溪雲鎖して水潺潺。

⑩ 巖頭、僧に問ふ、「什麼の處よりか来る。」僧云く、「西京より来る。」頭云く、

「⑦ 黄巢過ぎて後、還た劍を收得すや。」僧云く、「收得す。」頭、頸を引いて近前して云く、「因。」僧云く、「師の頭落ちぬ。」頭、呵呵大笑す。僧後に雪峰に到る、峰問ふ、「什麼の處よりか来る。」僧云く、「巖頭より来る。」峯云く、「何の言句か有りし。」僧、前話を擧す、雪峰打つこと三十して趁ひ出す。

⑪ 黄巢過ぎて後劍收め難し、提げ去り提げ來つて手を傷つて憂ふ、是れ山藤三十下せずんば、梵天の餘血五湖に流れん。

⑫ 雲門、垂語して云く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」

⑬ 雲門、垂語して云く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す。」

任他あれ巖畔鳥聲の稀なることとを。」

⑦ 巴陵の鑑師は法を雲門大師に嗣ぐ。此の問答、碧巖十三則に出づ。

⑧ 十五祖迦那提婆尊者、法を龍樹大士に嗣ぐ、大に外道を摧伏して弟子と爲す、宗風大いに振ふ、時に稱して提婆宗と曰ふ。後來江西の馬大師、楞伽經に所謂佛語心を宗と爲し無門を法門と爲すと云ふを擧して、云く、「大凡そ言句有れば是れ提婆宗。」

⑨ 盤山寶積禪師は法を馬祖に嗣ぐ。碧巖四に傳あり。

⑩ 鶴林云く、「此の頃、全篇一團の大火聚の如く、一條の熱鐵櫃に似たり、如何が手脚を著けん、誰れか知らん國師も亦頰じ得て喪身失命し了ることとを。」

らず、特に雪峰門下諸老の唱和諸方に超卓し、古今に獨歩するを嘆賞す、時人總に其の門閥を窺ふこと能はず、就中保福長慶遊山の因縁、天に露る赤土の流星劍、泉に徹する黒火の無底坑、鬼神も亦喪身失命し去らん、是れ所謂孤峰人到り難き者なり、其の千慧萬狀譬へば孤雲の空に浮ぶに似て、乍ち獸の如く乍ち鳥の如く、或は奇峰の如く、或は龜蓋に齊うして全く定度無し、或は萬仞の遺體に等うして、遙に松杉の鬱密深沈たるを望み、終に斧斤の聲を聞かず、百千歳を歴て蒼蒼蒼蒼たるのみ、如上孤絶の峰巒鳥飛んで涉らず、獸走りて望を斷つ、此の語に到つて明眼の衲僧善參の上士も亦手脚を挟むことを得ず、百鳥花を啣むに路無く、外道潛に觀ふも見えず、

⑪ 鄂州の巖頭和尚、字は全益、泉州柯氏の子なり、法を徳山に嗣ぐ。此の因縁、碧巖六十六則に出づ。

⑫ 黄巢は人の名なり、通鑑に「僖宗乾符二年、黄巢亦兼千餘人を聚めて王仙芝に應ず、巢少かりし時、仙芝と皆私闘を敗るを以て事と爲す、巢騎射を善くし、任俠を喜び、粗々書傳を渉る、屢々進士に擧がれども第せず、遂に盜を爲す、仙芝と州縣を攻剽して山東に横行す云々。」

⑬ 因は玉篇に船を牽く聲なり、唐音「おう」、重きものを牽くゆゑ、思はず「おう」と聲が出るなり。

⑭ 第一句、者の僧岩頭の意を會せず、大いに蹉過し了る、而るを却つて自ら謂らく、黄巢の劍を收得して甚だ痛快に去れりと。

⑮ 第二句、こゝに於て一枚巖龜の頭を荷負し來つて巖處に行いて敗鬪を納る、殊に知らず早く是れ鋒を犯して手を傷ることを。

⑯ 第三句、雪峰三十棒して趁ひ出すを云ふ。

⑰ 第四句、若し雪峰の棒無くんば、此の僧空しく巖頭の頭を荷擔して、四天下を透つて處處の叢林血縁狼藉せんと、

⑱ 韶州雲門山文偃禪師は法を雪峰に嗣ぐ。此の垂語、碧巖八十三則にあり。

⑲ 鶴林評して云く、「此の語極めて難入難解、學者をして理盡き詞窮り、心死し意消する處に到りて、我が法二空の暗谷を超過し、生佛一如の金網を打脱せしむ、見地不脱の禪者會て夢にだも見ると能はず、所以に言ふ、古佛光中人の知ること少れなりと。」

古佛光中第幾機ぞ、南山雲外人の知るこ
と少なり、千溪日は晩る樵歌の路、歸去來分來
去歸。

仰山、三聖に問ふ、「汝名は何ぞぞ。」
聖云く、「慧寂。」山云く、「慧寂は是れ我
れ。」聖云く、「我が名は慧然。」仰山、呵
呵大笑す。師、著語して云く、「什麼の
處にか去る。」

照日影の中雪の霽る、春、梅腮柳面芳を
して新なり、詩縁風興限り無き意、獨り許す苦
吟野外の人。

雲門、垂語して云く、「乾坤の内、
宇宙の間、中に一寶有り、形山に秘在
す。燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門
を將つて燈籠上に來す。」

① 袁州の仰山慧寂禪師は法を瀟
山に嗣ぐ、三聖慧然禪師は法
を臨濟に嗣ぐ。此の因縁、廣
燈十二、三聖の章に載す。

② 此の頌、道人潛修功積り、密
參力充つるときは八識剎耶の
暗谷を踏躑して、大圓鏡光の
惠日乍ち展出して、有爲住相
の積雪乍ち解く。これより四
句の頌輪に纏ち益々進んで退
かざるときは、眞如平等の堅
氷を擊碎し、法性一枚の層氷
を消融し、眞如不二の聖境に
遊戯し、明暗雙雙底の實處に
逍遙して、百華叢裏に遊ぶが
如し、佛祖も手を挟むことを
得ず。然、寂二老の如き、總
に是れ者般の人、其の唱拍鼓
舞、恰も春花の春暖を得て紅
紫を開はしむるに似たるを云
ふ。

③ 此の話、碧巖六十二則にあ
り。

④ 以下秘在すまで、肇法師寶藏
論の中一段の説話なり。
⑤ 鶴林云く、此の頌極めて精密
密地、此の頌極めて孤峻峻地、
却つて寒毛卓駭することを覺
ゆや。「一寶は則ち人人本具の
性、形山は即ち四大五蘊の空
屋なり。」

⑥ 此の話碧巖四十四則にあり、
吉州禾山の無股禪師、法を九
峰慶禪師に嗣ぐ、習學云云の
語は肇公寶藏論の中一段の
説話なり。讀者の曰く、「生死
即涅槃と説くを聞いて之れを
信するは開位なり、習學して
生死を恐れず、涅槃を求めず
と信するは是れ絶學位なり、
絶學位は道に近き故に隣と言ふ
なり、生死涅槃平等にして、
開隣の二を離る、是れ眞の無
上道なり、故に眞過と云ふ、
過は所謂過の義なり」と。
禾山此の一段の教意を拈じ來

宇宙乾坤同一寶、燈籠佛殿形山の中、青松雪霽れて岩勢晚れ、寒月風
清うして溪畔空し。

禾山、垂語して云く、「習學之を聞と謂ひ、絶學之を隣と謂ふ。

此の二を過ぐる者、是れを眞過と爲す。僧出で、問ふ、「如何なる
か是れ眞過。」山云く、「解打鼓。」問ふ、「如何なるか是れ眞諦。」山云
く、「解打鼓。」問ふ、「即心即佛は即ち問はず、如何なるか是れ非心
非佛。」山云く、「解打鼓。」問ふ、「向上の人來らば如何が接せん。」山
云く、「解打鼓。」

天上の星地下の木、觀機那ぞ肯て、離微に涉らん、明明たる歷世別物
無し、猛烈の身心更に疑はず。

仰山、僧に問ふ、「近離甚れの處ぞ。」僧云く、「廬山。」仰山
云く、「曾て五老峰に遊ぶや。」僧云く、「曾て遊ばず。」仰山云く、
「閣梨曾て遊山せず。」雲門云く、「此の語皆慈悲の爲の故に落草の
談有り。」

看よ看よ落草遊山せず、的信何を通せん千里の關、敲唱當鋒禪悅を見

りて以て深草影草と爲す、曾
有り、果然として一釣に上り
來りて即ち問ふ、「如何なるか
是れ眞過。」山云く、「解打鼓」
と、鐵錘擊碎す黄金の骨。大
凡そ四箇の解打鼓有り、此れ
を禾山の四打鼓と曰ふ。

⑦ 鶴林評して曰く、「此の頌亦是
れ國師肝膽を傾け盡す底、縱
使ひ舊參の上土、密密參取す
べきの聖作なり。」
⑧ 離は離脱の意、微は隱るゝの
意、離は一切の繫縛を離れ、
前境の外に獨立すること、微
は萬物に隱れて萬物と一體と
なること。

⑨ 此の因縁、碧巖三十四則にあ
り。
⑩ 近離は、近く甚れの處を離
ると訓讀す、どこより來た
か」の意。

⑪ 廬山は南康府の西北二十里に
在り。

る、一圓空裏二三三。

外道、佛に問ふ、「有言を問はず無言を問はず。」世尊良久、外道讚歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて我れをして得入せしむ。」外道去つて後、阿難佛に問うて云く、「外道何の所證有つてか而も得入と言ふ。」佛云く、「世の良馬の鞭影を見て行くが如し。」

有言異道の事を問はず、鐵山當面勢崔嵬、孤峰雲散千溪の月、鞭影追風直下に来る。

魯祖山の寶雲禪師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ言不言。」雲云く、「汝の口什麼の處にか在る。」僧云く、「口無し。」雲云く、「什麼を將つてか飯を喫す。」僧對無し。洞山代つて云く、「他飢ゑず、什麼の飯をか喫せん。」

超然の一句錯つて流布す、強ひて爪牙を弄するも未だ作家ならず、箭後の路頭端的別なり、誰か知らん高處に風波有ることを。

瀉山、因に仰山問ふ、「如何なるか是れ西來意。」瀉云く、「大好燈籠。」

籠。「仰云く、「只だ這箇便ち是なること莫しや。」瀉云く、「這箇是れ什麼ぞ。」仰云く、「大好燈籠。」瀉云く、「果然として不識。」

機意交馳して何れの處にか去る、陣雲千里重關を鎖す、大家問著すれば相識らず、笑ふに堪へたり古風匝地寒きことを。

江州龍雲の臺禪師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」臺云く、「老僧昨夜欄裏に牛を失却す。」

昨夜欄裏牛を失却す、風流ならざる處也た風流、枯禪限り無く喚び得作す、祖意西來特地に酌ゆ。

南泉、一日東西の兩堂猫兒を争ふ、南泉見て遂に提起して云く、「道ひ得ば

五老峰は廬山に在り、五峰五老相連るが如し、故に名づく。鶴林云く、「學者此の頌を解せんと欲せば、先づ須らく此の語を參決すべし、此の語を遷過せずして此の頌を見んとせば、空谷に入りて谷神を捉へんと欲するが如し。」

此の因縁、碧巖六十五則にあり。外道とは、西竺の聰明利智の種族、常に好んで書を讀んで常に論議を好む、未だ真正中道の諸理を明めず、故に外道なり。學んで非有非無非斷非常の處に到る、智明ならず心休歇せず、兩肩に擔ひ來りて即ち問ふ。

第一句、異道は則ち外道を指す、有言を問はず無言を問はずの所問の全體を拈起する者なり。有言即ち異道なりと道ふにはあらず。

第二句は、世尊良久の當體、

くこと無し、更に什麼の飯を喫せん」と。

第二句言ふことは、二大老、面前縱ひ熱喝嗔拳、惡罵毒語、英雄を逞しうし、鯨蛟を志にし去るも、者裏に到つて未だ作家と稱するに足らずと。

第三句、二大老の用處恰も神箭の長空を過ぐるが如く、全く處所無く、全く蹤跡無し、沒蹤跡の處、蹤跡的分明、只だ恨む、時の人親しく見得出する底無きことを。

第四句、高處の風波とは、寶雲の什麼を將つてか飯を喫せん、瀉山の他飢ゑず、什麼の飯をか喫せんの語を指す。

潭州瀉山靈祐禪師は法を百丈に嗣ぐ、袁州仰山の慧寂通禪師は法を瀉山に嗣ぐ。此の話會元九、傳燈九に出づ。

此の頌、鶴林評して曰く、「瀉仰父子、各の龍蛇の陣勢を張

言詞道絶し、情量力及ばざる端的を頌す。

第三句、我が迷雲を開いて我れをして得入せしむと云ふを述ぶ。

結句は、世尊許可の一語を言ふ。

池州魯祖山寶雲禪師、法を南岳懷讓禪師に嗣ぐ。傳燈七に傳あり。

瀉山良价禪師なり。

鶴林云く、「爾ち看よ、何れの處か是れ超然の一句、寶雲云く、爾什麼を將つてか飯を喫せん」と、是れ超然の一句なりや、瀉山云く、他飢ゑず、什麼の飯をか喫せん」と、二大老の說話、萬仞の龍門、黑雲の鎖すに似たり。如何なるか是れ錯りて流布する底、今時往往に言ふ、他は是れ人人本具底本來の面目坊、他形相無く肚脾無し、飢うることに無く飽

即ち斬らす。衆對無し、南泉猫兒を斬却して兩段と爲す。南泉復た前話を舉して趙州に問ふ、州便ち草鞋を脱して頭上に戴いて出づ。泉云く、「子若し在りしかば、恰も猫兒を救ひ得ん。」

兩堂争ふ處南泉斷つ、王老放つ時趙老收頭上の草鞋多少か重き、白雲流水共に悠む、悠。

僧伽難提、衆生の慢を知つて乃ち曰く、「世尊在日世界平正、丘陵有ること無し。江河溝池、水悉く甘美、草木滋茂、國土豊盈、八苦無く、十善を行す。雙樹に滅を示してより八百餘年、世界丘城樹木枯悴し、人至信無し。正念輕微、眞如を信せず。唯だ神力

りて、互に奇正の精兵を馳せ機を以て意を奪ひ、意を以て機を奪ふ、孫吳も股戰き信越も膽震ふ、宜なる哉、大家問著すれば、總に相知らず、笑ふに堪へたり古風匪地寒きことを。作麼生か是れ古風、四七二三の聖賢只だ者の些子を傳へ、世尊拈華以來、從上の諸聖密密潛修、眞命を顯みざる者は、此れ是の秘訣を傳へんと欲すればなり。」

江州龍雲の臺禪師、法を百丈の海禪師に嗣ぐ。聯燈七に之れを載す。

古來生佛一如、淨穢不二、畢竟無分曉の理體を演ぶるときは則ち盡く言ふ、昨夜三更牛を失却す、今朝天明火を失却す、半夜烏鴉を放つ、白馬廐花に入る、黒漆桶裏に墨汁を盛る等と。總に是れ平等不二底を説き將ち來る。

鶴林云く、「僧徒に問ひ、龍雲慈慶に答ふ、那處か是れ風流ならざる處、既に是れ祖師西來意、若し平等不二底の泥團子を以て捏合して以て答へ得ると爲ば、他の經論家の老奴も亦西來意を續ぎ得て乏しきと無けん、豈に祖祖相傳底の秘訣と稱するに足らんや、什麼の風流の處か有らん、誰れか知る此の語、大いに節角斷訛の處有ることなり。」

三四の二句は、世間限り無き二空の暗谷裏にある枯禪者流、徒に龍雲の欄裡に牛を失却すと云ふを聞いて、邪解憺憺を呈しうするを云ふ。

南泉普願禪師は法を馬祖の道一禪師に嗣ぐ。此の語、碧巖六十三則にあり。

第一、二句鶴林評して云く、「試みに道へ、王老箇の什麼を放出し、趙州箇の什麼を

を愛す。言ひ訖つて右手を以て漸く展べて地に入り、金剛輪際に至る、甘露水を取り、琉璃器を以て持して會所に至る。大衆之を見て、即時に欽慕悔過して作禮す。師、著語して云く、「拈得すや也た未だしや。」

日暮雲晴れ眼界空し、清風況んや是れ草離離、松根石上誰が與にか説かん、月中峰に到れども猶ほ未だ歸らず。

迦耶舍多尊者、徒を領じて一舎に到る、舍主鳩摩羅多、問うて云く、「是れ何の徒衆ぞ。」尊者云く、「是れ佛弟子。」羅多、佛號を聞いて心神悚然として即時に戸を閉づ。尊者良久、自ら其の門を扣く、羅多云く、「此の舍人無し。」尊

か收得す。」
第三、四句鶴林評して云く、「言ふこと莫れ、淨穢不二平等一味の受用と、所以に言ふ、白雲流水共に悠悠と。」
會元一に云く、「十七祖僧伽難提尊者は室羅筏城寶莊嚴王の子なり。此の因縁、會元一、十六祖羅摩羅多尊者の章に出づ。慢は我慢なり。」
八苦とは、生、老、病、死の四苦に、愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛の四苦を加へて云ふ。怨憎會とは、遠離せんと憎惡する人と共に會し居るを云ふ、求不得とは、愛樂を求むれども、之れを得ざるの苦を云ふ、五陰は新譯に五蘊、吾人の身は五蘊和合に依るが故に、生老病死等の苦を業集するを云ふ。
十善とは、第一不殺生、第二

不偷盜、第三不邪淫、第四不妄語、第五不綺語、第六不惡口、第七不兩舌、第八不貪欲、第九不瞋恚、第十不邪見を云ふ。
釋尊、拘尸那城外に入滅し給ひし時、其の四方に雙本の娑羅樹有りたるを云ふ。
金剛輪際とは無限に深きところを云ふ。是れはもと俱舍論に出づる説なり。
此の頌、鶴林評して曰く、「須らく知るべし、悟るときは則ち常に靈鷲に在ることな、如來眞法界の外纏塵有ることを見ず、豈に丘陵有らんや、迷ふときは則ち薪盡き火滅し、空しく舞木瓦石、穢惡充滿の邊土のみを見る、所以に頌に曰く、日暮雲晴れ眼界空しと。言ふこゝろは國師既に大徹透過、面前四維上下、十方法界、半點の形貌無く、纖毫の瑕翳無

者云く、「無しと答ふる者は誰ぞ。」羅多、語を聞き是れ異人なることを知つて、遽に關を開いて延接す。

踏斷す春風千萬峰、蒼苔青蘚靈蹤を鎖す、落花啼鳥夕陽の裏、雲合し雲開く晚寺の鐘。

梵摩淨徳云く、「弟子衰老、師に事ふること能はず、願はくは次の子を捨てて以て出家せしめん。」

己を退き人を進む比す可き無し、百千年後誰有つてか知らん、室羅城畔金水の上、古佛放光動地の時。

不如蜜多、偈を聞き再び祖に啓して云く、「法衣宜しく傳授す可し。」祖云く、「此の衣、難の爲の故に假つて以て證明す。汝が身、難無し、何ぞ其の衣を假らん。」蜜多、語を聞いて作禮して退く。

月高うして松頂孤光冷じ、風殘雲を弄して穩意寛し、四海涓涓として百川落つ、琉璃殿上夜遊闌なり。

玄沙、衆に示して云く、「諸方の老宿盡く道ふ、接物利生と。忽ち三種病人に遇はゞ、作廢生か接せん。患盲の者は、拈槌豎拂、它又見えす、患聾の者は、語言三昧、它又聞えず、患瘧の者は、伊をして説かしむるも、又説くこと得ず、且く作廢生か接せん。若し此の人を接し得ずんば、佛法靈驗無し。僧、雲門に請益す、門云く、「汝禮拜著せよ。」僧禮拜して起つ。門、拄杖

し、只一片匝地の清風のみ。」
① 鵝林曰く、「三四の句、甚だ難透難解、此の語を見徹することと掌果を見るが如きことを得ば、乍ち向に所謂拈得すや也た未だしやと云ふを見徹せん。此に於て始めて國師と相見することを得ん。」

② 此の語、聯燈二、正宗記三に出づ。迦那舍多尊者は十八祖、鳩摩羅尊者は十九祖なり。

③ 此の頃、鵝林評して曰く、「二尊者既に道業成熟、見地の山、知障の嶺、多少險難の道路を踏斷して、意路不到、情解不及の處に向つて穩坐す、是の故に言ふ、蒼苔青蘚靈蹤を鎖すと、既に是れ二尊、向上の步驟明暗雙雙、無功用、没巴鼻の處に於て、賓主、獻酬す、恰も浮雲の無心にして合し、無心にして開くに似たり、所以に言ふ、雲合し雲開く夕陽

の裏と。」
④ 梵摩淨徳は即ち迦毘羅國の人なり、園樹菓を生ず、味甚だ美也、唯だ長者と第二子羅睺羅多と取りて食ふ、取り了れば隨つて生ず、迦那提婆尊者、其の宿因を知りて即ち偈有り、曰く、「僧と爲りて理に通ぜずんば、身を復して信施を還す、長者八十一にして、其の樹菓を生ぜず。」長者偈を聞いて増々歎伏す、曰く、「衰老せり願はくは次の子を捨て、師に隨ひ出家せしめん。」祖曰く、「昔し如來此の子を記し玉ふ、第二の五百年に大教主と爲るべし」と、今の相遇ふこと蓋し宿因に符へり、即ち與に剃髮す、尊者の偈に曰く、「道に入りて理に通ぜざれば、身を復して信施を還す」と。
⑤ 第一句、弟子衰老せり師に事ふることを能はず、願はくは次

子を捨て、出家せしめんと云ふを頌す。

① 以下二、三、四は、後來此の子果して羅睺羅多尊者と稱して大教主と爲り、室羅筏城畔に於て、大法幢を立て大法施を行す、是れ寔に放光動地にあらずや。金水は河の名なり。

② 二十六祖不如蜜多尊者は南印度天徳王の子なり、法を二十五祖婆舍斯多尊者に嗣ぐ、尊者偈有り、曰く、「聖人知見と説く、境に當つて是非無し、我れ今眞正を悟る、道無く亦理無し。」以下此の文に同じ。

③ 鵝林曰く、「此の頌全篇、秋光一片寥廓虛靜底を賦して、以て人人本具底の眞性、純清絶點、圓明虛凝なるを演ぶ、豈に特り蜜多大夫のみならんや、箇箇大丈夫、一點の障難無く一點の瑕弊無し、所以に言ふ月高うして松頂孤光冷じと、

是れ上下四維叢羅樹木、總に是れ一團の秋光なるものに非ずや。」

④ 縱ひ生死有り、涅槃有り、佛法有り、王法有り、付鉢有り、傳衣有るも、總に是れ秋風の殘雲を逐ふが如し、この中吉凶無く、榮辱無く、障礙無く、災害無し、所以に言ふ、四海涓涓として百川落つと、謂ふ可し無影樹下の合同船と。琉璃殿上は碧巖十八則無縫塔の語に耽源云く、「琉璃殿上に知識無し。」

⑤ 福州の玄沙師備宗一禪師は法を雙峰に嗣ぐ。此の語、碧巖八十八則にあり。
⑥ 此の頃、鵝林評して曰く、「此の三種病根甚だ深重なり、庸醫の望、神魂を惱すと雖も、輒く診候すること能はず、豈に病根を抜くことを得んや、特り雲門大師のみ有り、退後進前の際に於て、三指を如へ

を以て挫く。僧退後、門云く、「汝是れ患盲にあらず。」復た近前來と喚ぶ、僧近前す、門云く、「汝是れ患聾にあらず。」乃ち云く、「還つて會すや。」僧云く、「不會。」門云く、「汝是れ患瘧にあらず。」僧此に於て省有り。

盲聾瘧誰か能く接せん、退後近前指下明かなり、多くは珍候沈動の處に向つて、知らず三種一毛病。

翠岩、夏末衆に示して云く、「一夏已來、兄弟の與に東説西話す、看よ翠岩が眉毛在りや。」保福云く、「賊と作る。人心虚る。」長慶云く、「生せり。」雲門云く、「關。」

偷眼才に開いて先づ手を下す、眉毛生也月方に明かなり、雲門の關子萬重の鎖、直に而今に至つて夜行を絶す。

鹽官、一日侍者を喚んで云く、「我が與に犀牛の扇子を將ち來れ。」侍者云く、「扇子破れ了れり。」官云く、「扇子既に破れば、我れに犀牛兒を還し來れ。」侍者對無し。投子云く、「將ち出づることを辭せず、恐らくは頭角全からざらんことを。」雪竇拈じて云く、「我

れ全からざる底の頭角を要す。」石霜云く、「若し和尚に還さば即ち無し。」雪竇拈じて云く、「犀牛兒猶ほ在り。」資福一圓相を畫して中に於て、一の牛字を書す。雪竇拈じて云く、「適來什麼と爲てか將ち出さざる。」保福云く、「和尚年尊し、別に人を請せば好し。」雪竇拈じて云く、「惜む可し、勞して功無きことを。」

犀牛の扇子清風起る、清風を坐斷して氣を出すこと難し、破了當年重ねて用ひ去る、烟に和して搭在す玉欄干。

雪峰住庵の時、兩僧有り、來つて禮拜す。峰來るを見て手を以て庵門に托して身を放つて出でて云く、「是れ什麼ぞ。」僧亦云く、「是れ什麼ぞ。」峰低頭歸庵。僧後に岩頭に到る、頭問ふ、「什麼の處よりか來る。」僧云く、「嶺南より來る。」頭云く、「曾て雪峰に到るや。」僧云く、「曾て到る。」頭云く、「何の言句か有る。」僧前話を擧す。頭云く、「佗什麼とか道ひし。」僧云く、「佗無語、低頭歸庵。」頭云く、「噫、我れ當初悔ゆるは佗に向つて末後の句を道はざりしことを。若し伊に向つて末後の句を道はゞ、天下の人雪老を奈

ず、九候を察して、診候未發の處に於て、深く三種の病根を見る、謂ふこと莫れ、既に是れ一毛病、元來皮膚疥癬の少病なりと。

① 明州翠巖の令參永明禪師、法を雪峰の義存禪師に嗣ぐ。此の話碧巖八則に出づ。

② 人心虚なりは「びくびく、おちつく」の意、虚怯なり。

③ 偷は姿、ぬすむなり。此の頃鶴林評して曰く、「四大老の用處、恰も軍中暗號密令の如し、一隊同火の上士は一見して便ち落處を知る、所以に言ふ、眉毛生也月方に明かなりと、試みに言へ、作麼生か是れ明處。雲門の關子萬重の鎖とは此の那一關、縛よりも縛に、鐵よりも堅し、天を照し地を照す、豈に夜行のみならんや。」

④ 杭州鹽官鎮國海昌院齊安禪師は法を馬祖に得たり。傳燈七に詳に出づ。此の話、碧巖四十九則にあり。

⑤ 傳燈十五に云く、「翠微無學禪師の法嗣舒州投子山大同禪師は本州懷寧の人なり、姓は劉氏。」

⑥ 會元五に云く、「潭州石霜山慶諸禪師は法を道吾宗智に嗣ぐ。」

⑦ 會元九に云く、「吉州資福如實禪師は法を西塔光穆に嗣ぐ。」

⑧ 保福は法を雪峰に嗣ぐ。會元第七に傳あり。

⑨ 鶴林曰く、「作麼生か是れ清風起る。」

⑩ 又曰く、「作麼生か是れ清風出す底の氣。」

⑪ 又曰く、「試みに言へ、當年何人が用ひ得て痛快なる、投子底是か、雪竇底是か、石霜底是か、資福底是か、如何が點檢し去らん。」

何ともせじ。僧夏末に至つて再び前話を擧して請益す、頭云く、「何ぞ早く問はざる。」僧云く、「未だ敢て容易ならず。」頭云く、「雪峯我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せず、末後の句を識らんと要せば、只だこれ是れ。」

同條に生ずる處不同死、明頭を拈却して暗頭を收む、此れより身を放つて歸庵し去る、今に至つて簾外鬼神愁ふ。

鴻山、五峯、雲岩同じく百丈に侍立す、百丈、鴻山に問ふ、「咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。」鴻山云く、「却つて請ふ、和尚道へ。」丈云く、「我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪はんことを。」復た五峰に問ふ、峰云く、「和尚也た須らく併却すべし。」丈云く、「人無き處祈願して汝を望まん。」又雲岩に問ふ、岩云く、「和尚有りや未だしや。」丈云く、「我が兒孫を喪はん。」

東街の柳色烟に和して翠に、西巷の桃花相映じて紅なり、幾度か春風晚鐘の裏、遊人意を著けて寥空に到る。

南泉、百丈の涅槃和尚に參す、丈問ふ、「從上の諸聖、還つて人の爲に説かざる底の法有りや。」泉云く、「有り。」丈云く、「作麼生か是れ人の爲に説かざる底の法。」泉云く、「不是心、不是佛、不是物。」丈云く、「説了也。」泉云く、「某甲は只だ與麼、和尚作麼生。」丈云く、「我れ又是れ大善知識にあらず、争か説不説有ることを知らん。」泉云く、「某甲不説。」丈云く、「我れ太煞だ備が爲に説き了れり。」

從上爲人の事、老胡の知を容さず、寒雲幽石を抱き、霜月清池を照す。大隨、僧に問ふ、「什麼の處にか去る。」僧云く、「普賢を禮し去る。」隨、拂

表裏、摸寫し來て機綱たり。雪峯義存禪師は法を徳山宣鑑禪師に嗣ぐ。此の話、碧巖五十一則にあり。

嶺南は飛猿嶺の南を謂ふ。

此の頌、鶴林評して曰く、「今時往往に解し得て道ふ、同條生死の一著の如き、黒漆桶裏に墨汁を盛るに似たり、何れの處にか觸が悟解了知を容れん、所以に言ふ、明頭を拈却して暗頭を收むと、畢竟看來れば巖頭も亦暗頭合、雙峰も亦暗頭合、是の故に身を放つて歸庵し去る、低頭歸庵の端的、縱使ひ佛祖も觀破することを得ず、所以に簾外鬼神愁ふと、錯錯、若し是れ果して此の如くならば、巖頭什麼に依つてか言ふ、我れ當初悔ひらくは他に向つて末後の句を道はざりしことなと。唯だ還關正觀底の上士のみ有りて、

し。

第一句、二老の言論往來全篇舉揚し了れり。

第二句、二大老の相見底、縱令ひ默照邪禪の瞎徒、庸常下劣の部類、恰も田夫の階下に立ちて、中書臺上の事を聞くが如し、所以に言ふ、縱ひ老胡も親しく了知することを容さずと。

其の八踏古雅、更に一事の比況に堪へたる無し、若し強ひて等匹を求めば、南泉は第三句の如く、百丈は第四句の如し。

大隨法常禪師は法を長慶安禪師に嗣ぐ。此の話、傳燈十一、師の章にあり。

鶴林評して曰く、「大隨既に明頭差別の獨位に立ちて遠く聞く、僧も亦明頭差別の獨位に立ちて遠く答ふ、大隨既に暗頭無差別の正位に入りて近く

子を擧して云く、「文殊普賢、總に這裏に在り。」僧圓相を作して背後に抛向す。乃ち兩手を展ぶ。隨云く、「侍者一帖の茶を取つて、這の僧に與へよ。」遠く聞き近く見る一賓主、半暗半明孰與か揚げん、若し是れ箇中全く用ひ去らば、普賢特地に亡羊を逐ふ。

三角の總印云く、「若し此の事を論せば、眉毛を脛上すれば早く已に蹉過せり。」麻谷便ち問ふ、「眉毛を脛上することは即ち問はず、如何なるか是れ此の事。」角云く、「蹉過せり。」谷乃ち禪床を抵す、角之れを打つ、谷無語。地獄天堂、阿刺刺、機關直下に把るべき没し、姦生子變多くして卻つて得難し、雙放

雙收新羅を過ぐ。

維摩詰、文殊師利に問ふ、「何等か是れ菩薩の入不二法門。」文殊師利云く、「我が意の如きんば、一切の法に於て無言無説無示無識、諸の問答を離る、是れを入不二法門と爲す。」維摩に代つて打出す、是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、「我等各自に説き已る、仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩の入不二法門。」維摩默然たり。文殊に代つて乃ち喝す。

國譯大燈師語錄

不二法門何ぞ再び説かん、二千三萬一齊に来る、當年妙吉親しく用ひ去る、病翁を扶け得て口を開かしむ。

示す、僧も亦暗頭無差別の正位に入りて近く呈す、賓主唱和の間、誰か躍由を辨ぜん、所以に言ふ、執か揚げんと、然りと雖も國師の心、寤に謂らく、未だ善盡さず、大隨若し者の僧兩手を展ぶる處に於て本分の草料を行じて、痛く一頓を與へば、縱令ひ六牙の象王も方に迷ひ度を失はん、惜い哉全く用ひ去らざることな。

云ふ意。此の句、總印と麻谷と相見し、法戰一場、一往一來、活達脫洒、抑揚褒貶、殺活自在、天上・佛界・魔宮・全く比倫無く、等匹無さを頌す。機關は宗師家が學人を接待する巧妙の手段作略を云ふ。此の句、言ふ意は、機關變換、豪放不羈、縱ひ佛祖も把著すること能はずと。

云ひ、覺有情と譯す、菩提とは覺智のこと、薩埵とは、衆生のこと、覺智を求むる有情の義にして、諸佛の覺智を得んとして修行する大士に名づく、即ち上、菩提を求め、下、衆生を教化する悲智の二願を具し、自利化他の行を全うする修行者を云ふ。

⑥六識を具するや也た無や。州云く、「急水上に毬子を打す。」僧復た投子に問ふ、「急水上に毬子を打す、意旨如何。」子云く、「念念不停流。」

⑦六識問ひ來つて識破し難し、趙州老大只廢に酔ゆ、憐む可し同道實頭の漢、道へ道へ念念不停流。

⑧京兆米和尚、因に老宿有り、問ふ、「月中斷非索、時人喚んで蛇と作す。未審し七師佛を見て、喚んで什麼とか作す。」米云く、「若し佛見有らば即ち衆生に同じ。」宿云く、「千年の桃核。」師、「米和尚に別して幕口に一拳せん。」

⑨斷非索子、月中蛇と爲る、衝氣毒を吐き、跳沫波を馳す、生や佛や齊しく語り難し、多劫

潛微滅磨に歸す、滅磨せず、紫金光聚山河を照す。

⑩雲門云く、「古人道く、人人盡く光明の在る有り、看る時見えず暗昏昏。作麼生か是れ光明。」代つて云く、「厨庫三門。」又云く、「好事も無きには如かす。」

⑪九天雲淨うして衆星微なり、風興何ぞ一句の詩を餘さん、今夜君と無事にし去る、時人喚んで那斯祈と作す。

⑫三門厨庫是れ光明、見不見の時辨別し難し、好事も元來無きには如かず、烏鷄半夜生鐵を啄む。

⑬馬大師不安、院主問ふ、「和尚近日尊候如何。」大師云く、「日面佛月面佛。」
⑭日面佛月面佛、三三兩兩太だ端無し、二

頤を見る、掌上を見るが如くならん云々。

⑮京兆府の米和尚、また七師と謂ふ、法を瀟山に嗣ぐ。此の話、傳燈十一師の章に出づ。

⑯鶴林禪師評して曰く、「國師此の頤、賓主唱和講說の處を見徹して餘蘊無し、寔に貪ぶ可し、所謂斷非索子の一問、塗毒鼓の如く大火聚に似たり、擬議するときは則ち喪身失命せん、所以に言ふ、衝氣毒を吐き、跳沫波を馳す、七師老宿の意會せず、生と説き佛と説くと。所以に齊しく日を同じうして語り難き重病なり。

⑰老宿曰く、千年の桃核と、金鏈影動き、寶劍光寒じ、七師曠劫潛遁の窟宅、碎いて微塵と作る、知らず金光天地を照すや也た否や。」
⑱此の話、碧巖八十六則にあり。

⑲鶴林禪師評して曰く、「此の頤全篇大師の示衆を述ぶ、情量の及ぶ可きに非ず、知解の狭む可き無し、譬へば十分の秋光の如し、物の比倫に堪へたる無し、我れをして如何が説かしめん、是れ雲淨く星微なるは仲秋滿輪の時に非ずや、此の時、言語道斷、只だ默然として寢坐するのみ。那斯祈は福州の郷談、無分曉の謂ひなり、三門厨庫光明の一語、備が佛見法見、悟解了知、縱ひ千般の神通妙用を盡すとも終に辨得することを得ず、況んや好事も無きには如かざるの一語、明眼の衲僧も倒退三千、恰も烏雞半夜生鐵を咬むに似たり、縱ひ佛祖も識破すること能はず、再來扶桑の靈門大師に非ずんば、誰か能く頤し得て此に到らん。」

⑳此の話、碧巖第三則にあり。

⑳鶴林禪師評して曰く、「此の話寔に難信難入、此の水邊、彼の林下、三三頭を聚め、兩兩肩を結んで、千般の智解、百種の神通を運らし去るも其の邊表を窺測するに由し無し、宜なる哉、縱ひ參玄の上士、二三十年千辛萬苦する有るも轉た看れば轉た難し、備世智辨聰の邪黨切に陀羅尼の會を作し去り、一喝の會を作し了ることを。」

㉑此の語碧巖七十七則にあり。鶴林禪師評して曰く、「雲門大師曰く、胡餅備如何が齒牙を下し得ん、備穢に擬兼思量せば、獼猴の浩波に落つるが如し、乍ち喪身失命し去らん、者回黑雲霧を吐くことを休めよ、寥廓たる天邊白虹無しと、古人胡餅の話を頤し得る處、知んぬ幾許ぞ、就中、國師此の頤、古今に獨歩して、最妙

最妙最第一なり、備若し此の頤を見得ること掌上を見るが如くならば、備に許す胡餅の話を參究すること。更に參ぜよ三十年。」
㉒摩斯吒は名義集二に曰く、或は摩迦吒、或は未迦吒と云ひ、此には獼猴と云ふ。
㉓此の緣、會元禪師丈性政禪師を涅槃和尚と作す。鶴林評して曰く、「古の禪門盛んなりし日、南岳、馬祖、百丈、黃檗、臨濟、興化、南院、風穴の諸老、毎日鼓を鳴らして普請し、披石、搬土、水薪、菜蔬、一日作さざれば一日食はず、艱辛刻苦の上に於て、各の動中の得力を求む、千變萬狀、盡く是れ宗師爲人の手脚、學人著力の樞要なり、若し兩手を展開する處に向つて、大義を見んと要せば甚だ遅了なり、還うして違うし云々。」

十年來苦辛の客、精微を照絶して見ることに大いに難し。

僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談。」門云く、「胡餅。」

① 觀面胡餅口を下し難し、摩斯吒徒に瀾中に入る、者回黑雲霧を吐くことを休めよ、寥廓たる天邊白虹無し。

② 百丈惟政禪師、一日衆に謂つて云く、「汝我が爲に田を開け、我れ汝が爲に大義を説かん。」僧衆、田を開く、竟に和尚の大義を説かんことを請ふ。百丈便ち兩手を展開す。

③ 閃電激し怒雷馳す、眼裏耳裏箇の觀機、昨夜三山三跳の後、北辰鬼谷擬議を作す、擬議を作す、七佛の祖師曾て知らず。

④ 平田普岸禪師、因に僧有り、到參す、平田打つこと一拄杖す。

其の僧近前して拄杖を把住す。平田云く、「老僧適來造次なり。」僧卻つて平田を打つこと一拄杖す。平田云く、「作家作家。」僧禮拜す。平田把住して云く、「是れ閻梨造次なり。」僧大笑す、平田云く、「這箇の師僧、今日大いに敗せり。」

① 鶴林禪師評して曰く、「此の頃全齋、百丈兩手を展開する處を賦す、情景の窟宅を碎き、智解の窠臼を破る、怒雷の石壁を劈くが如く、金翅の鯨波を搏つに似たり、天關を廻し地軸を轉す、天に南斗北辰有り、各の其の位に在り移動せざることを車輪の如く、衆星運轉車輪の循環するが如し、夫れ天文を請じ地理に通づるとは鬼谷子に越えたるは無し、今夜百丈大用の示衆に依つて乾坤色を失ひ、日月光を吞む、南斗北辰盡く位を失し處を換ふ、大小大の鬼谷、星斗の所在に透ふ、世に鬼谷のみならんや、縱ひ文殊大士も他の落處を知らず。」

② 三山は、一に蓬萊、二に方壺、三に瀛州、跳は、などると訓す。

③ 平田普岸禪師は、法を百丈海

① 一向一背親しみ易からず、互換の鎗略鼓旗別なり、干將の劍未だ甲鏊を斬らず、夏服が箭何ぞ七札を穿たん、鬼哭し神悲しむ、崖崩れ石裂けて還た難厥、師僧今日大いに敗缺。

② 大慈山寰中禪師住庵の時、南泉至り問ふ、「如何なるか是れ庵中の主。」寰云く、「蒼天蒼天。」泉云く、「蒼天は且

く置く、如何なるか是れ庵中の主。」寰云く、「會せば即便ち會せよ、切切なること莫れ。」南泉拂袖して出づ。

③ 庵中の主見ること還つて難し、句裏身を藏して太だ端無し、偷眼暫時休すや也た未だしや、夜深うして誰と共にか關山を過ぎん。

④ 僧、藥山に問ふ、「平田の淺草塵鹿群を成す、如何なるか塵中の塵を射得せ

禪師に謂く。此の條、燈燈七に載す。

① 鶴林禪師評して曰く、「此の頃始終賓主相見の間、互換の機有ることみ賦す、兩箇機鋒後利、干將の劍よりも快く、夏服が箭よりも疾し、就中、國師甚だ平田未後、者箇の師僧今日敗缺と道ふを愛す、所以に道ふ、崖崩れ石裂けて還た難厥、師僧今日大に敗缺と。」

② 干將は劍の名なり、甲は甲冑なり、鏊は首鐵なり。

③ 文選子虛賦に曰く、「夏服の勁箭を右にす」とあり、札は甲葉なり、一葉を一札と云ふ。

④ 大慈山寰中禪師は法を百丈海禪師に嗣ぐ。傳燈七に之れを載す。

⑤ 蒼天は悲み嘆く時に發する語にして、「あーあー」と云ふ程の意なり。

⑥ 鶴林禪師、評して曰く、「庵中

賓主相見の端的、鬼神も海ること能はず、塵外も辨すること得ず。」

⑦ 又曰く、「句裏に身を藏す底の身、聲聞身なりや、菩薩身なりや、長者身なりや、居士身なりや、爾若し辨別して分明なることを得ば、爾に許す參學の眼を具することを得。」

⑧ 偷眼は、ちらつと盗み見るなり。鶴林評に曰く、「此の句言ふころは、寰中云く、蒼天蒼天、此の語、漢に透り泉に徹す、南泉豈に佗の落處を知らざらんや、故らに此の不聰明を露はして即ち言ふ、蒼天は且く置く、如何なるか是れ庵中の主と、此れ但だ寰中を見盡さんと欲するのみ、甚だ賊機有り。」

⑨ 又曰く、「路東疊終日行いて曾て人を見ず、猿虎朝に道内に伸び、麝麝共虛谷に叫ぶ、南

ん。山云く、「箭を看よ。」僧、身を放つて便ち倒る、山云く、「侍者這の死漢を拖き出せ。」僧便ち走る、山云く、「泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん。」雪竇拈じて云く、「三步には活すと雖も、五歩には須らく死すべし。」

慧忠國師、紫璘供奉と論議し、既に座に升る。供奉云く、「請ふ、師立義せよ、某甲破らん。」忠云く、「立義し竟んぬ。」供奉云く、「是れ什麼の義ぞ。」忠云く、「果然として見ず、公の境界に非ず」といつて便ち下座。

祖風迦に振つて機輪轉す、學海濶忙しうして自ら頭を没す、大鵬一舉す九萬里、籬邊の燕雀空しく啾啾たり。

僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」山云く、「麻三斤。」

木落ちて岩崗鋒骨冷じ、月斜にして禪石曉開け難し、寒雲伴ひ來つて閑不徹、飛瀑從他あれ忽雷を起すことを。

六祖云く、「不思議不思議、正當恁麼の時、明上座、本來の面目を還し來れ。」

五歩は款行三步は疾し、莫教あれ正眼頂門に開くことを、悠悠として見す庾嶺の路、脚後脚前歸去來。

霍山和尚、祕魔岩和尚凡そ僧有り、到つて

泉拂袖して出で去る、方寸の嶮峻關山の夜途に過ぎたり、寔に恐る可し。」

澧州藥山の惟嚴禪師は法を石頭希遷に嗣ぐ。此の縁碧巖八十一則にあり。

鹿は鹿の大なる者なり、群鹿之れに隨ひ、皆鹿の往く所、羖尾の轉する所を視て準と爲す、是れ鹿中の王なり。鶴林禪師評して曰く、「是れ死蛇と雖も弄することを解すれば又活く、此の項甚だ者の僧を扶起するものに似たり、壘中の壘走り得ること三步、走り得るは寔に好し、五歩登に虎兒を趁ふことを用ひんや、若し是れ唱和相應じ、全く勝敗無く、全く等差無き底、作麼生か虎兒を趁ふて、何れの處に脚跟を留めん、心を擧して向はん」と擬すれば、兎角龜毛別山を過ぐ、所以に言ふ、獵

人徒に坤維に覓むること莫れと。」

南陽慧忠國師、法を六祖大師に嗣ぐ。傳燈三師の章に之れを載す。

鶴林禪師評して曰く、「忠國師既に大智無智の正位に向つて大義を立つ、供養還つて情量意解の小智を廻して、以て大義を破らんと欲するに似たり、恰も蚊虻空裡の猛風を柱へんと欲す、自ら其の量を知らざる者に非ずや、胸海の學解、波浪天を漫して沸蕩して、覺えず自ら頭出頭没す、國師は大鵬九萬里の羽翮を展開して、長空を蓋ふが如く、供奉は燕雀の籬邊に在りて空しく啾啾たるに似たり。」

啾は小聲なり。

洞山守初禪師、法を雲門の三頓棒下に嗣ぐ。此の話、碧巖十二則にあり。

此の縁、六祖壇經に見ゆ、修行者既に黃梅の衣鉢を得、夜半江を涉り嶺を越えて、將に嶺南に往かんとして、是に於て黃梅七百の高僧、潮の如く湧き蜂の如く起つて、追つて他の衣鉢を奪はんと欲す、中に明上座なる者有り、もと將軍にして甚だ勇壯なり、衆に先つて走り、上る者半日程、遂に修行者を見る、行者既に事の急なるを見て、衣鉢を石上に抛つて曰く、「此の衣は信を喪す、力を以て争ふべけんや」と云つて草莽の中に隠る、明提げ振るに動かす、乃ち喚んで曰く、「行者、我れ法の爲に來る、衣の爲に來るにあらず。行者遂に出でて盤石の上に坐す、明即ち作禮す、鹿曰く、「不思議不思議云々。」

此の頌、鶴林禪師評して曰く、「慧能曰く、不思議不思議、正

與麼の時、如何なるか是れ明上座本來の面目と、是れ前箭は猶ほ輕く、五歩款行に似たる者なり、自己に返照して看よ、寔は還つて汝が邊に在らんと、是れ後箭は猶ほ深し、三步疾に似たり、是に於て明上座、正眼頂門開く、開いて這の什麼を看る、豈に庾嶺の路にあらずや、上、諸佛を見ず、下、衆生を見ず、生死涅槃を見ず、煩惱菩提を見ず、此に到りて前佛後佛、先賢後賢、全く一步を進むことを得ず、總に是れ禹門點額の魚、所以に言ふ、歸去來と。」

霍山景通禪師、法を洞山結禪師に嗣ぐ、祕魔岩和尚、法を永泰禪師に嗣ぐ。傳燈十一に此の縁を載す。

禮拜すれば、木叉を以て叉著すといふことを聞いて、霍山一日遂に往いて之を訪ふ。才に見て禮拜せず、直に祕魔懷裏に入る。祕魔霍山の背を拵つこと三下す、霍山起つて手を拍つて云く、「此の老一千里の地、我れを賺し來る」といつて便ち回る。

當機提げ觀面疾し、取次用ひ來る若爲の宗ぞ、箇箇一千應に走卻すべし、草鞋跟斷えて清風起る。

梁の武帝、達磨大師に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨云く、「廓然無聖。」帝云く、「朕に對する者は誰ぞ。」磨云く、「不識。」

廓然不識幾人か有る、古路橫行嶺烟を鎖す、

逼拶す、移覺從前、精練透關の眼有りて、一見に見發して排撥す、賓主各の疑議に涉らず、情量を添へず、險なることは伎女の竿を走るが如く、活なることは、市兒の丸を弄するに似たり、縦ひ明眼の衲僧も他の落處を辨すること能はず、什麼に依つて、斯くの如く剛遠なる、古人撰草瞻風、險峻を數千里の外に跋渉し、風霜二十年の間に困苦す、許多の草鞋を踏斷して、始めて此の田地に到る云云。

此の縁、碧巖一則にあり、評に説いて詳かなり。
此の頌、言ふころは、廓然不識の話、四海を一掃して、落處を知らず、譬へば深山岩崖、寒煙古路を埋め、斜霧洞口を鎖す底の人跡不到の處に於て、一人有り、經行坐臥せんに、人更に知ることをばざるが如し、宜なるかな、神光大師、此の向上の秘訣を透過せんが爲に、密參苦吟、遂に少林深雪に立つに到りて、左臂を截斷して初めて判識を別つ。

風穴延昭禪師、法を南院願禪師に嗣ぐ。此の垂語、廣燈十五に載す。
鶴林禪師評して曰く、爾看よ、此の頌甚だ天眞甚だ絶妙なることを、風穴の全身を摸寫し來りて、爾前人の面前に推し出す、選つて相見の分有りや、試みに言へ、嘯聲謳歌、甚塵に依つてか一塵に在る、誰れ人を指してか同生同死底の衲僧と爲ん、就中、轉結兩句甚だ絶妙甚だ窮玄なり、風穴の垂語と並立して最後兩重の圓鎖と爲す、兩鏡並照して中心影像無きに似たり云云。
玉露に、嘯聲は憂患樂まざる

此れより少林深雪の裏、斷臂刀下に疎親を別つ。

風穴、垂語して云く、「若し一塵を立てば家國興盛し、野老嘯聲す。若し一塵を立てざれば家國喪亡し、野老謳歌す。雪竇拄杖を拈じて云く、「還つて同生同死底の衲僧有りや。」

嘯聲謳歌一塵に在り、同生同死何人にか憑る、紅霞碧霧高低を籠む、芳草野花一樣の春。

南嶽懷讓、一僧をして馬祖の處に到り去らしめて云く、「但だ作麼生と問へ、伊が道ふ底、言語を記し將ち來れ。」僧去つて一に懷讓の旨の如くし、回つて懷讓に謂つて云く、「馬祖云く、胡亂より後三十年、曾て鹽醬を闕かず。」讓之を然りとす。

朝三千暮八百、箇箇一著を放過す、生鐵土壤に和するが如し、大治も拈却を解く可し。

頌 古終

の狀。
これを誦するを歌と謂ひ、齊しく歌ふを謳と謂ふ。
南嶽懷讓禪師は、法を曹溪六祖惠能大德禪師に嗣ぐ。
馬祖は法を南嶽懷讓に嗣ぐ。
此の頌、鶴林禪師評して曰く、「朝三千暮八百、此の兩句恰も馬祖大師一幅の掛眞を見るが如し、面目現在却つて寒毛卓立することを覺ゆや、馬大師の一語と、又是れ白壁一雙、生鐵土壤に和するが如し、大治も須らく拈却すべし云々。」
一著を放過すは、「一と手をゆるす」と譯す。

拈古

① 舉す、臨濟上堂云く、「一人は孤峯頂上に在つて出身の路無く、一人は十字街頭に在つて亦向背無し。那箇か前に在り那箇か後に在る。維摩詰と作さざれ、傅大士と作さざれ。珍重。」師云く、「將に謂へり、龍頭蛇尾と、元來只だ是れ蛇尾龍頭。然も是の如くなりと雖も、深く指示を領す。」

② 舉す、欽山、岩頭・雪峰と同じく徳山に到る、乃ち問ふ、「天皇も也た恁麼に道ふ、龍潭も也た恁麼に道ふ、未審し徳山作麼生か道はん。徳山云く、「汝試みに天皇、龍潭底を舉せよ看ん。」欽山擬議す、徳山便ち打つ。欽山、延壽堂に歸つて云く、「是なることは則ち是、我れを打つこと太煞だし。」岩頭云く、「爾與麼ならば、他後徳山に見ゆと道ふこと莫れ。」師云く、「可惜許。」

③ 舉す、雲門上堂云く、「人に遇ふときは即ち鼻孔遼天。」師云く、「笑ふに堪へたり這の老漢、赤脚にして刀山に上り、毛を披して火聚に入る

① 拈古は、古則則ち古徳が大法を商量問答せられたる機縁を拈評するの義。
② 此の上堂、臨濟録並に傳燈十二、師の章に之れを載す。
③ 以下、國師拈古の語なり。
④ 此の條、傳燈二十二に載す。
⑤ 會元七に云く、「荊州天皇道悟禪師は、婺州張氏の子、法を石頭遷に嗣ぐ。」
⑥ 龍潭崇信禪師は、其の家、餅を賣るを以て業とす、當時道悟天皇寺に住す、師の家寺の側にあるを以て、常に寺に行きて、道悟に餅を贈れり、遂に道悟に依つて出家し宗旨を悟る、後、澧陽龍潭に詣つて庵を結んで居る。

ことを。其れ笑を解する底も也た少なることを爭奈せん。」

④ 舉す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ透法身の句。」門云く、「北斗裏に身を藏す。」師云く、「衆生若し法身に非ずんば、即ち衆生に非ず、法身若し衆生に非ずんば、亦法身に非ず、透の一字誰に因つてか致し得ん。直饒ひ是れ北斗裏に身を藏すも、謂つ可し首羅の三目、伊字に似たりと。」

⑤ 舉す、雪竇、衆に示して云く、「譬へば二龍珠を争ふが若し、爪牙有るものは得ず。或は衲僧有り、既に是れ爪牙有るものは什麼としてか得ざる」と問はゞ、請ふ大衆、雪竇が爲に一轉語を下せ。」師云く、「其れ貧しうして儉を學ばず、富んで奢を學ばず、此れは是れ俗漢の陋韻、卻つて言を知れりと謂つ可し。且く諸人に問ふ、二龍の爪牙、雪竇の爪牙と孰與れ。他既に珠を争うて之を得ず、這の老、箇の什麼を争うてか得ざる。請ふ各一點語を下せ。」

⑥ 舉す、趙州、投子に問ふ、「大死底の人、卻つて活する時如何。」投子云く、「夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。」師云く、「趙州は歩を移して身を移さず。投子は身を移して歩を移さず。然も虚を承け響を接すと雖も、争奈せん他後舉し得る者少なることを。」

① 延壽堂は病僧寮なり。
② 以下國師の拈古なり。
③ 可惜許の許字、語助なり。
④ 此の上堂、會元師の傳に載せず、本録にこれを出す。
⑤ 遷は塚なり、「かすめる」と訓す、氣字王の如く、衝天の勢あるを云ふ、又自負高慢の意にも用ふ。
⑥ 以下は國師の拈語。
⑦ 亦脚は「すあし」なり。
⑧ 此の問答、傳燈十九に之れを載す。
⑨ 以下、國師の拈語。
⑩ 此の示衆、師の本録に載す。
⑪ 以下、國師の拈語。
⑫ 此の語、傳燈十五投子章に載す。
⑬ 以下、國師の拈語。

③ 舉す、臨濟、侍者をして徳山に傳語せしむ、侍者云く、「徳山人を打することを要す。」濟云く、「汝但だ去れ、伊が棒を拈するを待つて接住して、一送を與へば、汝を打せざることを管取せん。」侍者數ふる所に依る、果然として打せず。歸つて臨濟に舉似す、濟云く、「我れ從來、者の漢を疑著す。」師云く、「蓋し是れ作者の動止、鬼神も測り難し。一人は海枯れて終に底を見る處に向つて、千聖の頂額に坐斷し、一人は人死して心を知らざる處に向つて、鶩子の眼睛を瞎却す。咳、貴ぶ可し賤む可し。」

④ 舉す、雪竇一日、僧に問ふ、「汝浴すや未だしや。」僧云く、「某甲此の生浴せず。」竇云く、「爾浴せず、箇の什麼をか圖る。」僧云く、「今日和尚に勘破せらる。」竇云く、「賊は貧兒の家を打せず。」師拈じて云く、「雪竇老漢、才文武を兼ね、出でては將、入つては相、今日一口の鉛刀子を拈出せられて、高く降旗を墜つるに遭ふ。諸人雪竇を識らんと要すや。一種是の聲限り無き意、聽くに堪へたる有り、聽くに堪へざる有り。」

⑤ 舉す、風穴因に僧問ふ、「如何なるか是れ清涼山中の主。」穴云く、「一句無著の間に違あらず、今に迄るまで猶ほ野盤の僧と作る。」師云く、「古人恁麼に答ふ、清涼の主を褒するか清涼の主を貶するか。若し是れ褒すと道はゞ、什麼に因つてか無著の間に違あらざるの句有る、若し也た貶すと道はゞ、他箇の什麼の過か有る。褒せず貶せずと道はゞ、風穴何を必ずしも恁麼の語話有る。端無く觸著すれば獅子嗥吼す。」

③ 此の條、臨濟錄勘辨に見ゆ。
④ 以下、國師の拈語。
⑤ 此の語、雪竇錄にあり。
⑥ 以下、國師の拈語。
⑦ 此の語、廣燈錄十五にあり。
⑧ 以下、國師の拈語。

ば獅子嗥吼す。」

① 舉す、臺山路上、一婆子有つて接待す。凡そ僧有つて、臺山の路甚麼より去ると問へば、婆云く、「驀直に去れ」と。僧才かに去れば、婆云く、「好箇の師僧、又與麼にし去る。」是の如くなること既に久し。游僧傳へて趙州に到る、州聞き得て云く、「待て、我れ去つて他を勘破せん。」遂に去つて臺山の路を問ふ、婆例に隨つて云く、「驀直に去れ。」州才かに行き、婆又云く、「好箇の師僧、又與麼にし去る」と。州回つて云く、「我れ婆子を勘破し了れり。」師云く、「盡く謂ふ、日下に孤燈を挑ぐと、殊に知らず失錢遺罪なることを。」

② 舉す、臨濟上堂云く、「一人有り、劫を論じて途中に在つて家舎を離れず、一人有り、家舎を離れて途中に在らず、那箇か人天の供養を受くべき」といつて便ち下座。師云く、「這の老漢、威容嚴肅、鶩子到る者其の舉措を失はず。大家寢默僂仰、日を過ぎて道を見ず。衆人の唯唯は、一士の謬謬に如かず。若し是れ人天の供養ならば、一人を擇び取らんことを要す。」

① 此の語、聯燈錄六、趙州章にあり。
② 五臺山、世傳へて北方文殊師利所居の地と云ふ、清涼山即ち是れなり。
③ 此の語、臨濟錄にあり。
④ 以下、國師の拈語。

拈古終

大燈國師行狀

大燈國師、臨濟の宗旨を、横嶽・萬壽・建長に唱ふるに幾乎と四十年、其の間、^① 摠衣者幾何といふことを知らず、師は其の一なり。師諱は妙超、宗峰は其の號なり。播州に生る、揖西縣紀氏の子なり。父母本州書寫山如意輪觀音に禱り、母夢みらく、一僧手に白花の五葉を開くを携へて之に與ふ、妊むこと有り。妊んで後寐ぬるが如くにして寤めず、其の誕の時に至つて熟睡して知らざるなり。保母俄に^② 呱地一聲を聞き、往いて之を見る。未だ^③ 澡浴せずして肌體瑩潔、^④ 克く岐に克く巖に、頂骨聳立、^⑤ 伏犀額を挿み、目光人を射る、面前の人に隨つて能く顔目を轉す。五歳の時、人の刀を^⑥ 剛に發するを見て云く、「何の爲にして作すや。」云く、「貴ぶらくは快利を圖る。」云く、「不快利の處、快利有り、備還つて知るや。」其の人測ること問し、師呵呵として大笑す。事に觸れ言を以て人を^⑦ 挫折す、若し比親族諫めて之を住めしめんと欲する者有れば、棒を拈じて便ち打つ、郷

① 行狀は身の行ひ振りと云ふこと、國師一生の言行、履歷を記したる文書なり。
 ② 大燈國師の傳、最初大徳開堂法語の下に註す。
 ③ 筑前横嶽山萬年崇禪禪寺、京都の九重山萬壽禪寺、鎌倉巨福山建長禪寺なり、大燈錄にその法語あり。
 ④ 摠衣者は、侍衣侍者と云ふに同じ、摠は「ひとごと」と訓す。
 ⑤ 呱地は小兒の啼く聲。
 ⑥ 澡浴は産湯なり。
 ⑦ 巖本巖に作る、小兒の知有るを云ふ、詩の大雅に、克く岐に克く巖に」とあり、巖に「岐は巖なり、其の貌巖々然とし

黨稱して神童と爲す。十有一歳、師書寫山戒信律師に事ふ、毎に靜處に屏坐して、志俗塵を厭ふ、經書目を過ぐれば誦を成す。一日慨然として云く、「假使ひ^① 九流三藏、百家異道の書を究むるも、争か若かん^② 不立文字直指單傳の宗に入らんには。」未だ剽染せずして、發足して^③ 京城並に相州に至り、諸尊宿に參問す。尊宿氣佛祖を呑む底と雖も、敢て其の鋒に嬰らす。建長長老に謁し、問うて曰く、「路に死蛇に逢うて打殺すること莫れ、^④ 無底の籃子に盛り將ち歸る、意旨如何。」老曰く、「^⑤ 放下着、者般底直下に便ち看取せよ。」師云く、「只だ直下に便ち看取せよと道ふが如きんば如何。」老擬議す、師乃ち喝す。萬壽に造つて佛國禪師に問うて曰く、「佛法多子無し、着衣喫飯の處即ち是れ。纔に^⑥ 恁麼の理會を作さば、早く是れ不是にし了れり。」國云く、「未だ恁麼の事を知らず、以前と而今と如何が區別せん。」師云く、「區は則ち區、別は則ち別ならず。」國云く、「試みに區別せよ看ん。」師、^⑦ 露柱を指して云く、「者箇を喚んで露柱と作さば、則ち昔時と迥に區なり、者箇を喚んで露柱と作さざれば、則ち而今已に別なり。」國云く、「豈に是れ佛法にあらざらんや。」師云く、「和尚、好箇の時節。」國云く、

て能く知り能くうがつ所あるなり」と。
 ① 四機活法に、犀は角、一は鼻にあり、一は額にあり、角に粟文有り」とあれば、蓋し、伏は伏在の義にして、額の眞中に「ほくら」のありしを云ふならんか。
 ② 砥石にて研ぐを云ふ。
 ③ 折挫は「やりこめる」こと。
 ④ 九流百家は、諸子百家と云ふが如し。三藏は經、律、論なり、一切藏經と云ふに同じ。
 ⑤ 建慶の宗旨なり。
 ⑥ 京城は京都、相州は鎌倉。
 ⑦ 放下着の着は助字にして、手を放して下に置くの意なり。
 ⑧ 恁麼はかくの如きと云ふに同じ。
 ⑨ 露柱は大黒柱と云ふに同じ。
 ⑩ 毘盧遮那佛の頂きと云ふこと。毘盧遮那は梵語、譯して

「只だ與麼の受用、老僧と別なり。」師云く、「若し和尚、某甲有りと思はば、佗日悔い去らん。」國云く、「平生日用の處、直下に道ひ來れ看ん。」師云く、「步步踏看す。毘盧頂、言言勘破す。維摩詰。」次の日、又來り問うて云く、「昨日と今日と、請ふ師辨別せよ。」國師云く、「什麼の昨日とか説かん、直に今日の事を道へ。」師云く、「雲は龍に従ひ風は虎に従ふ。」國云く、「雲未だ起らず、風未だ來らざる時如何。」師云く、「天上天下唯我獨尊。」國云く、「雲門云く、「我れ當時若し見しかば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめて、貴ぶらくは天下太平を圖らん」と、如何。」師曰く、「一口に吞却了也。」國、横に點頭して曰く、「此の語敢て肯はず。」師乃ち喝す、國亦喝す、師又喝して出で去る。國送つて門を出で、曰く、「我れ多少の學者を見るに、未だ嘗て公の如き。俊底に逢はず、宜しく祝髮披衣して吾が道に棟梁たるべし。」師、翌日重ねて佛國に參ず、國來るを見て曰く、「古人云く、大用現前、軌則を存せざる時如何。」師曰く、「和尚未問以前、已に現前すること久し。」國云く、「其麼の處にか在る。」師曰く、「夜來狂風吹く、門前一枝の松を折る。」師、手中の扇子を搗かす、國休し去る。師云く、「狂風豈に是れ扇子にあらざらんや。」國、大笑して云く、「纔に相似を見て却つて也た。踐過す。」師此に於て服膺す。自ら歎じて曰く、「人身得難く、佛法遇ひ難し、賤に遇うては則ち貴し、豈に丈夫の志ならん。」

- 光明徧照、或は漏一切處、大日徧照とも云ふ。
- 維摩居士なり。
- 一口に吞んでしまつたと云ふこと。
- 俊底は俊發の漢と云ふこと。
- 祝髮は剃髮するを云ふ。
- 踐過は踏みすべるなり。
- 服は着くるなり、府は胸なり、これを心胸の間に著けて能く守るなり。中庸に「拳々服膺して、之れを失はず」とあり。

と。遂に落髮受具、旦夕心を此の事に留む。一夕、僧堂に坐す、僧の壁を隔て、百丈の語を誦するを聞くに、云く、「靈光獨り耀いて迥に根塵を絶す。體露眞常、文字に拘らす」と、轟然として省有り。夜半門を叩いて其の見解を呈す。國云く、「既に是れ眞正の見解なり、宜しく法幢を建て宗旨を立すべし。」厥の後、大應國師、詔に應じて横岳より京師に來り、韶光庵に館す。師、相州に在つて其の手段辛辣なるを聞いて、京に趨つて徑に其の室に詣す。問うて云く、「學人遠遠、化下に來る、請ふ師一接せよ。」師云く、「老來力無し、且坐喫茶。」師云く、「愆廢に用ひ去らば、只だ恐らくは肯はじ。」國師云く、「偏は是れ新到、爭か這裏の事を知らん。」師云く、「千里同風、豈に是れ君子ならずや。」國師云く、「室中の物色、偏試みに指出せよ看ん。」師云く、「七九六十三。」國師云く、「無慚愧の漢、來處も也た知らず。」師云く、「謹んで老師の學人を以て、梵天に托上するを謝す。」國師云く、「今日、自領出去、明日の事、偏作麼生。」師云く、「天際日上り月下る、檻前山深ければ水寒し。」師云く、「一死再活せず。」師便ち休す。國師便ち問ふ、「五祖の演、佛眼に示して云く、「牛、窓樞を過ぐ、頭角四蹄全く出づ、尾巴甚に因つて出づるを得ざる。」偏試みに一轉語を下して看よ。」師云く、「曲心已に露はる。」國師云く、「如何なるか是れ曲心。」師云く、「天を柱へ地を柱ふ。」

- 時年二十有三なり。
- 且坐喫茶は「まあまあ、すわつて、お茶でもあがれ」と云ふこと。
- 新到は新學者と云ふに同じ。
- 君子は千里同風の古語より來る。
- 無慚愧の漢は、愧知らず奴と云ふこと。
- 自領出去は「自己の事は自己が背負ふて出で去れ」と云ふこと。

師大笑して云く、「與麼に空しく過さば、他日悔有らん。三日の後、師、下語して曰く、「抄虚聲を聴く。國師云く、「方に相似を得たり。爾れより畫參暮請、敢て退轉せず。國師時に疾に臥し、句を經たり、方丈の戸を閉ぢ、學者の參問を止む、唯だ師のみ參請を許さる。國師云く、「爾は是れ天然の衲子なり、是れ一兩生、參學の士にあらず。國師詔を承けて、京城の萬壽に住す、師之に従ひ、巾瓶に侍す。國師示すに、「翠岩眉毛在りや。雲門云く、「關」の語を以てす。師、下語して云く、「錯を將つて錯に就く。國師曰く、「是なることは則ち是なり、爾能く關の字に於て精彩を着けよ、他時、別に須らく生涯有るべし。」德治丁未、國師、相州に赴き、建長に住す。師乃ち參隨彼に至り、未だ十日を経ざるに、案上鎖子を放在するに因つて、忽然として關字を打透す。圓融無際、眞實諦當、大法現前の處に到り了る、汗流背に決る。急に方丈に趨り、下語して曰く、「幾乎ど同路。國師大いに愕いて云く、「夜來夢に雲門、吾が室に入ると見る、爾今日關字を透る、爾は是れ雲門の再來なり。師、耳を掩ふて出づ。翌日二偈を呈して云く、「一回雲關を透過したつて、南北東西活路通す、夕處朝遊賓主没し、脚頭脚底清風を起す。雲關を透過して舊路無し、青天白日是れ家山、機輪通變人到り難し、金色の頭陀手を拱して還る。」

① 祖庭事苑に、「風俗に杓を抛つて吉凶を卜す、これを杓木と謂ふ」とあり。又鬼谷子には、「手鍋水を攪き、杓を水上に置けば、自ら旋つて杓の指す所に隨ふ、以て一歳の吉凶を卜す」とあり。
 ② 衲子は禪僧と云ふに同じ。
 ③ 巾は手巾、瓶は水瓶なり、師の側に侍し、手巾、水瓶を捧げて事ふるを云ふ。
 ④ 翠岩夏末の因縁、碧岩錄八則にあり。
 ⑤ 德治は後二條天皇の年號、丁未は德治二年なり。

妙超が胸懷是の如し、若し師の意に孤負せずんば、伏して望むらくは一言を賜へ、近ごろ故都に歸らんと擬す、尊意を借むと莫くんば以て大幸と爲すのみ。國師筆を撥つて自ら其の後に書して云く、「爾既に明投暗合、吾れ爾に如かず、吾が宗爾に到つて大いに立し去らん。只だ是れ二十年長養して、人をして此の證明を知らしむ矣、妙超禪人の爲に書す。巨福山南浦紹明、延慶戊申臘月、國師滅を示す、心喪既に畢る。京に歸つて居を、洛水の東に卜す、衲子纒に六七輩、刻苦自厲す、寒飢を忘るゝに至る。一夕夢に六人の僧有り、狀羅漢の若し、第一位に居る僧の云く、「出世の時至れり、何ぞ出でざるや。師云く、「仁義は盡く貧處より斷ゆ。僧即ち領ひて竹針を以て腦後を挑破して云く、「爾が爲に貧肉を扶り出す。覺めて後、頭腦尙ほ痛む。幾ならずして雲居を去り、城北の紫野に徒居す。佛殿を立てず、唯だ法堂を樹つ。洗心子玄惠法印、儒者九人と偕に朝に奏して、禪宗を破らんと欲す。「禪宗若し奇特の事有らば、吾が儕豈に敢てせんや、諸儒、徵詰。諸方の禪將、意に當る者有ること無し。諸儒、師の名を聞いて特に來り問うて云く、「禪宗の手段如何。師云く、「虚偽を

① 機は「からくり、輪は通轉の義、故に働きを云ふ。
 ② 金色の頭陀は、摩訶迦葉を云ふ。拱は玉簪に「兩手大指相拄ふなり」とあれば、又手するなり。
 ③ 果爾に孤は負なりと。負は「そむくと」訓す。
 ④ 明投雙底の境界に至るを云ふ。
 ⑤ 延慶戊申は花園天皇即位の元年なり、臘月は十二月なり。
 ⑥ 心喪は喪期已に満ちて喪服を脱するも、尙ほ心中に喪をなすを云ふ。
 ⑦ 東山雲居庵に栖止すること殆んど十年。
 ⑧ 此の時、文保二年の冬なり。
 ⑨ 挑は撥なり、撥は「のぞく」と訓す。
 ⑩ 後醍醐天皇元應元年の春、本州赤松圓心、黄金若干を寄贈

以て眞實を示す。儒云く、「聖人虚言有りや否や。」師云く、「有り。」云く、「既に是れ聖人、甚の虚言か有らん。」師云く、「見すや、孟子に之れ有り、象已に舜を殺すと謂ひ了つて宮に入る。舜の床に在つて琴ひくを見る、舜、象の來るを見て喜ぶ、豈に是れ虚偽にあらずや。」其の間、激揚鏗鏘、問答罷んで、儒却つて師に問うて云く、「畢竟如何が此の義を決斷し去らん。」師云く、「舜却つて象を殺し了れり。」諸儒皆、稽顙して弟子の禮を執る。就中洗心子、入室參禪、造詣淺からず、崇信の至りに勝へず、第宅を施して大德方丈と作す、今の雲門庵是れなり。師、氣宇王の如し、人の近傍すること少なり。數年檀越外護爲る者あると罕なり。一旦、萩原法皇、其の風を聞いて召して入内せしむ。上、中使を遣し、師に告げて道服を披して一重の坐席を除き、談話せんと欲す。師、再三袈裟を着けて對坐せんと乞ふ、一一之を許す。帝、勅して云く、「佛法不思議、王法と對坐。」師奏して云く、「王法不思議、佛法と對坐。」上、龍顏を動す。一日、上、勅問して云く、「萬法と侶爲らざる者、是れ什麼人ぞ。」師、手中の扇子を搖して云く、「皇風永く扇ぐ。」一日、面り勅有り、云く、「朕、大德寺を以て朝廷第一の祈禱處と

し、因つて一小院を雲野に遣る、師こゝに移居す。
⑤法堂は說法堂の義、大法を闡揚し、宗旨を演說する等、一切の法式を行ふ處を云ふ。
⑥洗心子は、一人一首に云く、「玄惠は儒家にして台宗に歸す、而後遺俗、然も髮無うして身を終る、博識を以て世に問ゆ、法印の位に叙す、作る所太平記、應訓往來等今尚ほ存す、玄惠自ら洗心子と號し、又健叟と號す、軒轅を獨清と曰ふ。」
⑦徵詰は「なじり問ふ」なり。
⑧虚偽は方便なり。
⑨孟子卷の九、萬章上に出づ、象は舜の異腹の弟にして、父母と計り、舜を殺さんとす、或る時井を浚はしむ、舜之れを察し、井の中より抜け路を作る、父の瞽瞍と象とは之を知らず、上より土を拵ひ埋

爲し去らんと欲す。師、命を受けて云く、「唯唯。」後醍醐天皇即位、前の勅する所の如く禮敬彌敦く、寵恩益渥し。帝、弟子僧を召して入内せしめ、帝、問うて云く、「萬法と侶爲らざる者、是れ什麼人ぞ。」僧起つて鞠躬す。僧却つて奏して云く、「萬法と侶爲らざる者、什麼人ぞ。」上、手中の珪を以て劃一劃して云く、「這箇。」師、法語を上つて云く、「億劫相離れて相離れず、盡日相對して相對せず。不審是れ什麼物ぞ、請ふ。」綸言を聽かん。帝、御筆紙尾に書して云く、「昨夜、三更露柱、和尚に向つて道ひ了れり。」上、投機の頌を書して師に賜うて云く、「二十年來辛苦の人、春を迎へて換へず舊風烟、着衣喫飯恁麼にし去る、大地那ぞ曾て一塵有らん。」又紙尾に書して云く、「弟子个の悟處有り、何を以て朕を驗せん。」師又書して云く、「老僧、恁麼に驗す。」又御筆、古人の節角誦詁の則の語を書して師に問ふ、師謹んで紙に書し、奏對す、勝けて計ふ可からず。洞院都護に勅して師を請じて禁掖に入り、五節所に就かしむ。俄に法座を設け、師の陸座を請ふ。面前に百丈禪師の頂相を懸く、帝亦法座の右側に於て御榻を設け、天聽を側つ。月卿雲客、皆左右前後に在り、拈香祝聖罷ん

め、殺せしものと思へり。
②激揚鏗鏘は、問答の形制、鏘鏘は玉の鳴る聲。
③稽顙は、釋氏聖賢に「類は類なり、類を屈して地に至るをいふ」と。
④近傍は近かよるなり。
⑤萩原法皇は花園上皇なり。
⑥繪は曲「かままる」なり、躬は身なり、肅んで敬意を表する貌。
⑦這箇は「これ」、要は物を指示する時の語、俗に、「それ見よ」、「それだ」と云ふが如し。
⑧綸言とは天子の勅を云ふ、禮記緇衣篇に、「王言綸の如く、其の出づる聲の如し」と、是れ綸言の出處なり。
⑨三更は夜半、露柱は大黒柱。
⑩節角誦詁は「入りくんで、むづかしきこと」を云ふ。
⑪洞院は仙洞即ち花園上皇を指

で、師、法座を下る、帝亦御榻を下る。師、奏して云く、「臣僧、適來許多の鄙俚言説、功何れの處にか歸す。帝、百丈の眞を指して云く、「百丈禪師證明を爲す。師云く、「此の外、更に人の證明を作す有る無しや。」帝使ち拳頭を豎起す、師云く、「與麼ならば則ち南山北闕に朝し、夜夜明星を見る。帝、瞬目して祇揖す、師、鞠躬して出で去る、皇情大いに悦ぶ。次の日、兼金織帛等を賜ふ、兩朝特に與禪大燈高照正燈國師の號を賜ふ。賜ふ所の庄田、濃州長森、播州小宅三職方、并に浦上、總州遠山方、御厨、信州伴野、紀州高家、仍つて官府宣を下さる。正中年中、南禪席を虚しうす、詔下つて師を請すること再三す、竟に赴かず。建武の初め繪旨を下して云く、「大德禪寺は宜しく五山の一に處るべきなり。師却つて之を受けず、又、詔を下して云く、「宜しく南禪淨刹に相並ぶべし。」萩原法皇、後醍醐天皇親しく宸翰して、一流相承、他門の住を許さず、涇渭流を殊にし、言を龍華に貽すの御製有り、之を臨し之を刊して、塔額の左右に懸けらる。萩原法皇自ら御髮を剪り、小塔を造り、其の中に安じて靈光塔の左邊に置在せらる。蓋し大燈と當今來世香火の縁を結ばんが爲なり。筑州

し奉る。
① 陸座說法なり。
② 月彌雲客は公禪なり。
③ 瞬目は目禮なり。
④ 兼金は黄金、織帛は絹なり。
⑤ 正中は後醍醐天皇の年號。
⑥ 建武は後醍醐天皇の年號、此の繪旨の下りしは、元弘三年十月一日なり。
⑦ この繪旨のありしは正に元弘四年正月廿八日なり。
⑧ 蓋し按ずるに、去歲天皇京師を退いて、而も北朝舊政を用ひず、故に此の舉有りしならん。宸翰に云く、「大德寺は特に曹溪の正脈を襲ひ、専ら少林の遺風を擲ぐ、塞に斯れ叢林の規範なる者、宜しく禪苑を劫石に比し、法席を龍華に傳ふべし、一流相承、它門を住せしむる勿れ、豈に是れ人我の情を礙にするものならんや、宗派涇渭を別つの故なり。

の太宰府都督司馬少卿、帖を師に上つて、横岳山崇禪禪寺に住せんことを請ふ。闕に詣して此の事を以て奏す、帝堅く之を留む。重ねて敷奏するに師翁行道の地と云ふを以てす、帝乃ち之を允す。纔に百日の主と作つて退を告げ、大德に遷歸す。三轉語を垂れて衆に示して云く、「朝に眉を結び夕に肩を交ふ、我れ何ぞ似たる。露柱盡日往來、我れ甚に因つてか動かざる。若し箇の兩轉語を透得せば、一生參學の事、了畢せん。」建武丁丑冬一夕、首座(德禪開山徹翁和尚なり)を召して曰く、「我れ化緣已に盡く、衣法并に本寺末寺住持職事、悉く爾に付與す、克く子孫をして接續せしめて斷絶せざらしめよ。」未だ幾ならずして疾を得たり、臘月二十一日夜書す、享首座、相従ふこと久し、悟徹既に人皆之を知る、語つて焉れを授く。又遺誠を諸弟子に示して云く、「我れ行いて後、骨を丈室に置いて別に塔を造る莫れ、其れ以有るなり、夫れ汝等宜しく委悉すべし。」二十二日午の時、胡床に端坐して滅を示さんと欲す、而して久しく足の疾有り、結跏趺坐すること克はざるを患ふ。首座出で、此を以て憾と爲して語ぐ、師自ら兩手を以て左の足を右の股の上に加ふ、左の膝傷折し、血流れて衣を濡

り、嚴誠を將來に垂る、敢て違失する勿れ。建武四年八月二十六日。
① 迂は還なり。
② 建武は二年にて終る、三年改元して延元と云ふ、蓋し丁丑は延元二年なり。
③ 徹翁名は義亨、出雲の人、俗姓は頗氏、初め京都建仁寺鏡堂圓和尚に依り出家し、十九歳にして受具す、南禪寺にて大光和尚に謁し、後、雲居庵にて宗峰妙超に參じ、遂に印可を受く、晩年に德禪寺を興す。
④ 丈室は方丈の室なり。
⑤ 結跏趺坐は、坐禪の正則にして、右の足を以て、左の股の上に安じ、左の足を以て、右の股の上に安ずるなり。
⑥ 吹毛の名錘なり。
⑦ 大德禪師は陸誠にして、號は濟拙、名は正澄、支那福州の

す、今に至つて血痕尙ほ存す。乃ち辭世の偈を書して云く、「佛祖を截斷し
て、吹毛常に磨す、機輪轉する處、虚空牙を咬む。」筆を擲つて逝す。
大鑑禪師、時に南禪に住す、人有り、遺偈を傳誦す、鑑聞いて大いに驚い
て云く、「意はざりき、日本明眼の宗師有らんとは。平生會面せんと欲し
て、人皆沮んで之を止む、遺恨少からず。」茶毗に赴かんと欲すれども、
而も朝廷祈禱の事有るに縁つて能はざるなり。且く僧人を遣し、茶毗の時
を伺はしむ、至り馳せ歸つて之を告ぐ。乃ち大衆を率ゐて山門頭に出で諷
經し、侍者二人を遣し、瓣香を贈らしむ。(溫中和尙、正翁和尙の二人な
り) 瓣香今に至つて寺の什物爲り。世壽五十六、僧臘三十四、門人悉く
遺誡に遵ふ。親しく印可を受け、其の法を嗣ぐ者、妙心の 關山和尙、興
德の海岸、池寺の白翁、野州の了翁、長福の壁峰、金剛の日山、貞庵主、
可監寺、和典座、各一方に據り、學者を接引す。師、平居物と春爲り、町
畦無し。夫の陸堂して拂子を乗り、開室して竹篋を握るに迄つては、機を
以て機を攻む、張良が足を躡んで韓信を封するが如し、是れ賊、賊を知る。
孫子が竈を滅じて麈尾を敗るが若し、阿脩羅王、三有の大城に托動し、

人、我が朝の嘉暦元年六月、
國請を受けて、我が國に來り、
建長寺に住す、後、淨智、圓覺、
建仁、南禪等の諸寺に移る。
① 茶毗は梵語、譯して焚燒と云
ふ。
② 關山、名は惠玄、信濃の人、
高梨氏の子、二十一歳にして、
東傳啓和尙に建長寺に謁し
て、出家受具す。國師滅後、
花園帝の勅に依り、正法山妙
心寺を開く。
③ 阿脩羅は梵語、非天、不端正と
譯す、三面六臂にして、手に
開靜の器を執り、忿怒の形相
をなす、其の居所を修羅界、
修羅道と云ふ。
④ 三有は欲界、色界、無色界な
り。
⑤ 此れ雲門廣錄に載する遺誡中
の語句なり。
⑥ 此の遺表は廣主劉王に遺せし
もの、これ雲門廣錄にある

金翅鳥王、娑竭羅海を擊破す。談笑して臨濟を已に仆れたるに起し、叱咤
して雲門の機關を破る。極處に到つて山を穿ち石壁に透る、鼻孔血淋漓。
語録三帙有り、一帙は雪竇の着語を録す、自ら來る有り。按ずるに夫れ雲
門の遺誡に云く、「吾れ滅後、吾れを方丈の中に置き、上或は塔の額を賜
はゞ、祇だ方丈に懸け別に營作すること勿れ。」又遺表して云く、「聯りに
鳳詔を叨りにして、累りに龍庭に對す、繼いて宣を頒つことを奉る。重
疊の慶賜。師、遺誡を示すに、雲門の故事に准じ、骨を方丈に置く、塔に
靈光の額を賜ふ。兩朝の龍光優渥に沐す。足の疾患に嬰る、大應、雲
門の再誕の語、絲髪も爽はざる也。大應滅後十有九白、嘉暦元年詔を奉
じて大徳の法堂を開く、一香大應に供す。二十年長養の 記前、符節を
合せたるが若し。入滅纔に九十年、夫れ何ぞ門庭冷落、子孫寢く微なる。
所謂 強弩の末勢、魯 縞を穿つこと能はざる者か、寔に歎息するに足れ
り。

● 應永三十三年龍丙午に集る九月日、● 德禪遠孫小比丘禪興謹んで 梗槩を狀して、以て大方尊宿
名公、塔に銘するの目に備ふと云ふ。

遺表中の一節なり。
① 花園、後醍醐の兩朝。
② 本錄、最初に開堂の法語を載
す。
③ 關は將來、斯くあるべしと豫
言するを記前と云ふ、大應國
師、妙超禪人の爲に書する文
中、只だ二十年長養して人を
して此の證明を知らしむ」の
語あり。
④ 符節は割り符なり。
⑤ 強弩は強き石弓なり。
⑥ 縞は白絹なり。
⑦ 應永は稱光天皇の年號。
⑧ 德禪寺は大徳寺塔頭に在り。
⑨ 梗も槩も「おほむれ」と訓す、
なほ大略と云ふが如し。

國譯大燈國師語錄終

大燈國師語錄

龍寶開山特賜興禪大燈高照正燈國師語錄

侍者 性智編

師於嘉曆元年十二月八日開堂

拈衣云千尺不過丈六雞足不如大德何故舉衣云頂戴披之誰辨正色

陸座拈香云此一瓣香爇向爐中恭為祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲

陛下恭願

龍圖永固玉葉彌芳

次拈香云此一瓣香爇向爐中恭為祝延

太上天皇聖壽億萬歲恭願超上德於千載樹風聲於後昆

又拈香云此一瓣香奉為金紫光祿大夫黃門侍郎增崇祿算伏願松柏之壽甫申之幹柱石國家撫育生民

此一瓣香，奉爲光重法筵，諸尊官，泊滿朝文武百僚，增崇祿算，伏願安國利民，齊伊周之古術，乃忠乃孝，稱思軻之正範。

此香在雲門關裏，久爲衲僧鎖口訣，曾拾得於鎌倉縣畔巨福山頭，和氣靄然，囊藏二十年來，香風隱而彌露，今日拈出，蒸向爐中，供養前住建長禪寺，勅證圓通大應國師南浦大和尚用，酌法乳之恩。

師就座，顧視大衆云：便怎麼相見，早隔五須彌，若也待開口，三生六十劫，還有知个中事底麼？出來對衆決擇看，有麼？有麼？僧問：雪山雪寒，吾佛成道，法堂功成，和尚開堂，建法幢，立宗旨，正在此時，諸官臨筵，請師提唱，師云：國清才子貴，家富小兒嬌，僧云：直將一句無心法，仰祝萬國泰平瑞，師云：滿口道著，僧云：記得，慈明開堂，有僧問：橫錦簇花，卽不問，如何是本來面目，明云：一言已出，驢馬難追，此意如何？師云：石從空裏立，火向水中焚，進云：僧云：明明三際曉，皎皎一輪孤，明云：一輪底亦作麼生，意在那裏？師云：魚龍穴下盤根，日月輪邊氣象深，進云：僧云：泊合放過，明便喝，如何辨端的？師云：劫石易消，村話難改，進云：上來一一蒙指示，只如和尚今日開堂說法，當機覷面，如何接人？師云：眉毛厮結，準上厮挂，僧云：作家宗師，天然有在，便禮拜，師云：且緩緩，又云：更有問話者麼？又有僧問：記得龐居士辭藥山，居士指空中雪云：好雪片片，不落別處，意旨如何？師云：難提掇，處轉有則，僧云：時有全禪客，云：落在什麼處？士打一掌，又作麼生？師云：八角磨盤空裏走，僧云：全云：居士也不得，草草，士云：汝怎麼稱禪客，有人不放汝在，如何委悉？師云：咬定牙關，僧云：全云：居士作麼生，士又打一掌，意在那裏？師云：多添少減，僧云：虛

堂祖翁云：雖則是兩掌，其間有擡有搯，有收有放，如何辨別？師云：到此大行，僧云：上來已蒙慈悲，向上宗乘事，如何舉唱？師云：千峰雪白，萬壑風寒，僧云：老師果是人天大導師，便禮拜，師云：許個歸衆去。

乃云：我本無心有所希求，冰鎖瀑泉，聲細碎，今此寶藏，自然而至，風搖寒木，影擊拳，況我宗印禪者，焉海南檀越，冒穹谷攀，幽林，親擇巨材，堆山積岳，控溪水，焉海通，鯨波嶮處，獨解透路，驅白牛於露地，結軌於百里，鳩成風於大野，響斧於一城，或費郊外丁夫，或勞山中普請，樹雲間之朱堂，布五彩之椽椽，安燈王之廣座，莊三道之寶階，區區役役，今日開堂，高答君臣，徧報過現未來，大覺海中一切聖賢，生生所參見，諸善知識，衆中表鉢，道友師僧，父母一切恩門，一切含靈，爲便是自然而至，爲復是從功而成，諸人於此會得去，山僧不必解說，若也不會，曲務速說，擊拂子云：所以前釋迦不前，後彌勒不後，無邊刹境，自佗不隔於毫端，十世古今，始終不離於當念，一毛頭上現寶王刹，一彈指頃轉大法輪，雖然如是，猶是建化門中事也，向上宗乘事，又作麼生，又擊一拂子云：有意氣時添意氣，得風流處且風流，小比丘妙超，忝遇君聖臣賢，不忘靈山付囑，太平得路成，此梵刹，敷揚正法眼藏，祝延聖壽無疆，山河大地，草木叢林，情爲無情，同蒙光輝，其力拜手，妙超下情，不勝感激屏營之至。

復云：昔日世尊六年，戴雪頭上安頭，明星忽現，眼皮橫綻，從此無罅，解道大地含識，具个如來智慧德相，大衆若是大地衆生，各自有生，從且至暮，從少至老，每日起坐經行，一是一非，警喜警瞋，並是佗家活脫生涯也，何必貴如來智慧德相，後代兒孫，得被者老漢惑亂，往往安

禪靜慮，刺腦入膠盆，以悟爲望，似緣木求魚，謂之望上心不足，大須辜負世尊出世本志，且問諸人：上來既道後代兒孫被佗惑亂，今也便道大須孤負佗出世本志，是褒世尊是貶世尊？若道讚嘆，因甚有惑亂之言？若道誹謗，亦何有孤負之詞？或道褒貶隨時，未免隨語生解，更道褒貶不施，失却古佛家風，直饒道總不恁麼，明知莽莽鹵鹵去，畢竟意在那裏？所以山僧曾有一頌：明星一見雪重白，眼裏瞳人毛骨寒，大地如無知此節，釋迦老子出頭難，只知道眼裏瞳人毛骨寒，是什麼時節？若能恁麼去，日用四威儀中，壁立萬仞，孤迥迥峭巍巍，如天普覆，如地普載，如虛空含容，如日月照耀，因甚如此？今日臘月八。

舉太宗皇帝因僧朝見，帝賜坐，問云：卿甚處來？僧奏云：廬山臥雲庵。帝云：臥雲深處不朝天，因甚到者裏？僧無對。師募拈拄杖云：太宗威容嚴肅，機晤宏遠，者僧寢默俛仰，不失其禮，只如後來雪竇明覺大師代云：難逃至化，又作麼生？卓拄杖一下云：四海而今清似鏡，三邊誰敢犯封疆。

正旦，謝兩班上堂，僧問：日暖風和，萬物新相逢，便拜，又相賀，三乘五性不用問，應節一句如何？舉揚師云：分明記取，舉似諸方。僧云：記得。僧問趙州：如何是趙州？州云：東門南門西門北門，此意如何？師云：黑漆桶裏洗墨汁。進云：僧云：不問這個。州云：備問趙州，意在那裏？師云：烏龜鑽壁。進云：某甲不問趙州，又不問老師，只是有一問，請師答話。師云：莫向那僧背後問訊。進云：恁麼則大衆霑恩，學人禮謝。師云：只要實到與麼地。進云：領重重相爲。師云：領底作麼生。進云：也是不空。師云：不因今日節。

乃橫按拄杖云：寅朝乍臨正景新至，梅梢舒瑞氣，幽鳥報賀音，左右壯保愛之節，東西開納祐之門，嵩莎步入祥麟穩，海樹飛來白鳳閑，卓拄杖下座。

元宵上堂，僧問：昔日西天迦葉初傳燈，未審如何是初傳底燈？師云：夜半正明天曉不露，進云：迦葉已傳之，龍潭爲甚吹滅？師云：倒騎牛入佛殿。進云：後來有僧問香林，如何是室內一盞燈？林云：三人證龜作鼈，是答迦葉底。答龍潭底。師云：壺中天地別有日月，進云：只如道三人證龜作鼈，作麼生辨端的？師云：石人相耳語。進云：忽有人問，如何是室內一盞燈？師云：紫羅帳裏撒真珠。進云：恁麼則動地放光，放光動地，便禮拜。師云：大家自知。

乃云：燈燈無盡燈，光明千萬里，捏聚也不卽，放開也不離，一片虛凝宇宙寬，不知燃燈爲誰記，以拂子擊禪床一下，便下座。

二月上堂，僧問：春色無高下，花枝有短長，花枝短長人人知，如何是春色底？師云：山擎海浸，僧云：記得。仰山問僧：近離甚處？僧云：廬山。此意如何？師云：解笑底也少。進云：仰山云：曾遊五老峰麼？僧云：不曾遊。又作麼生？師云：邯鄲學唐步。進云：仰山云：聞黎不曾遊山，如何辨端的？師云：黃金賤不如泥土貴。進云：雲門大師云：此語皆爲慈悲之故，有落草之談，意在那裏？師云：聽教兩頭走。僧云：若不登樓望，焉知滄海深，便禮拜。

師乃云：春風浩浩，春鳥喃喃，春雲冉冉，春水漫漫，時哉時哉，時何孤負，一任諸人東看西看，忽有个漢出來，道老和尚只知其時，不知其節，今朝天寒雪下如冬，山僧向佗道：我餘一件事，引得爾一問。

佛涅槃上堂。僧問：春色依依花木芳菲，雙樹因甚一榮一枯？師云：古今與麼見。進云：恁麼則人天悉莫見。世尊所入三昧，麼？師云：泥人眼赤。進云：記得德山一日齋晚，老子托鉢自方丈下來，此意如何？師云：步步生荆棘。進云：雪峰云：鐘未鳴，鼓未響，老子托鉢向什麼處去？又作麼生？師云：相見易得好。進云：德山低頭歸方丈，如何辨端的？師云：闍室藏燈。進云：岩頭問云：大小德山未曾末後句在，還諦當否？師云：斷絃須是鸞膠續。進云：德山云：懶不肯，老僧那。意旨作麼生？師云：誰知只是有受壁心。進云：岩頭密啓其意，麼？師云：覽盡瀟湘景，和船入畫圖。進云：德山大日陞堂，果與尋常迥殊，如何理會？師云：法出姦生。進云：岩頭拈掌謂大眾云：且喜老漢會末後句，意在那裏？師云：事久多變。進云：學人今日小出大遇，便禮拜。師云：兩肩擔將歸去。

乃云：世尊臨入涅槃，以手摩胸，普告大眾云：汝等諦觀我紫磨金色身，驀堅起拄杖云：者个是大德拄杖子，阿那个是金色身？諸人一見便見，不妨一得永得，其或未然，山僧禮諸人去。百億須彌，百億日月，恒沙國土，恒沙諸佛，盡在拄杖頭上，增添金色身光，莊嚴涅槃妙相，諸人還見麼？若尚未見，卓拄杖云：年年二月花狼藉。

三月半上堂。僧問：不得春風，花不開，花開須藉春風力，不知春風有什麼力？師云：還覺腦門冷麼？僧云：馬大師與百丈行次，見野鴨子飛過，大師云：是什麼？意旨如何？師云：罕遇此門。僧云：丈云：野鴨子，大師云：什麼處去？又作麼生？師云：爭之不足。僧云：丈云：飛過去也。大師遂扭百丈鼻頭，如何識取？師云：打驢聽馬。僧云：丈作忍痛聲，大師云：何曾飛去？雙師云：嚼飯餵嬰兒。僧云：大師次日陞堂，衆纔集，百丈出卷席，意在那裏？師云：金不博金。僧云：大師便歸方丈，問百丈：我

適來上堂，未曾說法，爾爲什麼便卷卻席？如何商確？師云：樂則共樂。僧云：丈云：昨日被和尚扭得鼻孔痛，還端的也無？師云：風吹不入。僧云：大師云：爾昨日向甚處留心？此意如何？師云：遊子乍聞征袖濕。僧云：丈云：今日鼻頭又不痛，也如何理會？師云：水洒不着。僧云：大師云：爾深知今日事，是何道理？師云：貴賤賈。僧云：丈乃作禮，卻歸侍者寮，哭。意又作麼生？師云：撥簇不得。僧云：同事侍者問云：爾哭作什麼？丈云：爾去問取和尚，如何辨別？師云：那吒撲帝鐘。僧云：侍者遂去問大師。大師云：爾去問取佗看，意在什麼處？師云：從來疑著个老僧。僧云：侍者卻歸寮，問百丈：丈卻呵呵大笑，如何委悉？師云：瓦解冰消。僧云：侍者云：爾適來哭，而今爲什麼卻笑？丈云：我適來哭，如今卻笑，是什麼心行？師云：唱九作十。僧云：可謂親言出親口。師云：不如禮拜好。僧便禮拜。

師乃云：桃花紅，李花白，靈雲立沙立阡陌，相爭祖道不敢休，其勢不生，多韜略，春雨自知斷和句，濛濛洒去空蕭索，兩兩三三解歸根，四維上下難尋覓，既難尋覓，因甚得大地截起，喝一喝云：放過一著。

謝龍藏主上堂。山僧拂子說三種禪，忽豎起拂子云：此是換卻佛祖眼睛底禪，亦打一圓相云：此是指出人天性命底禪，擊禪床一下云：此是發雲雨大用底禪，雖然如是，若是自非一氣轉得一藏底人，爭能消得多少風。

佛生日上堂。僧問：世尊今日降下，未至地，九龍吐水洗金軀，早是一場敗缺，和尚要雪屈，也是泥裏洗土塊。師云：狗啣教書，進云：指天指地金蓮捧足，因甚腳下紅絲線不斷？師云：要知山上

路須問去來人。進云：韶陽老人正令方行，諸方未免將錯就錯。師云：夜行莫踏白，不水定是石。進云：不因老師點發，容易難瞻慈顏。師云：月到中峰猶未歸。進云：三十年後，此話大行。師云：馬無千里謾追風。

乃云：本不會上天，何論下天。本不會託胎，誰說出胎。所以道：淨法界身本無出沒。既然如是，因甚東家杓柄長，西家杓柄短，會得各各惡水鷄頭滂，不然齊之以禮。

結夏小參，僧問：德山小參不答話，有問話者三十棒，佗家親切處如何識得。師云：來者不來，去者不去。進云：趙州小參要答話，有問話者置將一問來，又作麼生。師云：買價破大例。進云：風從虎雲從龍，豈莫是用處一般麼。師云：且喜沒交涉。僧云：學人今夏依附和尚，未審作麼生下。手腳，師云：莫錯舉。

乃云：西天鵝護之限，聖制臘人之期，衲子慧身之時，吾家禁足之方，明月軒畔清風匝地，看雲亭邊竹影拂階。於此圓覺伽藍，聚集四聖六凡，於此平等性智，安居情與無情，只如七佛祖師三處度夏，還出得這裏也無。諸人若點檢得出，九十日內，不敢孤負虫豸。若也點檢不得，卓拄杖云：金剛眼睛十二兩。

復舉：世尊一日陞座，文殊白槌云：諦觀法王法法王法如是，世尊便下座。師拈云：大湖浸月長橋臥波，若非高吟大嚼，爭能賞此時情。雖然風流可觀，其奈得便宜處落便宜，具眼禪流，請辨繡素看。

次日上堂，僧問：衲僧箇箇氣宇如王，今朝因甚坐在區宇。師云：晝餅充飢，進云：若也論此事，如

青天白日，更向甚處剋期取證。師云：路入桃源深更深，進云：慈明問黃龍，雲門三頓棒，洞山可喫不可喫，意在那裏。師云：兩鐵蒺藜，進云：黃龍云：可喫還端的也無。師云：直饒山岳也難藏，進云：明云：終日鴉鳴鵲噪，喫幾棒，意旨作麼生。師云：一種是聲無，無意有堪聽，有不堪聽，僧便禮拜。

師乃舉五祖云：今日結夏，無可供養大眾，作一家宴管待諸人，遂舉手云：囉囉招囉囉，遙囉囉送，莫怪空疎，伏惟珍重。師云：五祖老人與麼家宴，可謂管待千足百味無缺，雖然如是，只是一時之慶快。大德今日結夏，也有箇家宴，坐者立者，俱成萬年歡，見者聞者，同唱太平歌，且道其中節拍，又作麼生，以拂子擊禪床。一下云：薰風自南來，殿閣生微涼。

謝首座書記藏主秉拂上堂，西來呈師，厚靈樹待遇，腳底如驢踏，慈明堂與法絲於其時，人焉度乎。後之視今，如今之視古，何也。智藏發光資，鞭影擊拂子下座。

謝良和典座上堂，舉金牛每日齋時，自將飯於僧堂前作舞，呵呵大笑云：菩薩子喫飯來。師云：金牛和尚務在細嚼難飢，只是衆口難調。大德今夏屋裏得有人，一衆自然不聞吾臂酸，諸人要知此人麼。卓拄杖云：發而當節言之和。

端午上堂，僧問：文殊令善財採藥，善財云：盡大地無有不是藥者，此意如何。師云：穿靴水上立。僧云：文殊云：是藥採將來，意在那裏。師云：六雙骰子一時赤。僧云：善財於地上拈一莖草，度與文殊，意旨作麼生。師云：吐舌至頂相。僧云：文殊云：此藥亦能殺人，亦能活人，如何識得。師云：貓兒打筋斗。僧云：應病與藥，是古來家風，和尚作麼生醫無病人。師云：黑蛇入漆甕。僧云：與麼則

大法緊要之處，誰敢假驢駝藥。師云：波斯不過江。

乃云：端午天中節，諸方盡咒土書壁，以消妖怪，認採藥模樣，百草頭上做伎倆。我者裏箇箇石人之機，箇箇鐵漢之用，水洒不著，風吹不入，蔘拈拄杖卓一下云：森森夏木杜鵑啼。

上堂，僧問：記得良禪客問欽山，一鏃破三關時如何。山云：放出關中主，看意旨作麼生。師云：水底弄傀儡。進云：良云：恁麼則知過必改。山云：更待何時。如何領略。師云：一字不著點。進云：良云：好箭放不著所在，便出去未審，還有出身處也無。師云：楚山入漢水。進云：山云：且來闍黎。良回首，山把住云：一鏃破三關，卽且止。試與欽山發箭，看意在那裏。師云：天不保惡。進云：良擬議。山打七棒云：且聽這漢疑三十年，誦訛在什麼處。師云：古殿坐者少。進云：學人若不逢箇節，爭敢知箇事。便禮拜。師云：實須到與麼地。

乃云：法本法來法，心心無別心。日午三更後，相喚賞樹陰。話盡甘泉之景，聯成羅舍之吟。品藻鷹鳩之變，嘉唱耳德之音。拍手笑呵呵，真諦不博金。喝一喝云：侍者與我點茶來。

半夏上堂，半夏已前事，諸人知而山僧不知。半夏已後事，山僧知而諸人不知。正當今日半夏，知則共知，不知則共不知。還會麼。良久云：三段不同，收歸上科。

上堂，僧問：世界恁麼熱，宇宙炎炎，不知向什麼處得回避。師云：清機歷掌。僧云：王常侍一日訪臨濟，同濟在僧堂前，乃問：這一堂僧，還看經麼。濟云：不看經，意在那裏。師云：石壓笋斜出。僧云：侍云：還學禪麼。濟云：不學禪，意旨作麼生。師云：崖懸花倒生。僧云：侍云：經又不看，禪又不學，畢竟作箇什麼。濟云：總教伊成佛作祖去。到者裏如何領略。師云：調達不得肯。僧云：侍云：金屑雖

貴，落眼成翳。濟云：將爲個是箇俗漢，還端的也無。師云：踈田不貯水。僧云：若恁麼不來，爭得恁麼去。師云：且看脚下。

乃云：一法若有，毘盧墮在凡夫。萬法若無，普賢失其境界。拈拄杖云：者箇是大德拄杖子，阿那箇是有無道得與，不道得，朝打三千，暮打八百，擲下拄杖下座。

七月旦上堂，僧問：暑退涼生，樹凋葉落，時節因緣，不相諱，如何是箇中事。師云：大家多生機。進云：記得僧問雲門，不起一念，還有過也無。門云：須彌山作麼生領會。師云：莫教平出。進云：有僧問虛堂老師，此意如何。虛堂云：買鐵得金，意在那裏。師云：也是可惜許。進云：今日問和尚，不起一念，還有過也無。未審如何祇對。師云：三生六十劫。進云：與麼則。昔日雲門，今日和尚，便禮拜。師云：禮拜得始得。

乃云：昨見垂楊綠，今看落葉黃。祖門擡搦事，物物不隱藏。者箇葛藤卽且致，向針筒鼻孔裏，倒道將一句來。若無人道得，聽取山僧爲個說破。

解夏小參，僧問：和尚一夏以來，爲衆勞手脚，未審成得什麼邊事。師云：崑崙嚼生鐵。進云：恁麼則誰敢辜負和尚。師云：放個保殘生。進云：記得臨濟示衆云：赤肉團上有一無位真人，常從汝等諸人面門出入，未證據者，看看意旨如何。師云：不較多。進云：時有僧出問：如何是無位真人。濟下禪床把住云：道道，又作麼生。師云：若不道，瑕爭得珠轉。進云：其僧擬議。濟托開云：無位真人是什麼乾屎橛，便歸方丈，還端的也無。師云：半開又半合，又有僧問：記得僧問雪峰，乞師指示。峰云：是什麼，如何承當。師云：劈腹剜心。進云：其僧於言下大悟，也是見什麼道理。師云：捨長

就短進云：雲門云：雪峰向伊道什麼？未審節文在甚麼處？師云：錮鑄著生鐵。進云：古德底且置，和尚直下作麼生指示？師云：速退速退，妨佗別人請問。進云：不因今日節，誰敢恁麼去？師云：更有露柱在。

乃云：法歲周圓，聖制已滿。我者裏荒涼，爽氣最容與，不論取證淺深，不分賞勞輕重，攀白雲而高捲，追秋風而長嘯，備汝東西，任情逍遙，草鞋跟寬，無不活路。若逗到崑崙山頭，佗喬尸迦忽相逢，問過葛籬一句，只將隔手底祇對，不然五門猛獸欺備在。

復舉翠巖夏末示衆云：一夏已來，與兄弟東說西話，看翠巖眉毛在麼？保福云：作賊人心虛。長慶云：生也。雲門云：關師云：諸方盡謂俱出隻手，扶豎宗風，殊不知巨鼈莫戴三山去，吾欲蓬萊頂上行。

次日上堂，僧問：今朝正是解制自恣之辰，不知何處是衲僧遊戲之場？師云：來鋒有路，進云：恁麼則十洲三島草鞋底，鴈蕩天台拄杖邊？師云：也何妨？進云：僧問雲門：初秋夏末，前程忽有人問，如何祇對？門云：大衆退後，作麼生領會？師云：因邪打正。進云：僧云：過在什麼處？門云：還我九十日飯錢來，意在那裏？師云：大慈妨小慈。進云：今日忽有人問著，作麼生祇對？師云：三句前兩句後。

乃舉臨濟道：有一人論劫在途中，不離家舍，有一人離家舍不在途中，那箇合受人天供養？師云：諸人要向者裏道取，須向那裏透過，若是人天供養，秋風吹渭水，落葉滿長安。

謝進退兩班上堂，衲僧家尋常用底，豈止乎虎視龍望，爲世所推，進一步則突出威音王已前。

退一步則樂迦羅眼裏藏身，因甚如是？擊拂子云：天際日上下，檻前山深水寒。

八月旦上堂，僧問：槿花凝露，梧葉鳴秋，此中現成事，如何提唱？師云：答猶未了。進云：幾人得與麼去？師云：只許阿彌一箇。進云：肅宗皇帝問忠國師：如何是十身調御？國師云：檀越蹈毘盧頂上行，意在那裏？師云：不妨脚下紅絲線不斷。進云：帝云：寡人不會。國師云：莫認自己清淨法身，又作麼生？師云：主山騎案山。進云：忽有人問：如何是十身調御？未審和尚如何祇對？師云：背短臂長。進云：恁麼則西風一陣來，落葉兩三片。師云：三十年後。

乃云：秋雲弄秋風，秋色蘸秋水，氣清如時清，道泰似情泰，禪者之雅興，道人之嘉景，頭頭上顯露，物物上現成。卓拄杖云：是則是三十年後，有人加勸沮去。

中秋上堂，僧問：靈山話月，曹溪指月，到者裏如何辨端的？師云：三山帽大袖衫。僧云：馬大師說月次，問西堂百丈南泉云：正當與麼時，如何？西堂云：正好供養，意旨作麼生？師云：波斯讀尙書。僧云：百丈云：正好修行，又作麼生？師云：拂地添銅瓶。僧云：南泉拂袖便行，意在那裏？師云：起席不謝坐。僧云：大師云：經歸藏，禪歸海，只有普願獨超物外，如何委悉？師云：神箭三匝白猿號。僧云：古人誦訛處，和尚已呈露，和尚誦訛處，未審何人點檢？師云：天高蓋不盡。僧云：不因恁麼問，爭識恁麼事？師云：更須買草鞋。僧云：深沈滄海恩波濶，皎潔秋空氣象高。師云：如道著須用著。乃云：秋中秋，月中月，四萬二千清光，五十由旬靈闕，明明明明，皎潔又皎潔，指與話俱納，敗缺納，敗缺還照，絕無物堪比倫。教我如何說。

上堂，僧問：雲門因僧問：如何是法說？門云：大衆久立，速禮三拜，意旨作麼生？師云：還我話頭來。

進云，如何是隨意說？門云，晨時有粥，齋時有飯，又作麼生？師云，一任亂咬。進云，如何是隨宜說？門云，三德六味，施佛及僧，如何理會？師云，葷園裏賣葱草。進云，如何是方便說？門云，是汝鼻孔重三斤半，意在那裏？師云，露柱退後。進云，如何是大悲說？門云，歸依佛法僧，如何辨端的？師云，放個三十棒。進云，雲門一答話，畢竟明得箇什麼邊事？師云，南地竹，北地木。進云，不因夜來鴈，爭見海門秋，便禮拜。師云，莫錯舉。

乃云，功高二儀而不仁，明踰日月而彌昏，肇公只知從事中得，不知從事上得，且道從事上得底作麼生？良久云，殘葉賦題紅片片，遠山供望碧層層。

重陽上堂，僧問，九九佳節謂之重陽，只向者裏領去，是第幾機？師云，什麼處收拾得？進云，與麼則逢人，須說三分話，未可全拋一片心。師云，六脚蜘蛛上飯床。進云，豈不是老和尚出人妙手？師云，偏因什麼得到與麼地？進云，東西南北歸去來。師云，糊糲摘仙菓。

乃云，只愛菊花發紫葉，不喜聞彭祖之術，只愛秋露凝赤萸，不憂忘稚川之說，不憂不喜善哉，箇重九節，擊拂子下座。

上堂，雲門云，許多大栗子，喫却幾箇，有人喫得三箇，韶陽吐却五箇，有人喫得五箇，韶陽吐却十箇，者箇些子，緇素辨得出，山僧分半院與爾。

閏月旦上堂，拈拄杖云，一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法，皆從此經出。卓拄杖一下云，看看大德拄杖子，爲爾諸人，此經科分細大義理，一一指注，而見諸人，猶不知不了，高聲唱云，四時禁土節，三年有一閏，又卓一下。

上堂，黃葉滿地，塞鴈橫空，彼此出家，彼此行脚，佛手遮不得，人心似海，更擬問如何，當頭霜夜月，任運落前溪。

開爐上堂，僧問，辭柯黃葉已成堆，整頓圍爐就地開，時節一句如何體會？師云，莫教擁山鞍。進云，有人剎那去，亦如何？師云，前言不副後語。進云，趙州示衆云，三十年前，南方火爐頭有箇無賓主話，直至而今，無人舉著，意在那裏？師云，三箇柴頭品字燒。進云，未審有甚麼難舉著麼？師云，近之嫌却面門，進云，學人進前退後，自由自在，是舉著不舉著？師云，且過者邊著。進云，便是兩彩一賽底。師云，大有人點頭。進云，不入虎穴，爭得虎子，便禮拜。師云，相識滿天下。

乃云，法昌十六高人，怕寒懶剃鬚髮，趙州無賓主話，爰煖頰添掃榻柴，大德門下終不向針頭削鐵，何也？今日十月一，開爐免帽子。

謝監收維那上堂，齊之則泥土舒天顏，約之則水滴難以通，恁麼並務，致令各各投其方圓之器，安其上下之居，是謂之紀綱清嚴，收放有則，及乎究其端由，豈止還丹一粒，點鐵成金。

上堂，卓拄杖云，拄杖子，若不相當，是什麼物，得不相當，便下座。

冬至小參，僧問，一氣潛通，萬彙發生，不涉時節，願聽提唱。師云，鼻孔占却三畝之地。進云，瀉山問仰山，仲冬嚴寒，年年事，晷運推移，事若何？仰山近前叉手而立，意旨如何？師云，一字入公門，九牛車不出。進云，瀉云，誠知子答者話，不得，又作麼生？師云，見人富貴，常歡喜。進云，時香嚴至，瀉山舉前話。嚴云，某甲偏答得者話，瀉復問，嚴亦近前叉手而立，如何領略？師云，借婆裙子拜婆年。進云，瀉云，賴遇寂子，不會，畢竟如何？師云，鷄鳴不著時，隣人半夜行。進云，今日有人問仲

冬嚴寒年年事，暑運推移事若何，未審和尚如何祇對。師云：夜聞祭鬼鼓，朝聽樂神歌。進云：與麼則來日一陽生，便禮拜。師云：一任記取。

乃云：陰魔消盡，陽氣發時，無硬地，律管先知，壠頭梅綻，不萌枝，直得皓老布襪，麻線易通，鏡清臥單，緝掛難開，縱饒迄于道，所以陰陽不測者，空洞無象，所以造化不宰者，潛微幽隱也。未是出書雲令節，是故山僧只望，以五日爲一候，以半月爲一氣之流，漏泄箇仲冬嚴寒事，物物對偶機，其或似阿房曳衣底，東山水上行。

復舉慈明冬至榜，師拈云：東弗干代日下東，西瞿耶尼月氏西，解笑者多，解晒者少，若也今晚放參，一冬二冬，又手當胸。

因雪謝寺齋乘拂，上堂，演出普賢信口偈，擊來香積無盡飯，要知兩彩一賽處，麼卓拄杖一下云：吽吽，有什麼餽餽餽子，快下將來。

謝兩班上堂，諸佛放光明，助發實相義，釋迦老子非，但當年之益，且要使吾沙門於五濁惡世中，鬪諍堅固時，拋卻人我擔子，除卻高下情，謂互作主伴，箇實相無相，微妙解脫法門，久住於世間，全體劫利濟實相義，且致如何是諸佛放光明，良久云：東山拍手西山舞。

因雪上堂，危木風寒，空山雪白，龐蘊枝頭藏身，象骨巒塢氣索，往往佗人住處，我不住，佗人行處，我不行，不是與人難共聚，大都縑素要分明，喝一喝。

臘八上堂，僧問：釋迦老子半夜逾城，雪山六年一麻一麥，是什麼心行。師云：針鋒頭上翻筋斗。僧云：正當明星現時，忽然悟去，還端的也無。師云：似地擎山，不知山之孤峻。僧云：只如一人發

真歸源，大地衆生在什麼處。師云：金剛腦後三斤鐵。僧云：釋迦老子顛言倒語云：奇哉一切衆生，悉具如來智慧德相，既是無風起浪，如何得太平去。師云：寒雨洒空，寒風匝地。僧云：學人今日小出大遇，便禮拜。師云：撒手那邊去。

乃云：半夜逾城直上雪山，既是道士擔漏卮，更說於明星現處，忽然悟去，大似捏目見空花，大德未嘗不解，烏頭養雀兒，卓拄杖云：南斗七，北斗八。

歲旦雪下上堂，除夜大風吹，昨夜舊年風，今朝新歲雪，雪帶舊年寒，風和新歲節，阿呵呵我家好驅儼，向後絕災禍，絕災禍，東西南北皆可，龍寶從茲爐竈大。

上堂，意到句不到，一三三四五六七，句到意不到，七六五四三二一，忽然意句俱到時，又作麼生，良久云：花開不假栽培力，自有春風管待伊。

三月旦上堂，煙霞影裏，春風聲中，山桃紅綻，岸柳翠濃，無限幽情，叵遮掩，莫教舞蝶一驚。三月半上堂，僧問：祖令當行，十方坐斷，則不問，只於春風拂拂時節，願聞親切一句。師云：處處綠楊堪繫馬。進云：長沙一日遊山歸，門首首座問云：和尚什麼處去來。沙云：遊山來，意旨如何。師云：家家門路透長安。進云：首座云：到什麼處來。沙云：始隨芳草去，又逐落花回，如何領略。師云：落霞與孤鶩齊飛，首座云：大似春意。沙云：也勝秋露滴芙蓉，端的在那裏。師云：春水共長天一色。進云：雪竇著語云：謝答話，如何委悉。師云：一畝之地三蛇九鼠。進云：古人恁麼醉唱，如聽如電，只恐通變未全，和尚今日莫別有提唱麼。師云：崑崙嚼生鐵。進云：不因楊得意，爭識馬相如。便禮拜。師云：咳。

乃舉僧問風穴語默涉離微如何通不犯穴云常憶江南三月裏鷓鴣啼處百花香諸人要見風穴麼只識取常憶兩字其如未然離微體淨品

四月旦上堂僧問鵲噪柳絲亂龜遊荷蓋傾此中現成事未審如何提唱師云青青不入時人意僧云馮山示衆云有句無句如藤倚樹意旨作麼生師云八十翁翁牙根堅僧云疎山云忽遭樹倒藤枯句歸何處又作麼生師云見之不取思之千里僧云馮山放下泥盤呵呵大笑意在那裏師云黃連未是苦僧云獨眼龍云教馮山笑轉新如何委悉師云屋裏講揚州僧云疎山言下知歸乃云馮山笑中元來有刀還端的也無師云誰知席帽下元是昔愁人僧云上來一一蒙指示向上宗乘又如何師云拄杖頭上挑日月僧云不行尊貴路爭踏頭關便禮拜師云好看腳下

乃拈拄杖卓一下云有人似者箇觸處築著磕著有人不似者箇隨物七穿八穴且道誦說在甚處良久云滿地落花春已過綠陰空鎖舊莓苔又卓一下

佛誕生上堂僧問世尊初降生指天指地周行七步云天上天下唯我獨尊意旨如何師云日出乾坤輝僧云雲門云我當初若見一棒打殺與狗子喫貴圖天下太平端的在那裏師云知恩方解報恩僧云雪竇云我當初若見便與掀倒禪床又作麼生師云鬼爭漆桶僧云只如今朝諸方出手灌沐金軀與二大老用處是同是別師云千年田八百主僧云千峰勢到岳邊止萬派聲歸海上消便禮拜師云也何妨

乃云將三界二十八天作箇佛頭將金輪水際作箇佛腳將四大州作箇佛身將一切情與無

情作箇佛脾胃肝膽如是則諸人盡在箇佛肚裏起坐經行若也在肚裏爭能灌沐淨智莊嚴功德身若道灌沐無妨向甚處安身立命擊拂子下座

結夏小參僧問烏兔如馳聖制已臨正當恁麼時請師提唱師云好只與麼去僧云如何是圓覺伽藍師云逼塞虛空僧云如何是平等性智師云月白風清僧云畢竟如何安居師云直饒恁麼也未真僧云者箇則且置和尚莫別有結制底一句麼師云前三三後三三僧云可謂石長無根樹山藏不動雲便禮拜師云道得始得

乃云古來有一段事常時明明如日向之隔千里背之在目前得而難收迤而難親所以西天於三月九旬中聚集四聖六凡以大圓覺爲我伽藍身心安居平等性智寶山今夏也隨例結箇聖制不見粥飯精麤不分茶湯清醲隨根機忍耐任肚皮大小整頓手腳護惜黑柱只是許堆堆地不許成就慧身何故卓拄杖云鼻孔元來掛上唇

復舉古德道若是全舉揚宗乘備等諸人向甚處領會所以古今獨露隱顯無方師拈云古德大似王母獻七枚神桃乘彩雲之發和明月而去也

次日上堂僧問一峰雲片片雙澗水潺潺莫是二千年前消息麼師云認著卻不是進云古者道護生須是殺殺盡始安居會得箇中意鐵船水上浮意旨如何師云能有幾箇進云如何是護生須是殺師云何必恁麼進云如何是殺盡始安居師云一向無孔鐵鎚進云如何是箇中意師云豈獨孤負進云鐵船水上浮又作麼生師云下載清風付與誰進云只如朝行西天暮歸東土還有禁足底道理也無師云路途雖好不如在家進云恁麼則十洲三島鶴乾坤四海

五湖龍世界，師云：分身兩處看。

乃云：經行及坐臥，常在於其中，既而如是，今朝因甚，別立規矩，禁足護生，還會麼？良久云：以，大圓覺爲我伽藍，身心安居平等性智。

謝首座書記藏主秉拂上堂，拈拄杖卓一下云：風穴云：若立一塵家國興盛，野老頓覺雪竇頌云：野老從教不展眉，且圖家國立雄基，山僧要與拂子知其人，不如雲門兒孫有三句體調，又卓拄杖下座。

五月旦雨下上堂，霏霏梅雨洒危層，五月山房冷似冰，雪竇老老大大，向諸人面前翻筋斗，若人見得拖泥帶水。

端午上堂，僧問：和尚從來應箇節，箇時作麼生與人看？師云：不肯爲爾，進云：既能恁麼會去，一生參學事了畢也，無師云：合取執轡著，進云：記得文殊令善財採藥，善財云：盡大地無有不是藥者，此意如何？師云：相去多少？進云：文殊云：是藥採將來，善財拈一莖草度與文殊，意在那裏？師云：少一時不生，剩一時不死，進云：大家鐵圍圍，無有一箇病，未審文殊爲誰要藥？師云：專爲七佛，進云：善財因甚將錯就錯？師云：家無小使不成君子，進云：和尚與麼答話，爲是與文殊善財雪屈，爲復是古今一路行？師云：岸谷無風徒勞展掌，進云：若不因今日節，爭知作家體裁，便禮拜，師云：吽。

乃云：今朝是五月五，不用桃符白澤，只諷誦佛祖至靈大神咒，消滅一切障難，成熟一切吉事，且道：那箇神咒，振威喝一喝。

上堂，僧問：今朝爲法大衆雲集，未審和尚說箇什麼法？師云：家家觀世音，進云：正與麼時，學人如何得領略去？師云：拈起箴箕別處春，進云：記得僧問趙州，狗子還有佛性也？無州云：無，此意如何？師云：穿過獨體裏，進云：一切蠢動合靈皆有佛性，爲甚狗子還無佛性？州云：爲佗有業識性故，作麼生辨端的？師云：藏身露影，進云：上來分明蒙指示，今日有問，狗子還有佛性也？無，和尚如何祇對師云：去，非爾境界，進云：恁麼則昔日趙州，今日和尚，便禮拜師云：能知始得。

乃云：久雨已晴，處處曬眼皮草，曬眼皮草，且致明見天日，一句試道來看，若無人道得，山僧今日失利，擊拂子下座。

半夏上堂，僧問：結制已過半，九夏炎炎日，木人汗不輟，如何生清涼？師云：脫却鴟臬布衫，進云：與麼則六月賣松風，人間恐無價，師云：箇箇秘在形山，進云：記得龐居士參問江西馬祖云：不與萬法爲侶者，是什麼人，意旨作麼生？師云：咽喉出氣得也未？進云：祖云：待汝一口吸盡西江水，卽向汝道，意在那裏？師云：騎聲入耳，進云：居士於言下頓領旨，還端的也無？師云：早知落第二機，進云：可謂親言出親口，師云：且退且退。

乃云：約日月，知晝夜，約晝夜，知時節，箇箇常情也，只如天地未剖，文彩未彰，已前還喚今日作半夏，卽是不作半夏，卽是卓拄杖云：六月不熱，五穀不結。

上堂，僧問：南山起雲，北山下雨，此中親切處，願聽舉揚，師云：千里萬里轉霧霏，進云：恁麼則把斷要津去也？師云：打水魚頭痛，進云：仰山謂香嚴云：如來禪許師兄會，祖師禪未夢見在，未審意在那裏？師云：蠅何見血，進云：如何是如來禪？師云：靜處娑婆詞，進云：如何是祖師禪？師云：鐵

輪碎石進云。如來禪與祖師禪相去多少。師云。湘之南潭之北。進云。者箇則且置。作麼生是和尙禪。師云。大坐須彌頂上。進云。不因樵子徑。爭到葛洪家。便禮拜。師便喝。

乃橫拄杖云。若從者裏便去。山河大地齊稽顙。卓拄杖一下云。若從者裏便去。森羅萬象盡放光。又畫一畫云。從者裏去底。亦作麼生。請各各歸寮舍。自摸索看。

七月旦上堂。僧問。落梧一葉。天下報秋。箇中端的。若爲相酬。師云。釋迦彌勒。退後三千。進云。今日方知。眉毛橫。眼上。口稜在。鼻下。師云。認驢鞍橋。作阿爺下領。進云。記得雲門上堂云。一言纔舉。千差同轍。該括微塵。猶是化門之說。若是衲僧合作麼生。意在那裏。師云。擔水河頭賣。進云。若將祖意佛意。這裏商量。曹溪一路。平沉。還有人道得麼。道得底出來。意旨作麼生。師云。河裏失錢。河裏撿。進云。時有僧問。如何是超越祖之談。門云。餠餅。如何辨端的。師云。胡纏繫露柱。進云。僧云。這箇有什麼交涉。門云。酌然有什麼交涉。此意如何。師云。和賊納款。進云。古人底且置。不容祖意佛意。乞師指出曹溪一路。師云。壁立萬仞。進云。既放下佛祖。猶是爭奈。用六祖。何師云。且去。圓前語。進云。不因天目近。爭識斗牛寒。師云。噫。

乃云。暑氣未去。嫩涼初生。秋意未深。白雲清淡。德山臨際。爲甚平地喫咬。會麼。良久云。蘇武持漢節而歸。

解夏小參。僧問。聖制已圓。秋風滿面。正與麼時。如何履踐。師云。何不別問。僧云。怎麼則有意氣。時添意氣。不風流。處也風流。師云。南海波斯鼻孔。僧云。記得三聖問。雪峰透網金鱗。以何爲食。意旨如何。師云。到卽不點。僧云。峰云。待汝出網來。向汝道。又作麼生。師云。點卽不到。僧云。聖

云。一千五百人善知識。話頭也不識。意在那裏。師云。無限村僧。模之爲。則僧云。峰云。老僧住持事繁。如何委悉。師云。鳩羽落水。魚皆死。僧云。若有人問。透網金鱗。以何爲食。未審和尙作麼生。祇對師云。呂望權任公情。僧云。怎麼則學人。今日小出大遇。便禮拜。師云。誣人卽得。

乃云。四月十五。一衆無端。投入牛角。東西不辨。南北不分。七月十五。諸人快活。解開布袋。脚頭脚底。通霄有路。萬里無寸草。抖擻多年。穿破衲。出門便是草。襤褸一半。逐雲飛。有佛處不得住。舜無卓錫地。無佛處急走過。禹無十戶聚。直得把住。放行。觸處現前。撥擗褒貶。隨物作主。正與麼時。龍寶別有賞勞。在擊拂子云。西風一陣來。落葉兩三片。

復舉五祖演和尙云。牛過窓樞。頭角四蹄全出。尾巴爲甚出不得。師拈云。五祖老子。只見其出底。不見其不出底。何故。何官無私。何水無魚。

次日上堂。僧問。三月安居。羚羊掛角。九夏自恣。猛虎出林。正與麼時。如何得不欺去。師云。付與甚人。僧云。洞山云。兄弟初秋。夏末。直須向萬里無寸草處去。意旨作麼生。師云。餓狗嚼枯骨。僧云。石霜云。何不道出門便是草。又作麼生。師云。把髻投衙。僧云。洞山聞云。大唐國裏能有幾人。意在那裏。師云。也須遭人點檢。僧云。古德垂示。且置。和尙如何教人去。師云。下坡不走。快便難逢。僧云。青山綠水草鞋底。明月清風拄杖頭。師云。錯。

乃云。會則途中受用。移身不移步。不會則世諦流布。移步不移身。即便怎麼去。未到山僧行履處。何也。雨來層翠。消殘暑。風過林頭。滿院涼。

謝兩班侍者上堂。登山須倚杖。渡海須上船。若要扶登法門。必須得有班序之機。溫柔一手攬。

剛硬兩拳搦始得，既得其人後，亦作麼生，良久云：獻佛不在香多。

上堂，橫拄杖云：山僧昨夜三更入，睡三昧者箇拄杖子。趁前言曰：某甲會些子禪，要且來日初一，說一句子布施諸人去，伏望和尚慈悲，莫奪此願，以為幸。山僧云：也何妨，爾作麼生說。拄杖子云：八月一日天中節，赤口白舌隨時滅。山僧云：阿彌實好知言，只以此一句子，食輪法輪並轉，佛道祖道共昌，佗便禮拜去。諸人且道，喚作山僧說，即是喚作拄杖子說，即是。若作拄杖子說，山僧今朝說，若作山僧說，拄杖子昨夜說，若能定當，雲歸碧洞，露滴蘭橈，其如未然，卓拄杖一下。

中秋上堂，尋常驚恠禪和家，及乎到中秋節，下浮雲於陰晴，強貪觀天上月，問著其中吟眸句，十箇有五雙，便道月皎夜星稀，是惟才陸龍寶堂，也未得入龍寶室，何故滿船明月一竿竹，家在五湖歸去來。

上堂，去聖時遙，人多懈怠，逆則生瞋，順則生愛，且道，作麼生是無懈怠，無瞋愛處，嶺上白雲巖前綠水。

重九上堂，一句新一句新，汾陽一句又重新，靖節相逢不相識，重陽九日菊花新。

開爐上堂，僧問：法昌今日開爐，行脚僧無一箇，聚泥像而說法，山川改觀，還莫恠力亂神麼。師云：一點水墨兩處作龍，進云：丹霞燒木佛，有什麼憑據。師云：趙州東院西，進云：龍寶今朝開爐，不聚泥像，不燒木佛，行脚僧有幾箇。師云：普天普地，進云：轉凡夫為賢聖，抑賢聖為凡夫，則不無和尚，離者二途，請師端的。師云：將知不圓，前話進云：馮山向火，次問：仰山終日向火，因甚無。

暖氣，仰作向火勢，馮云：子只得物體，能所未在，意旨作麼生。師云：要家醜揚外，進云：仰云：某甲只如此，和尚作麼生。馮亦作向火勢，仰云：和尚只得物體，能所未在，馮云：如是如是，如何甄別去也。師云：錯墮此機，進云：舉世盡言父子唱和，兩口無一舌。師云：龍象蹴踏非驢所堪，進云：若有人問終日向火，因甚無暖氣，和尚對佗作麼生道。師云：炙手助熱，進云：和尚與古人莫止一般也。無師云：大海若知足，百川應倒流，進云：與麼則三冬古木花，九夏寒當雪。師云：生薑終不改辣，進云：寬火和煙得擔泉，帶月歸，便禮拜。師云：叱。

乃云：人人有箇火種，只是深埋冷灰，用之不得，今朝風頭稍硬，且為諸人撥起，以拄杖畫一畫云：會與不會，各各歸煖處商量。

上堂，昨日有人，面前打筋斗，今日有人，背後作問訊，似親非親，似疎非疎，爾等諸人作麼生辨別。

冬至小參，僧問：觀面相見不在多端，龍蛇易辨，衲子難瞞，如何是衲子端的眼。師云：禾山鼓，雪峰毬，進云：機輪轉處作者猶迷。師云：切忌上頭上面，進云：記得慈明今日出，勝書三圓九卦云：若人會得，不離四威儀中，意在那裏。師云：頂上無骨，領下有鬚，進云：首座一見云：和尚今晚放參，又作麼生。師云：阿誰知此節，進云：千峰勢到嶽邊止，萬派聲歸海上消，便禮拜。師云：好領取著。

乃云：徧界不曾藏，處方是時人難躡避，時節恰似半夜放烏鷄，左之右之，向甚處辨明，直得陰去陽來，雪寒水冷，吾家大用觸處繁興，豈敢逐洞山圖熱鬧，底之狂解，雖然如是，諸人且道，貴。

其耳孰與貴其眼卓拄杖一下。

次日上堂否極泰來坎去離到底事彼彼一齊用得最妙只有無陰陽之地少人踏著忽然踏著不妨和雪踏泥。

謝秉拂上堂了臨濟賓主句子續香嚴瀑布重吟看來他是曠蕩也有巴鼻也有來由且一代藏教之中還有者箇時節麼卓拄杖云我現寶塔當爲證明。

上堂僧問學人見山不言山見水不言水時如何師云三步可易五步應難進云和尚只恁麼何異諸方師云頑石瓦礫聞之必汗進云一句不進兩句不退有誰等閑籠罩我來師云汨梁下尾生奚言抱道士進云若不是遇老師幾乎賺過一生便禮拜師云直饒實與麼放過卽不可。

乃云一滴水一滴凍曹溪路上少相逢寒山拍掌拾得笑南山燒炭北山紅擊拂子下座。

佛成道上堂僧問菩薩今夜成道號之名如來只如見明星未審明什麼邊事師云青寥寥白的的進云莫是佗一翳在眼空花亂墜麼師云娘生幾箇舌頭進云學人若向此去和尚還許也無師云山僧不如拄杖進云因甚肯昔日不肯今日師云只爲兩頭走進云若無此語爭辨老子端的師云我被爾辨倒進云心不負人面無慙色便禮拜師云古今惟多。

乃云澄月映徹衆星燦朗箇中無釋迦阿誰當成道卓拄杖云屎上更加尖。
上堂臘雪連天白寒風逼戶寒失却口不問爾拈得鼻孔來看如無人拈得擊拂子云忽然撞著來時路始覺從前被眼瞞。

除夜小參僧問舊年送不去新歲迎不來新舊本無情去來豈可擬師云我且愛爾向下閤頭上行進云記得僧問香林萬頃荒田是誰爲主林云看看臘月盡意旨作麼生師云鐵券難分付進云來日定是大年朝有何祥瑞師云家家爆竹處處燒錢。

乃云日日東出日日西入一出入自循環逗到臘月三十日村裏打祭鬼鼓山塢唱樂神歌人人帶淳素之風箇箇稱太平之時況禿僧家半夜見日頭阿誰辨新舊只管大坐當軒眼眼相照分歲雖然荒涼不烹鳳髓其中清味勝佗金樹何故擊拂子云雪寒北嶺梅香南枝復舉雪竇拈拄杖云頭上是天脚下是地眼前綠水背靠青山禿僧道我會也忽騎驢入爾鼻孔裏牽牛入爾眼睛中又作麼生商量師云當年若有人出衆喚老和尚待雪竇才擡頭道更詣函丈便歸衆去直饒以方投規自然函蓋相應。

正旦上堂僧問元正啓祚萬物咸新好箇時節願聞法要師云相逢共賀萬年慶進云喚作新年頭事耶亦是自己消息師云一有多種二無兩般進云與麼則大德播四海龍寶滿一天便禮拜師云闔國咸知。

乃云日暖風和鳥啼花笑大機與大用繁興於家家何也卓拄杖云月建首寅斗柄指戌元宵雪下上堂拈拄杖卓一下云一燈百千燈明暗雙雙底時節又卓一下云百千燈一燈夜深共看千巖雪所以道有時前照後用有時後用前照有時照用同時有時照用不同時又卓一下云且道是照是用各各自辨別。

上堂龍寶無伎倆只是不喪目前機忽得冰消雪霽自然見梅腮柳面奇喚之以作禪道佛法。

處處春山應聽子規參。

佛涅槃上堂，僧問：世尊云：我若謂滅度，非我弟子；我若謂不滅度，亦非弟子。畢竟如何？頌略去也。師云：醉後郎當愁殺人。僧云：與麼則莫今日即有，明日即無麼？師云：知恩者少，負恩者多。僧提起坐具云：學人只喚者箇作世尊，和尚喚者箇爲是有爲，復是無？師云：狗啣敝書。乃云：釋迦老子於奇花茂葉之中，藏得唯一堅密身，名之爲涅槃。真常樂，若人向一榮一枯處相見，何如？波旬舞袖長，雖然迦葉，豈不是偷羅國人乎？

佛誕生上堂，毗嵐園中無憂樹下，金蓮生地，丘墟平坦，因甚？天台山高華頂峰低，會得我今灌沐諸如來，不會淨智莊嚴功德聚，擊拂子下座。

結夏小參，二千年前，靈山百萬大衆，見地只爲解打野樵。世尊拈出一箇膠盆子，箇箇刺腦打入，澄滷身心，成熟慧身，謂之禁足護生。剋期取證，二千年後，中華扶桑，類例攀來，彌繁彌昌。而觀時之所卜，嫌杓頭窄，擇炊巾廣，自古自今，遐邇自別。龍寶英傑之徒，九夏道聚之義，恰雖似勺水象龍，自是有一件透不過事，不同小小，纔進前退後，墮坑落壑，且道是那一件事，卓拄杖一下。

復舉洞山因僧問：寒暑到來，如何回避？山云：何不向無寒暑處去？僧云：如何是無寒暑處？山云：寒時寒，殺閻梨，熱時熱，殺閻梨。師云：洞山老漢小慈悲，妨大慈。若是德山臨濟門下，終不可認驢鞍橋作阿爺下頷。

次日上堂，僧問：猿抱子歸青嶂後，鳥啣花落碧巖前，伊有結制安居底道理也無？師云：豈不見

道以大圓覺爲我伽藍。進云：恁麼則頭頭是圓覺伽藍，物物即平等性智？師云：直饒與麼去，作蛤蟆之子。進云：記得雲門垂語云：十五日已前不問爾，十五日已後道將一句來，意旨作麼生？師云：半幅全封。進云：正當十五日，請師垂指示。師云：月白風清。進云：只如道：日日是好日，莫有坐斷千差底麼？師云：韶陽得爾不墮風規。進云：此是古人爲人處，不涉古今，如何商量？師云：八十翁翁拄杖行，進云：千峰勢到嶽邊止，萬派聲歸海上消，便禮拜。師云：親會始得。

乃云：龍寶有百味珍羞，尋常不敢拈出之，今日方是結制，須布施諸人去，以之爲休糧方，以願九旬空疎，喝一喝云：切忌崑崙吞。

謝秉拂夏齋上堂，天有三光，其明高遠，以被群機；地有五味，其德廣大，以保萬有。諸人要知其功所歸麼？良久云：禾山打鼓，雪峰帳毬。

上堂，僧問：目前無法，門外車馬鬧浩浩，意在目前，屋頭松竹冷青青。師云：時節難逢。進云：記得雲門示衆云：拄杖子化爲龍，吞却乾坤了也。山河大地，何處得來，意在那裏？師云：莫教皴皴鱗鱗。進云：已吞却乾坤了也。拄杖子爲甚落在和尚手裏？師云：物歸有主。進云：昔日雲門與今日和尚相去多少？師云：出頭天外看，誰是我般人。進云：始知一條拄杖，兩人扶。師云：誣人之罪。乃拈拄杖卓一下云：恁麼恁麼，如空裏打槓，又卓一下云：不恁麼不恁麼，似水中捉月，要兩處收功。天晴日頭出，又卓一下。

重午上堂，僧問：文殊令善財採藥，財云：盡大地無不是藥者，此意如何？師云：崑崙嚼生鐵。僧云：善財拈一莖草，度與文殊，殊云：此藥亦能殺人，亦能活人，拈驗在那裏？師云：黃蘗樹上生木蜜。

僧云：學人通身是病，作麼生醫？師云：病得須愈。僧云：直饒與麼猶墮，在圓覺四病，作麼生得獨脫無依去？師云：早知，偏不能病得。僧云：快哉！快哉！今朝天中節，時清道泰，門安戶靜。師云：許偏一句相當去。

乃云：今日端午節，諸人直須明得明德，消殞天行百怪，除却佛病祖病，蓋只是所以妖不勝德，且道，如何是明德？擊拂子云：歸依佛法僧。

半夏上堂，僧問：九旬已過半，雲山翠色深，現成公案，無處回避，此景此時，願聞法要。師云：放偏三十棒。進云：古人有一則因緣，許學人咨參也。無師云：佛不奪衆生願。進云：臨濟因半夏上黃檗，見和尚看經。濟云：我將謂是箇人，元來是措黑豆老和尚。意旨作麼生？師云：水上推葫蘆子。進云：濟住數日，乃辭去。檗云：汝破夏來，不終夏去，未審如何辨端的？師云：殷勤送別瀟湘岸。進云：濟云：某甲暫來禮拜，和尚。檗遂打迦令去，是什麼心行？師云：令不虛行。進云：濟行數里，疑此事，却回終夏，意在那裏？師云：古今能有幾人。進云：一人在途中，不離家舍；一人在家舍，不離途中，是甚麼道理？師云：鐵牛擊出黃金角。進云：與麼則達磨不來東土，二祖不行西天。師云：能知者須能用。

乃云：結制已過半，水牯牛鼻孔數寸長，諸人只與麼去，便知二六時中，了不走作，儻或離跋摸臂，無桁楊可用。參。

上堂，僧問：六月十五，天下毒熱，一機一境，盡落今時，不涉唇吻，如何通津？師云：退後退後。進云：浮瓜沉李，積雪爲山，見成公案，迥絕多端，豈不是清涼世界？師云：心不負人，面無慙色，速道速

道。進云：黃龍有三關語，還許咨參也。無師云：劈開華嶽連天色。進云：我手何似佛手，意旨如何？師云：開拳作掌。進云：我脚何似驢脚，又作麼生？師云：履齒印蒼苔。進云：如何是學人生緣處？師云：崎嶇峰頭神禹碑。進云：和尚一一祇對的，分明只箇三關爲一爲三。師云：謝爾答話。進云：與麼則會三成，一易會一成。三難。師云：將謂問事漢。進云：恩大難酬，便禮拜。師云：錯。乃橫拄杖云：炎炎六月紛紛雪下，只箇好時節。觀著生眼花，雖然如是，卓拄杖云：不因射鴨手，誰識李將軍。

七月旦上堂，僧問：暑雲散空，涼氣滿秋，好箇時節，願聞提唱。師云：劈腹剜心。進云：便恁麼去時如何？師云：車不橫推。進云：向上全提鐵壁银山，放開線路，墮坑落堑。師云：直須路上頭關。進云：乾峰示衆云：法身有三種病，二種光，一一透得，始是穩坐。意在那裏？師云：不喜舊路逢人。進云：雲門出衆云：庵內人因甚不見庵外事，又作麼生？師云：爲己鎖者多，爲佗鎖者少。進云：不因夜來鴈，爭見海門秋，便禮拜。師云：好看好看。乃云：雨洗炎威，秋意清滴，風到梧桐，擊蒙最的的的人焉。度哉，閃電之機，霹靂擊禪床，一拂子。

解夏小參，僧問：秋風颯颯，逼界清涼，時節已至，其理自彰，此節此景，如何是其理？師云：三十年後此話大行。進云：與麼則現成公案，迥絕商量。師云：依稀似曲，纔堪聽。進云：記得僧問雲門，初秋夏末，前程忽有人問，如何祇對門云：大衆退後，意旨作麼生？師云：眼裏無筋，一世貧。進云：僧云：過在什麼處？門云：還我九十日飯錢來，意在那裏？師云：對午彈琴。進云：恁麼時節，若有人問

前程事和尙作麼生指示佗。師云：一雙草鞋兩文錢，進云：不行尊貴路，爭踏石頭關，便禮拜，師云：且看脚下。

乃云：立制期滿，殿最功齊，取證有則，賞勞時至，何妨人人上朗風，鳥騰箇箇跨虛無，神遊踏著不曠築，著不碍，好箇道伴誰不交肩，雖然如是，出門三步，撞著箇十字街頭，無向背底，不知將那箇一句子，辨得佗端的，若辨不得，卓拄杖云：勸君盡此一杯酒，西出陽關無故人。

復舉，大隋因僧問：金鴈附書爲什麼，不露翼，隋云：不通虛信，師拈云：大隋古佛，雖善其機，及乎打鎖扣枷，恐無此作，若有人問：山僧金鴈附書爲什麼，不露翼，只對佗道：勘破了也，且道：與古人是，同是別，具眼禪流，請辨細素看。

次日上堂，僧問：衲僧家牙如劍樹，眼似銅鈴，四月十五，結佗不得，七月十五，解他不得，畢竟如何，指南一路，師云：謝答話，進云：恁麼則西天此土，草鞋底，日月星辰，拄杖頭，師云：人心似等閑，進云：記得翠巖示衆云：一夏爲兄弟，東語西話，看翠巖眉毛在麼，此意如何，師云：迴想化下有人，進云：保福云：作賊人心虛，還端的也無，師云：豈不信道，進云：長慶云：生也，試委悉看，師云：淨手裝香，進云：雲門云：關如何透得，師云：泊乎鎖斷，進云：此三大老各出隻手，扶樹翠巖用處，莫止一般，麼師云：官差不自由，進云：虛堂老子道：只解同心，不能同志，又作麼生，師云：吉凶不上卦，進云：寶山今夏與兄弟，東語西話，眉毛拄梵天，與翠巖相去多少，師云：嶽秀靈芝異，進云：一句迥超千聖外，松蘿不與月輪齊，便禮拜，師云：咦。

乃橫拄杖云：有佛處不得住，無佛處急走過，卓拄杖一下云：莫孤負趙州老漢，不然靜處婆娑。

阿。

上堂，卓拄杖云：若識得者箇，三世諸佛呵之，若不識得者箇，歷代祖師叱之，何也，風從八月涼，靠拄杖下座。

中秋上堂，拈拄杖卓一下云：昨夜十四有此月，今宵十五有此月，昨夜世人嫌此月，此月猶以有所缺，今宵世人賞此月，此月圓以無所缺，此月無有圓缺心，世人將圓缺分別，分別取相不能泯，隨造隨作，自生滅，若要得遠離生滅，無相光中須休歇，且道：無相光中作麼生休歇，擲下拄杖下座。

上堂，塞鴈度翠微，巖葉落庭際，幾回老瞿曇，爲償腳頭債，雖然沒交涉，更有人，眼裏著須彌去在。

重陽謝海崖義上堂，九日東籬下，菊花賞酒仙，汨羅獨醒者，過在求英賢，何故，豈止麒麟登海嶼，須知義出自豐年，擊拂子一下。

開爐上堂，舉，鴻山問：仰山終日向火，爲甚無暖氣，仰山作：向火勢，師云：鴻仰父子，不妨冷處著，把火，寶山門下，只要箇箇暖氣相洽，何故，拈起死柴頭，且向無烟火。

上堂，拈拄杖云：彌勒真彌勒，分身千百億，卓拄杖云：時時示時人，時人自不識，靠拄杖下座。十一月旦，謝英都寺上堂，寒風匝地，寒鴈橫空，辨玉正按，磨博旁提，頭頭都顯露，物物總現成，何故，蓋是英靈衲子，只爲向事上見。

因雪上堂，少林立巖山坐，爲相逢不相知，趙老臥龐公，指，只要知而故犯，若是我這裏，直饒銀

椀裏盛將來，也是老鼠引生薑參。

冬至小參，僧問：冬至前後，砂飛石走，頭頭合轍，處處逢原，學人上來，請師指的。師云：觀機無改路。進云：與麼則石笋抽枝，鐵樹生花。師云：大家好看。進云：只如諸方今夜堆盤滿釘，是同是別。師云：黃金自有黃金價。進云：德山小參不答話，有問話者三十棒，此意如何。師云：倘若來得，棒頭有眼。進云：趙州小參要答話，有問話者致將一問來，又作麼生。師云：不是冤家不聚頭。進云：和尚小參，要答話，不要答話。師云：不是與人難共聚。進云：畢竟二大老用處與和尚用處，莫止一般麼。師云：莫粘作一堆。進云：學人今夜小出大過，便禮拜。師云：好去好去。

乃云：六爻既窮，陰魔自殄，一陽來復，吾道大亨，直得釋迦老子鼻孔遶天，樓至如來腳踏地，驀忽相逢，合掌擎拳，互相慶賀，道：亞歲令節，萬物重新，未徹者徹，未到者到，伏惟人人起居萬福。大眾若聽得者，箇說話，青色光明雲，若舉得者，箇說話，白色光明雲，且道：兩處俱通底，亦作麼生。擊拂子云：來日定是書雲節。

復舉僧問雲門：如何是法身。門云：六不收。拈云：諸人一向與麼領，相逢不出手，其或未然，前頭更有雪在。

次日上堂，拈拄杖云：只箇片田地，四時不消長，古今爲如此，今古一陽生。卓拄杖一下。

因雪上堂，諸人未來者裏，記得山僧爲人句子，及乎到來者裏，問著箇箇忘却，因甚如此。良久云：只因雪上加霜。

上堂，巖竇宵寒，擁山皴，月高枯木霜禽睡，明覺雖是爲一代之龍門，爭奈坐在無事甲裏，何也。

良久云：臘月苦寒，風雪吹，急急抽身已是遲。

除夜小參，僧問：新底不知舊底已往，舊底不知新底已來，新舊不相知，物物正對偶，還端的也無。師云：三十三天，二十八宿，進云：如何。爆竹未鳴已前，更開一條活路。又作麼生。師云：山門頭合掌，進云：如何是轉身處。師云：佛殿裏燒香。進云：昔日北禪烹露地白牛，分歲和尚今夜將什麼與諸人分歲。師云：細嚼似蜜甘。進云：恁麼則大眾飽德去也。便禮拜。師云：也好。金毛獅子。

乃云：舊年今夜去，去去都是舊曆日，新年今宵來，來來齊是新鮮年，交頭結尾，家家生涯是別。因緣時節，處處大用現前，便見龍寶山頂，仰之無際，大德門下，瞻之無垠，豈曾乎時清道泰，自然得和氣，霽然正當恁麼時，與諸人保愛底一句，作麼生道。擊拂子云：臘雪連天白，春風逼月寒。

復舉香林因僧問：萬頃荒田，是誰爲主。林云：看看臘月盡，山僧不然。若有人，致此問來，只對它道：大坐當軒，且道與古人是同是別。具眼禪流，請分細素。

歲旦上堂，僧問：鏡清因僧問：新年頭還有佛法也無。清云：有此意如何。師云：天高萬象正，進云：明教又答無有優劣也無。師云：海闊百川朝。進云：僧云：如何是新年頭佛法。清云：元正啓祚，萬物咸新，如何委悉。師云：南地竹，北地木。進云：鏡清道有明教道無，和尚又作麼生。師云：有意氣時，添意氣，得風流處也風流。

乃拈拄杖云：鳳曆開元日，王春肇始時，祥雲翻空，瑞雪滿地，發揮佛祖大機，成熟人天性命，諸人盡是此中人，不妨隨物作主，隨處納祐，卓拄杖一下。

上元上堂，僧問：人間燈天上月，有明有暗，有圓有缺，請師端的。師云：萬里一條鐵。進云：龍潭吹滅紙燭，德山大悟，未審見處在明中，在暗中。師云：狗啣敕書，進云：與麼則發光輝去也。師云：阿誰不承恩。

乃云：朵朵放金蓮，重重懸珠網，紙燃無油底，莫鑿壁偷光，擊拂子下座。

佛涅槃上堂，僧問：謂滅非弟子，謂不滅非弟子，如何見得爲佛弟子。師云：杜鵑啼處花狼藉，進云：今日則有，明日則無，今日既道有，向何處見世尊。師云：一任問山僧。進云：與麼則明日何無。師云：不妨答阿彌。進云：四衆各啼泣，雲門爲甚麼。道打殺師云：爲狗守其主。進云：愛之欲其生，惡之欲其死，和尚又作麼生。師云：常用其機。進云：恩大難酬，便禮拜。師云：呼。

乃云：擲出雙趺，如日明，人間天上詎藏，時流若具波旬眼，舞袖猶須在柳梢，喝一喝下座。三月半，遊山回，謝首座。維那并龍翔塔主上堂，舉長沙一日遊山歸門首，首座問：和尚什麼處去來。沙云：遊山來。座云：到什麼處來。沙云：始隨芳草去，又逐落花回。座云：大似春意。沙云：也勝秋露滴芙蓉。師云：奇哉怪哉，兩口一舌。山僧數日來遊山回來，首座不必要問，山僧不必誣佗，不是無其卜意，只慎綱令有人，何故爲祥爲瑞，龍驤風翔。

上堂，豎起拂子云：西天四七，東土二三，盡向龍寶拂子頭上打筋斗，諸人還見麼。若也見得，不妨雨中見，杲日，其若未然。擊拂子云：德山羅漢。

佛誕生上堂，僧問：老胡今日出母胎，未審本來面目。師云：東山西嶺青，僧云：怎麼則雨洗風磨自鮮新，一盆香水爲誰潑。師云：將此深心奉塵刹，是則名爲報佛恩。僧云：世尊下生，素枝引

蔓，如何是直截根源一句。師云：薰風自南來，殿閣生微涼，僧提起坐具云：爭奈有者箇。師云：有則有，到爾無，僧放下坐具云：還端的也無。師云：三十年後，面熱汗出。

乃云：黃金讓采，琉璃凝翠，龍寶手裏有杓柄，不同當日溫涼水，擊拂子一下。

結夏小參，僧問：聲前一句不墮常機，禁足護生，當圖何事。師云：風非竹實而不食，非醴泉而不飲。進云：西天蠟人冰，東土鐵彈子，束之高閣，和尚今夏一百二十日，以何爲驗。師云：僧堂裏佛殿前，進云：望見資福刹竿，便回，脚跟下好與三十，此意如何。師云：車不橫推，進云：望見雪峰，便參主事，又作麼生。師云：庭禽養勇，終待驚人。進云：畢竟還有結制安居底時節麼。師云：鐵丸無縫罅，進云：和尚今日小參，爲守舊規，別有新條耶。師云：崑崙劈不開。

乃云：但薩阿竭，有廣大規範，二千年前爲百萬風毛，後代兒孫不忘基本，力之以呈箇漆器，苟得其人，則不踞圓覺伽藍，不恭平等性智，手碎鐵山，足跨巨海，盡格外玄機，用袈僧作略，未爲分外，若也有箇孜孜兢兢底漢，長期一百二十日內，眼眸不謾開，脚板不謾踏，以阡陌爲井，壟以聚落爲茅坑，函蓋相應，方圓相投，乃是列刹攸撰，吾門優曹也。敢問諸人，此兩種禪和，那箇親那箇疎。擊拂子云：道著道不著，且於三條椽下摸索。

復舉，雲門因僧問：如何是清淨法身。門云：花藥欄。僧云：便怎麼去時如何。門云：金毛獅子。師云：者僧若是作禮而去，須見雲門出人全機，雖然如是，黃金自有黃金價，終不和沙賣與人。

次日上堂，僧問：竺土老子恐他害命，爲渠結制，謂之禁足，豈非箇一著弄巧成拙。師云：風林吒之，進云：須彌那畔大洋海底，一時走徧，當有此漢出來，和尚如何教他制禁。師云：且坐喫茶，進

云記得雪峰領衆到浮江間云欲寄二百僧過夏得否浮江以拄杖畫一畫云著不得還端的也無師云冤家結得進云一畫底靈師云舌頭拖地進云著不得又作麼生師云勢力不少進云有人道寄二百衆過夏未審和尚容他也無師云莫向淨地上扇進云如何是和尙一句子師云退後退後

乃云衲僧家氣宇如玉祖佛俱不容今朝因甚坐在二千年前影子裏卓拄杖云鑿池不待月池成月自來

端午上堂拈拄杖云文殊要藥財善採藥雖通其機爭似我這裏箇箇大安樂卓拄杖云切忌求無病藥靠拄杖下座

上堂得之而蹉過不得之而不及雖然如是三十年後此語大行始得以拂子擊禪床下座

半夏上堂今朝相逢等閑問過人人解道今日半夏阿呵呵阿呵呵山僧與麼道是褒諸人是貶諸人卓拄杖一下云六月賣松風人間恐無價

上堂舉菩薩於樹下而坐天龍八部梵釋四王悉以歡喜於空中踊躍讚嘆時第六天魔王宮殿自然動搖心大懊惱乃念言沙門瞿曇今在樹下端坐思惟不久廣度一切超越我境界今往壞亂之乃俱無量眷屬圍繞菩薩發大惡聲震動天地菩薩心定顏無異相怡然不動不驚猶如獅子處鹿群於是諸魔自然散壞師云大衆世尊降魔不無只是用如來禪故其力不全吾衲僧家用祖師禪降伏衆魔亦作麼生以拂子擊禪床一下云看看諸魔盡膽裂道光忽超昇

上堂至道無難唯嫌揀擇忽拈拄杖卓一下云者箇是龍寶拄杖子至道與揀擇在什麼處又卓一下云但莫憎愛洞然明白

上堂世界恁麼熱爲什麼看雲亭上炎威到不得若人識得者箇道理三十年後免得一日頭白

七月旦上堂一葉落天下秋一塵起大地收時節難遇難提掇處轉風流擊拂子下座

解夏小參僧問昨見垂楊綠今逢落葉黃聖制周圍事願更聞舉揚師云有意氣時添意氣進云兄弟一夏不犯法令來日期滿東去西行賞勞言薦又作麼生師云家家門路通長安進云瀉山問仰山子一夏不上來在下面作得箇什麼仰云鉏得一片畬種得一籬粟意在那裏師云父子取火夜遊進云瀉云子不虛過一夏意旨作麼生師云末後爲初進云仰云和尚作得箇什麼瀉云日間一食夜後一寢如何辨端的師云兩口一舌進云仰云和尚亦不虛過一夏道了吐舌靈師云知跪乳之禮進云瀉云子何得自復己命如何領略師云得而不毀進云忽有人問著和尚今夏事又如何祇對師云徐行蹋斷流水聲縱觀寫出飛禽跡進云不因夜來鴈爭見海門秋使禮拜

師乃云秋風吹玉管知音不住青霄之外秋月碾冰輪光輝盡塵刹而照絕全放全收古路有誰踏著一擔一縱動容聲色威儀矧亦諸人一百二十日終不虛拈匙放筯來日期滿聖制周圍各各得從脚跟下去不妨踢倒須彌立乾滄溟雖然如是忽若見娑竭出海龍宮震切莫誦多地夜他何故抖擻多年穿破衲襤褸一半逐雲飛

復舉翠巖夏末示衆云一夏已來與兄弟東說西話看翠巖眉毛在麼保福云作賊人心虛晚却紫茸氈長慶云生也車不橫推雲門云關父羊子證三大老各雖出隻手奈何未出翠巖關楸子只如不落他圈續一句又作麼生一峰雲片片雙磡水潺潺

次日上堂僧問長期已滿布袋頭開月白風高無非秋色師云洞房深處說私情進云學人便恁麼去時如何師云雨過夜塘秋水深進云與麼則直須向萬里無寸草處去師云貪程太速進云可謂一夏不虛度光陰師云赤土畫簸箕進云一聲雷震清鷗起天上人間知幾幾使禮拜師云何處不清涼

乃云一夏禁足安居與諸人取證山僧多是昏沈今朝解開布袋與諸人遨遊山僧渾是走作所以道佛手遮不得人心似等閑到村草步頭莫錯舉

中秋上堂僧問靈山話月曹溪指月意旨如何師云牛頭沒馬頭回進云寒山子底又作麼生師云崑崙囉生鐵進云玄沙爲什麼道生死岸頭事試甄別看師云和盤推出夜光珠進云恁麼則天上人間未出此光影中師云莫把商音作羽音僧提起坐具云者箇是爲出光影中未出光影中耶師云扁舟已過洞庭湖

乃云藥嶠披雲笑王老拂袖行寒山不愁無口稜長沙無由私路行檢點將來盡是在光影裏作活計何也中秋三五今宵月爽氣遠浮銀漢清

上堂拈拄杖云當於色中不失色體於無相中不得有故達磨師祖無端走到東勝昇州却還向山僧手裏藏身諸人若見得上大人丘乙巳若見不得化三千七十七卓拄杖一下

重陽上堂今朝重九節東籬菊已花對景思陶令登高憶孟嘉且道其中意又作麼生擊拂子云相逢共賞紫萸茶

上堂空手把鋤頭步行騎水牛傳大士用盡平生伎倆只道得胡兒無鬚底句山僧不曾要按牛頭喫草莫教巖葉霜飛秋意深

開爐上堂舉趙州示衆云三十年前南方火爐頭有箇無賓主話直至今無人舉著師云咄爾只要炙手助熱誰家竈裏火無煙卓拄杖一下

上堂是法住法位世間相常住拈拄杖卓一下云者箇是龍寶拄杖子喚作是法入地獄如箭喚不作是法亦入地獄如箭是故世尊苦口便道得住法位三字雖然如是又卓拄杖一下云寒風凋敗葉且喜故人歸

冬至小參僧問群陰剝盡一陽復生正與麼時衲僧如何轉身師云鐵輪碎石進云陰陽代謝四序變遷且致只如卦文未分風塵未動時又如何師云萬里一條鐵進云恁麼則一氣不言含有象萬靈何處謝無私便禮拜師云逢人莫錯舉

乃云有物先天地鐵鎚擊不碎無象本寂寥夜合而晝開能爲萬象主擁之而不聚不逐四時凋撥之而不散恁麼恁麼雪嶺泥牛吼不恁麼不恁麼雲門木馬嘶金不博金水不洗水且置書雲令節箇箇保愛順時納祐底一句又作麼生擊拂子云律管知處繡紋線長

復舉僧問古德如何是冬來事德云京師出大黃師拈云巖竇宵寒擁山帳月高枯木霜禽睡寶山著此兩句爲賓竭力爲主竭力具眼禪和請辨端的

次日上堂時臨亞歲節屆書雲一氣不言鐵樹開花初爻無象萬彙盡彰正與麼時活脫衲僧如何受用去卓拄杖一下云一冬與二冬相逢不出手

祐德禪寺佛堂供養陞座師拈香云此香非從天所生非從地所生非從虛空所生從檀主信心生根苗蟠大明之表條幹茂至陽之清蕪向爐中仰祝帝道遐昌俯祈香花敷榮

師就座云聲前領旨已犯祖令句後承當法不相饒不涉二途莫有解問底麼僧問甘蔗流苗應利塵覺場高發利生因師云誰不承恩進云卓舉雄機隨處無阻古今肯重事請師不怪一句師云騎一問來進云直下構得更不同頭亦作麼生師云寶杖夜鳴寒蟠月進云昔日須達

建獨園精舍屈世尊爲群生說法今日檀越造祐德禪寺請和尚爲四衆演法其益還有優劣也無師云無有優劣進云今日檀越造此禪苑與昔日須達建彼梵刹其功又有多少也無師

云無有多少進云正法末法時異佛法僧法名殊爲甚其功得等同麼師云洞中山色四時好雲外溪聲一樣寒進云與麼則生生頂奉輝心鏡廓照塵勞信有餘使禮拜師云也何妨

乃云千聖靈機列祖命脈嶺上白雲巖前綠水亘古亘今透色騎聲青寥寥白的的難提掇處轉是風流迄于德山行棒臨際行喝雪峰棍毬禾山打鼓齊是恁麼時節只露目前些子所以

山僧歷山渡水得得而來開堂演法爲大檀信開運添德增壽增福亦不出者箇且道畢竟其功歸何處擊拂子云國清才子貴家富小兒嬌(敘謝不錄)

又云至道曠遠幽致虛凝佛佛以之匡持祖祖以之保護其要在利度群有隨處作主脫體現成隨物能轉苟得其人則匪啻自得靈然爲慈悲動於中隨順菩薩行願豁開本有光明藏

賑濟五趣之貧兒高低普應前後無虧遇緣卽宗無滯一隅所以大檀越具廣大知見有堅固信力運出自己家珍建立奇麗禪苑安置佛僧紹隆法寶丁于五濁惡世中人無至信時發無比之大願成見聞之巨益能爲蛤蟬之依託最作漂沈之要津以所集功課符二親之幽靈薦運開於上品遠請山僧來贊揚其功德若論其功德山僧未開口已前其功廣施其德偉被矧亦雪裏巒山以儼淨刹之勝境風拂寒木而唱念法之妙音正當與麼時箇箇無盡刹刹塵塵悉是展無量壽佛之慈顏不可說不可說頭頭物物現信心不二之全體一心多心一劫多劫圓三身四智徧八解六通五眼融通無處而不鑑十力滿足無邪而不摧具足一切攝受苦提智智清淨無別無斷深入大陀羅尼妙門住大不可思議境界有如是作用如是奇特如是威光如是吉祥山河大地草木叢林情與無情因中與果上無高無下發大機大用得大安大樂諸人要見此事麼竹有上下節松無古今青

舉世尊初成道於普光寶殿不離道樹上須彌山頂帝釋宮帝釋化作一寶坊爲說十住法門師拈云世尊半夜日頭出帝釋日午打三更若是山僧開堂底天平地平卓拄杖一下便下座上堂拈拄杖云拄杖子有三件長處第一疾程朝到西天暮歸東土第二妙言一句截流萬機寢削第三巧通變作龍上天作蛇入草若人善識得還我話頭來

佛成道上堂僧問我佛棄萬乘尊榮受六年饑凍忽覩明星豁然成道未審成何道師云鼻孔掛上唇僧云世尊說法大梵天王以金色波羅花獻此意如何師云報恩須是還知恩人僧云世尊拈起顯示大衆惟有迦葉尊者破顏微笑意旨作麼生師云二虎爭時其勢不生僧云世

尊云：吾有正法眼藏，分付摩訶大迦葉。又作麼生？師云：說向愁人，愁殺人。僧云：今日和尚說法，有人獻花，未審如何顯示？師云：也爭奈不得破顏人。

乃云：坐吉祥之座，切要覓木椽子換眼睛。及乎見明星，果然將錯就錯。從此起定賣弄大地，山僧直得暗地裏點頭，諸禪德，爾如解點頭底，取次不敢肯牛畔之供。

因雪上堂，譬如大地一片雪，見底謂之白，踏底謂之冷。只如不見不踏底，又作麼生道？以拂子擊禪床一下。

除夜小參，僧問：一年三百六十日，交頭結尾，別有生涯，如何得大用現前？師云：頂上無骨，領下有鬚。進云：北禪今夜烹露地白牛，分歲檢點將來，正是殘盃冷肉，和尚將什麼施設大衆？師云：大家在這裏進云：三陽交泰，萬彙亨，定是來年蠶麥熟，便禮拜。師云：不妨道著。

乃云：年窮歲盡，結角羅紋，木馬飛上天，泥牛走入海，誰管陰陽變化，氣候遷謝，大底鼻孔向下垂，多年曆日不相干，所以道：日日是好日，時時是好時。交頭結尾，別有生涯。擊拂子云：天淨不知雲去處，地寒留得雪多時。

正旦上堂，僧問：元正啓祚，萬物咸新，祇僧門下有何祥瑞？師云：方袍圓頂。進云：與麼則年年是好年，日日是好日，爲什麼還得有新有舊？師云：一回拈出一回新。進云：可謂堯風舜日，和氣鸞然，樵唱漁歌共樂豐年，便禮拜。師云：方知爾是識其言。

乃云：日暖風和，百花競發，人傑地靈，色足可觀，且道：其中慶賀事作麼生？卓拄杖，伏惟箇箇道體起居萬福。

元宵上堂，我見燈明佛，本光瑞如此，眼中瞳子面前人，寶山未嘗說會與不會，箇箇莫向燈影裏轉身，擊拂子下座。

佛涅槃上堂，不許無邊身之供，喫工巧之和羅飯，胡亂賣峭非，知其時，嗚伊嗚伊，年年二月是仲春。

三月旦上堂，甘草先生，苦草後生，好蠶麥熟，天平地平，忽有此漢出來，道和尚與麼說話，爲是佛法，是世法耶？山僧向佗挪揄道：三月無三卯，田家必飽。

上堂，春山青春水綠，不是目前機，亦非目前事，且道：畢竟是什麼？擊拂子云：常憶江南三月裏，鷓鴣啼處百花香。

大德寺語錄終

筑州太宰府萬年崇福禪寺語錄

侍者 宗貞編

山門門頭實地箇箇踏著因甚諸人隨我入得喝一喝。

佛殿前佛後佛隱顯非一咄不因新長老證明知佗一對無孔鐵。

土地堂護法先須識得主人公阿誰是主人公扣齒三下云東西南北一尋家風。

祖師堂者一隊老漢惜乎坐在者裏提起坐具云若不行此令誰敢得扶起。

方丈橫拄杖云關中主能解與本分草料烏背薄舌莫胡亂供欺去靠拄杖。

拈帖溫潤之文格調之氣直饒被蒙頭奚以讓爲之義。

山門疏成言於語成語於言如何若何官不容針。

法座諸人喚作高廣座子山僧喚作者箇座子何故一步云只爲到與麼地。

師陞座拈香云此一瓣香薰向爐中恭爲祝延。

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲。

陛下恭願。

龍圖永固玉葉彌芳。

令。

又拈香云此一瓣香薰向爐中奉爲大檀主筑州大空門泊都督司馬增崇祿算伏願扇威風於千歲輝佛日於萬世。

拈香云此香薰向爐中供養前住巨福名山建長禪寺先師 敕諡圓通大應國師南浦和尚大禪師用酌法乳之恩。

師斂衣就座云明鏡當臺明珠歷掌要分妍醜者直下來相見有麼有麼時有僧問綠樹陰濃夏日長樓臺倒影入池塘師云時節難逢僧云和尚辭帝里 皇帝留之更向甚處通一路來師云鐵船水上浮僧云寰中天子敕尊師云誰不承恩僧云與麼則呆日麗天清風匝地師云大方無外僧云記得保壽開堂三聖推出一僧意旨如何師云白雲深處金龍躍僧云壽便打又作麼生師云碧波心裏玉兔驚僧云若忽有人推出一僧如何祇對師云風光可愛僧云者箇且置今日還有禁足安居底道理麼師云大家在者裏僧云十五日結制則不問卽今一時結去看師云處處綠楊堪繫馬僧云恩大難酬師云能有幾人僧禮拜。

師乃云世尊拈花迦葉微笑君子愛財取之有道正法眼藏從此流通遞代傳持受虛接響激揚鏗鏘坐斷古今珠回玉轉八面玲瓏迄于其大機圓應大道無方一寶一主擒縱擡搦收放明暗電轉星飛窮則變變則通青於藍寒於水聽教挺拔威音那畔蕭然空劫已前況亦清風明月多雅興白雲流水寬詩緣四海九州雷動風行漁歌樵唱共賀太平正當與麼時人人禁足護生人人剋期取證 皇恩佛恩一時報了底事又作麼生擊拂子云版圖遠奏堯天潤萬

物呈祥樂。聖情。

復舉三聖道我逢人即出出則不爲人與化道我逢人則不出出即便爲人師云二大老可謂漆隱處黑朱隱處赤若是山僧底天平地卓拄杖下座。

當晚小參僧問三月安居九旬禁足則不問遠離花洛親到岳峰一句如何師云八角磨盤空裏走僧云和尚住此山以何安衆師云山色夕陽時泉聲中夜後僧云與麼則大衆飽德去也師云無限清風來未休僧云德山小參不答話有問話者三十棒意旨如何師云去得來不得僧云趙州小參要答話有問話者置將一問來又作麼生師云來得去不得僧云今夜小參要答話不要答話耶師云出頭天外看誰是我般人僧云三大老用處莫止一般麼師云教個休也不肯休僧云若如此則一即三三即一師云叫叫僧云學人今夜小出大遇便禮拜師云撒手那邊去。

乃云今夜要與大衆有箇識面之話各各切宜起倒分明陵王溪畔此君亭邊諸人知有未得做主崇福區字件件數目山僧做主未辨大毫既一其居爲甚受用不同還會麼所以道欲識佛性義當觀時節因緣明朝賴是結制安居之辰箇箇成熟慧身坐底立底築著磑著自然不得孤負者箇便卓拄杖一下。

復舉雲門因有官問佛法如水中月是也無門云清波無透路師拈云以答見問問最可以問見答答未奇且道誦訛在甚處具眼禪流請辨縑素看。

次日上堂我箇一衆與尋常不同跳出金剛圈吞透栗棘蓬激電神機雲飛騰到既而如此今

朝因甚要行不行要住不住還會麼擊拂子云塌薩阿竭二千年。

五月旦上堂僧問聲前薦得未是作家喝下承當猶是鈍漢爲什麼如此師云石壓笋斜出岸懸花倒生進云猶是學人疑慮師云鳳林吒之進云記得僧問投子如何是十身調御投子下禪床立意旨如何師云頂上無骨進云又問凡聖相去多少投子亦下禪床立意在那裏師云領下有鬚進云若有人問如何是十身調御如何祇對師云眼中童子面前人進云上來一一指示分明爲人底一句又作麼生師云三十年後自悔去亦不定。

乃云崇福有三訣若參得第一訣許個拄杖頭上挑日月若參得第二訣不妨拂子頭上打筋斗若參得第三訣我且問爾山前麥熟也未。

端午謝檀家補寺齋上堂僧問今朝五月端午不用書符咒土請師現量法門一句直下至論師云一峰雲片片雙磡水潺潺進云家無白澤之圖又作麼生師云將謂要問話漢進云善財撞著文殊底時節且置天澤三轉語還許學人咨參也無師云鑽之是仰之是進云己眼未明底因甚將虛空作布袴著師云脛無毛股無肉進云割地爲牢底因甚透者箇不過師云脚下荆棘深數丈進云入海算沙底因甚針鋒頭上翹足師云覺築著個鼻孔麼進云恁麼則金殿譚禪大悅皇情嶽峰聲道奔走衲子也未爲分外在師喝云非阿彌境界進云錦上鋪花又一重師云咳。

乃云端午天中節諸方盡咒土書壁以消妖怪認採藥模樣落草以作伎倆爭如我者裏有不忘靈山付囑之人忽展妙術之手拔貧做富一衆箇箇石人之機鐵漢之用風吹不入水洒不

著諸人要見此人麼卓拄杖云切忌當面諱却。
 和泉和尚至上堂僧問長松嶺頭風颭颭飛瀑岸前水潺潺現成公案大難大難如何履踐師
 云好向大難處履踐進云恁麼則薰風自南來殿閣生微涼師云認驢鞍橋作阿爺下頷進云
 和尚有三訣一一許咨參也無師云何妨問將來進云若參得第一訣許欄拄杖頭上挑日月
 舞進云若參得第三訣我且問爾山前麥熟也未意在那裏師云眼睛烏律律進云者箇三訣
 畢竟明得什麼邊事師云金香爐下鐵崑崙
 乃舉興化見同參來喝底公案師云古人只要就價高處缺篤其管賞之義崇福今日得和泉
 和尚光訪事事自然函蓋相應何故擊拂子云竟火和煙得擔泉帶月歸
 退院上堂拈子從來無定迹天涯海角任情遊一毫頭上辭華洛三鼓聲中出九州

崇福寺語錄終

洛陽龍寶山大德禪寺語錄

退橫岳歸本寺

侍者 惠眼 編

七月旦上堂秋雲清淡秋水清冷東西與南北觸處嫩涼生且道其中事作麼生卓拄杖云四
 海隆平煙浪靜斗南長見老人星
 解夏小參隨處作主結聖制於橫嶽山頭立處皆真解賞勞於龍寶峰頂此事不相諱時不孤
 負人破袂逐雲飛草鞋隨路轉左足先應處脚頭是通宵何必落臺山葛直之途轍慕流榮不
 肯之道伴雖然如是山僧有親切一句子各各分明善為處處不得忘却便卓拄杖一下
 復舉文殊三處度夏公案師云文殊當年於列聖眉毛裏雖藏得渾身二千年後未免遭人點
 檢何故擊拂子云雲在嶺頭閑不徹水流磯底太忙生
 次日上堂風到梧葉露凝槿花無寸草地不較其多莫教語默逢人對回首忽然是月華
 八月旦上堂八月初一日天下太平節人人樂無為箇箇火難絕且道因箇什麼如是卓拄杖
 一下云分一節

中秋上堂拈拄杖卓一下云靈山指者箇曹溪話者箇我者裏不指不話還有親疎也無又卓
 一下云無人知此意令我憶南泉
 臘八上堂澄月映徹衆星粲朗箇中無悟處世尊何悟道卓拄杖一下云二千年前二千年後

除夜小參，日一上月一上，晝一上夜一上，窮到一十二箇月，數到三百六十日，謂之新舊交頭。除夜結尾，諸人若使身在舊年，不發新定機，也使心在新年，失却本來用，所以北禪烹露地白牛，祖翁挑半宵之燈，雖然如是，山僧終不入與麼窠窟，何故？臘雪連天白，春風逼戶寒。復舉僧問香林，萬頃荒田，是誰爲主？林云：看看臘月盡，師拈云：此箇時節，最是可愛，來日定大年，一衆須保愛。

正旦上堂，風曆開元日，王春肇始時，雪寒北嶺，梅香南枝，好箇好時節，龍天須匡持，且道，以何爲驗？卓拄杖一下，便下座。

元宵上堂，僧問：今朝上元節，處處掛燈籠，意旨如何？師云：風吹不入，進云：只將此正言，以祝天下春。師云：知言之漢，進云：記得僧問香林，如何是室內一盞燈，此意如何？師云：言鋒冷似冰，進云：林云：三人證龜作鼈，又作麼生？師云：利舌硬如鐵。

乃云：燈燈相續，燈燈無窮，處處列夜光珠，頭頭莊夜明符，只此光輝底，都從者裏普擊拂子一下。

佛涅槃上堂，僧問：今宵夜半，世尊入涅槃，兒孫以何辭法乳？師云：杜鵑啼斷月如畫，進云：與麼則解知恩報恩？師云：也何妨？進云：世尊昔在靈山會上，拈起一枝花，此意如何？師云：萬里一條鐵，進云：迦葉獨微笑，意在那裏？師云：金不博金。

乃云：我若謂滅度，非我弟子，我若謂不滅度，亦非我弟子，當年若有人道生靈終不改辣，非但救得釋迦老子，也須扶得一會列聖，何故？良久云：紅霞碧靄籠高低，芳草野花一樣春。

三月旦上堂，山花開似錦，澗水湛如藍，堅固法身太無端，大龍何處露心肝，諸人見得不無，因甚不解，舉得擊拂子云：又逐流鶯過短牆。

上堂，一卽一切，一切卽一，拈拄杖卓一下云：三祖大師，無端穿柳巷，入花街，忽然逢著幽鳥語，喃喃辭，雲入亂峯，合掌低頭道，揭諦揭諦，是什麼道理，諸人各辨別，又卓拄杖下座。

佛生日上堂，僧問：釋迦老子今日初下閻浮，四衆臨筵，願聞法要，師云：斧頭元是鐵，進云：薔薇滴露，楊柳籠煙，莫是瞿曇真面目麼？師云：莫認驢鞍橋，作阿爺下領，進云：世尊初生下時，周行七步，一手指天，一手指地，是什麼心行？師云：鐵丸無縫罅，進云：稱天上天下唯我獨尊，不是傍若無人麼？師云：佗後有雲門一棒，在進云：雲門棒頭，還相當也未？師云：焦磚打著連底凍。

乃云：指地指天，稱獨尊，顛言倒語，卒難論，金容萬德有誰看，徧界堂堂常獨存，雖然如是，一杓惡水更難放過，以拂子擊禪床一下。

結夏小參，僧問：結制已前，月白風清，豈不是成就慧身底時節？師云：刺破眼睛，進云：結制已後，風清月白，向甚麼處剋期取證？師云：三生六十劫，進云：今夜小參，緊要一句，不落結制前後，願聞提唱，師云：勘破了也，進云：和尚布，漫天網子籠絡衲子，忽如有透得金剛圈底漢，亦作麼生羅籠得佗？師云：森森夏木杜鵑啼，進云：恁麼則可謂隨處作主，立處皆真，便禮拜，師云：且坐地商量。

乃云：鵝護雪鴈人冰，古今結制榜樣，衲子禁足風規，三月九旬內，於七尺單前，澄澹身心，成熟本智，情與無情一齊安居，無前無後，同時寂定，謂之以大圓覺爲我伽藍，身心安居平等性智。

若其逐境走作，隨物紛拏，無有此處，正與麼時，本色行脚師僧，入此保社，不入此保社，擊拂子云：金屑雖貴，落眼成翳。

復舉僧問：雲門如何是諸佛出身處？門云：東山水上行，韶陽只要箇箇以鐵壁爲戶，扇去，山僧不然。若有人問如何是諸佛出身處，便對佗道：鷲峰山色青更青，且道：那箇親那箇疎，分明辨別看。

次日上堂，僧問：樹頭紅稀，林下綠暗，好箇時節，請師提唱。師云：萬里一條鐵，進云：恁麼則薰風自南來，殿閣生微涼。師云：見之不取，思之千里，進云：今朝盡是護生安居，當圖何事。師云：著黑衣，護黑柱，進云：如朝行西天，暮歸東土，還有禁足分麼。師云：我者裏喚作走作漢，進云：學人今夏依附和尚，有何方便。師云：只此一問從何來，進云：若不登樓望，焉知滄海深，便禮拜。師云：何必。

乃云：今日是結制，一衆各禁足，眼畔重千斤，堂裏伸兩脚，是箇什麼道理，三條椽下摸索。

上堂，僧問：學人心猿未穩，意馬奔馳，願示方便。師云：鐵鏈無孔，進云：與麼則把斷要津去也。師云：又與麼去也。進云：記得巖頭問德山，是凡是聖，意在那裏。師云：石從空裏立，進云：山便喝，如何理會。師云：火向水中焚，進云：若有人問和尚是凡是聖，聖師云：九九八十一。

乃舉僧問：洞山寒暑到來，如何回避。山云：何不向無寒暑處去。僧云：如何是無寒暑處。山云：寒時寒，殺閻梨，熱時熱，殺閻梨。山僧不然。若有人問如何是無寒暑處，只對佗道：靜處薩訶，且道：那箇親那箇疎，諸人各辨別。

端午上堂，僧問：今朝正是端午節，家家掛艾虎，處處浴香湯，和尚應節一句，願聞提唱。師云：黃鶴樓前鸚鵡洲，進云：恁麼則山自青，水自綠。師云：隨後裏搜漢，進云：記得文殊令善財採藥，財云：信手採來，無不是藥，此意如何。師云：瞎漢亂統作什麼。進云：善財拈一莖草，度與文殊，文殊云：此藥亦能殺人，亦能活人，又作麼。師云：上是天，下是地。

乃云：今朝端午節，無妖亦無怪，不假善財藥，人人自慶快，擊拂子下座。

半夏上堂，僧問：一夏已過半，崑崙嚼生鐵，半夏已後，又如何履踐去。師云：晨朝粥，齋時飯，進云：已前已後，且置，正當今日，直開指示。師云：頭頂天，脚履地，進云：記得僧問智門，蓮花未出水時，如何門云：蓮花，意旨作麼生。師云：水洒不著，進云：僧云：出水後如何。門云：荷葉，還端的也無。師云：風吹不入，進云：出水與不出水，相去多少。師云：何不向老僧問將來。進云：移花兼蝶至，買石得雲饒，便禮拜。師云：吽。

乃拈拄杖云：六月不熱，五穀不熟，今日爲諸人熱之熱之，卓拄杖一下云：已熱已熟，後如何。擲下拄杖云：天平地平。

上堂，僧問：火雲燒空，普天炎熱，向什麼處，正得回避。師云：迦葉門前風凜凜，進云：學人今日脫却鶻臭布衫去。師云：淨裸裸地一句，作麼生道。進云：記得馬大師一日陞堂，百丈出捲席，意在那裏。師云：方木投圓孔，進云：大師便下座，歸方丈，又如何。師云：清風隨步生，進云：和尚今日上堂，無人捲席，豈不是無事而去。師云：養子不及父，家門一世貧，進云：捲席與不捲席，那箇是親，那箇是疎。師云：苦哉佛陀耶。

乃云大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道既是坐道場因甚佛法不現前擊拂子云千里萬里一條鐵

上堂一葉落天下秋是處無不風流若記得箇時節終不將語默辭且道是阿誰分上事喚大衆云還覺頂門獨立麼

解夏小參僧問學人一夏已來波波挈挈過了剋期取證事請師爲證明師云嫩涼秋意入簾櫳進云恁麼則可謂光陰不虛度師云直饒備實度也何是進云記得雲門因僧問初秋夏末前程忽有人問如何祇對門云大衆退後意旨作麼生師云崑崙嚼生鐵進云僧云過在什麼處門云還我九十日飯錢來又作麼生師云平出進云前程問過事卽且置卽今和尚如何勘過師云不消一拶進云柳栗橫擔不顧人直入千峰萬峰去便禮拜師云腳下泥深

乃云秋初夏末季熱未散自恣賞勞箇箇無缺隨時應節無不漏逗就理就事無不現前軒知會則途中受用如龍得水不會則世諦流布似羝羊觸藩畢竟與麼去步步清風起佛手遮不得人心似等閑路頭踏著不會瞋萬里神光頂後相然雖如是只如雲門道還我九十日飯錢來是阿誰分上事擊拂子云不因樵子徑爭到葛洪家

復舉翠巖夏末示徒公案師拈云一畝之地三蛇九鼠

次日上堂僧問衲僧家四月十五結佗不得七月十五解佗不得畢竟向什麼處安身立命師云須彌南畔閻浮樹進云與麼則西風一陣來落葉兩三片師云矮子看戲進云昔有老宿一夏不爲師僧說話有僧嘆云我只麼空過一夏不敢望和尚說佛法得聞正因二字也得意旨

如何師云拋却黃金捧碌甌進云老宿聞云閻梨莫誓速若論正因一字也無道了扣齒云我無端恁麼道又作麼生師云三千八百進云隣壁又有老宿聞云好一釜羹被兩顆鼠糞汗却意在什麼裏師云同病相怜進云和尚一夏已來說什麼法爲人師云山青水綠進云攪長河爲酥酪變大地作黃金便禮拜師云也何妨

乃舉趙州因僧辭州云有佛處不得住無佛處急走過三千里外逢人莫錯舉僧云與麼則不去也州云摘楊花摘楊花師云趙州若無後語須是遭人點檢何故風從八月涼月自七月明八月旦上堂拈拄杖云月月初一無雨爲吉今月初一有雨爲吉且道吉在甚處卓拄杖一下云吉吉吾道最吉靠拄杖下座

上堂西風一陣來落葉兩三片錮鑿著生鐵佛祖渾不辨不辨不辨諸人且過那邊

重陽上堂僧問今朝是九九日諸方盡賞佳辰衲僧門下不墮常機應節一句願聞法要師云秋晚頓寒箇箇萬福進云只如採菊東籬下悠然見南山底未審和尚如何證明師云刺破眼睛進云古德云重陽九日菊花新又是呈什麼道理師云謝答話

乃云採菊東籬下悠然見南山靖節只知其愛不知其用今日重九作麼生用得擊拂子云二三三三三三

上堂舉有官問雲門佛法如水中月是不門云清波無透路官云和尚從何得門云再問復何來官云正與麼時如何門云重疊關山路師云雲門官不容針官人私通車馬點檢將來兩俱失利何也自從賢聖法來未嘗殺生卓拄杖下座

開爐上堂無賓主話十八高人一回舉來一回是新及乎問其意旨大半便道不知最親阿呵呵只要爐下煖似春。

上堂南山松北嶺雪夜雨晝晴太平得節達磨來東土二祖行西天行脚禪和子莫失却目前喝一喝。

上堂一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法皆從此經出忽拈拄杖卓一下云勸君盡此一盃酒西出陽關無故人。

冬至小參僧問葭管飛灰繡紋添線不涉陰陽造化願聞法要師云八角磨盤空裏走進云恁麼則岸柳未開眼庭梅先發花師云好與麼去進云記得僧問百丈如何是奇特事丈云獨坐大雄峰遠端的也無師云把定要津不通凡聖進云僧禮拜又作麼生師云不拶破頂上進云丈便打如何理會師云依令而行進云古人則且置即今問和尚如何是奇特事如何祇對師云三十年後面熱汗出進云不入虎穴爭得虎子便禮拜師云爲我將得來看。

乃云六陰謝盡一氣方生鐵樹開花石笋抽條衲僧家若向者裏轉身來自然枯枯燥燥得失是非一時放却也是省錢易飽底事古來淨悄悄地爭之不足何須運步念阿伽門而今多是知時不知節也猶不妨東西南北鳥飛兔走直饒向山僧背後問訊也山僧不敢可橫點頭何故卓拄杖云國清才子貴家富小兒嬌。

復舉僧問趙州如何是趙州州云東門南門西門北門僧云不問這箇州云備問趙州拈云以機奪機以毒攻毒趙州老漢不無之其奈何八十行脚事猶未全用在若得全用去兒孫滿堂

至今繁興

次日上堂僧問霜飛大野風戒林丘普天普地寒威凜然更向什麼處得回避去師云陽氣發時無硬地進云瓊瑤未動全機顯露朕兆纔分觀體現成不涉時節不借言薦親切一句願聞舉揚師云家家觀世音進云慈明揭牌皓老不洗布裙點檢將來早是劍去久矣寶山今日莫別有條章麼師云一冬二冬叉手當胷。

乃云瑞雪滿地祥雲翻天龍寶山頂和氣靄然好箇時節爲君報知一氣不言含有象萬靈何處謝無私。

謝進退兩班上堂竿頭進一步大千沙界現全身退步就已萬中一箇而不失蓋是與麼人作與麼行履者也大衆要見此人麼雲在嶺頭閑不徹水流澗底太忙生。

臘八上堂僧問釋迦老子六年冷坐逗到臘八夜始方開悟去未審悟得箇何事師云鼻孔掛上唇進云未見明星時已雪山雪白一見明星後又雪山雪白這裏端的事和尚如何甄別師云鐵丸無縫罅進云只如有一人發真歸源大地衆生向何處去師云向個眼睫上去進云恁麼則可謂劫外一壺春更好優曇花綻普天香便禮拜師云道即道得。

乃云盡謂世尊臘月八夜成道是則是敢問諸人如何是成底道若是識得報恩有分若也識不得擊拂子云初中後三大劫。

除夜小參僧問舊歲今宵去向甚處去師云頭上一堆塵進云新年明日來從甚處來師云脚下三尺土進云還有不涉新舊底也無師云有進云如何是不涉新舊底師云大底鼻孔向下

垂進云：記得感首座問法昌，昔日北禪分歲，烹露地白牛，和尚今夜分歲，有何施設？昌云：臘雪連天白，春風逼戶寒，意旨作麼生？師云：兩口無一舌，進云：感云：大眾如何喫？昌云：莫嫌冷淡無滋味，一飽能消萬劫飢，此意如何？師云：鬼爭漆桶，進云：感云：是何人置辨？昌云：無慚愧漢，來處也不知，又作麼生？師云：彼此出家兒，進云：古人卽且置，和尚今夜分歲，有何施設？師云：且待有童行報去，進云：大眾如何喫？師云：不可從鼻而入，進云：是何人置辨？師云：衣鉢閣中常相逢，進云：和尚與麼施設，與古人是同是別？師云：許備疑三十年，進云：鶴飛千尺雪，龍起一潭水，便禮拜，師云：也何妨？

乃云：今宵臘月三十夜，家家爆竹賞結尾，或操歌吹之音，或促鐘鼓之響，祝來日新年之吉壽，萬歲松栢之操，龍寶山頂人，未必不點頭，只是終不墮，悄然機，豈將等閑風味，以供養合山龍象，雖然如是，與衆分歲，各各須飽足，擊拂子云：趙州喫茶，雲門胡餅。

復舉僧問古德：萬頃荒田，是誰爲主？德云：看看臘月盡，師云：大眾要見此僧，當頭霜夜月，要知古德任運落前溪，雖然如是，靜處婆娑詞。

正旦上堂，僧問：瑞草生嘉運，林花結早春，好箇時節，願聞舉揚，師云：箇箇道體，起居萬福，進云：恁麼則元正啓祚，萬物咸新，師云：一句道著，進云：正當今日大年朝，如何是新年頭佛法？師云：風暖鳥聲碎，日高花影重，進云：僧問雲門，如何是清淨法身？門云：花藥欄，意旨作麼生？師云：刺破眼睛，進云：僧云：便恁麼去時如何？門云：金毛獅子，又作麼生？師云：兩重公案，進云：卽今問和尚，如何是清淨法身？師云：千峰雪色寒。

乃云：今日大年朝，山僧渾解道，大眾箇箇道體，起居萬福，且道：是佛法是世法？卓拄杖云：東西南北，吾道大亨。

元宵上堂，僧問：今宵處處揭燈，萬民共樂，和尚爲人期，起心燈來看，師云：天晴日頭出，進云：恁麼則可謂光明寂照，徧河沙，師云：不妨道著，進云：僧問香林，如何是室內一盞燈？林云：三人證龜作鱉，意在那裏？師云：罕遇便宜，進云：與麼則昔日香林，今日和尚，便禮拜，師云：好去，好用。

乃云：燈燈相續，燈燈無已，且道：此燈從何處來？卓拄杖一下云：我見燈明佛，本光瑞如此。上堂，僧問：春山疊亂青，春水漾虛碧，好箇時節，願聞法要，師云：莫向雪竇背後問訊，進云：恁麼則日自暖，風自和，師云：休向老僧背後問訊，進云：趙州訪一庵主，云：有麼有麼？主豎起拳頭，州云：水淺不是泊舟處，意旨作麼生？師云：蠅見血，進云：州又訪一庵主，云：有麼有麼？主豎起拳頭，州便禮拜讚歎，如何委悉？師云：鶴提鳩，進云：問答已一般，爲甚肯一人不肯一人？師云：看取不落兩頭，進云：若有人問有麼有麼，未審和尚如何祇對？師云：且去喫茶。

乃舉三祖大師道：卽一切，卽一切，卽一，忽拈拄杖云：者箇是寶山拄杖子，阿那箇是一，卓拄杖一下云：只能如此，何慮不終。

佛涅槃上堂，僧問：法身無爲不墮，諸數釋迦老子，因甚示涅槃之相？師云：爲涅槃不墮，諸數進云：古德道：十方薄伽梵，一路涅槃門，且道：如何是涅槃門？師云：日出東，日落西，進云：五通仙人問世尊，云：世尊有六通，我有五通，如何是那一通？世尊召五通仙人，意旨作麼生？師云：平生肝膽向人傾，進云：仙人便應喏，世尊云：那一通，爾問我，如何理會？師云：依稀似曲纔堪聽，又被風

吹別調中進云。後來雪竇著語云。老胡元不知。有那一通。却因邪打正。意在那裏。師云。無影樹下。合同船進云。即今問和尚。如何是那一通。未審如何。祇對師云。三跳後。

上堂。舉雲門云。我看諸人。二三機中。尚不能構得。空披衲衣。何益。師云。山僧不然。我看諸人。悉是大機大用人。剛要作佛。何益。住住。一不做。二不休。不風流。處也風流。

上堂。春山青春水綠。春雲片片。春鳥喃喃。敢問諸人。吾宗門中。是放開。是捏聚。箇箇歸寮舍。摸索看。

四月旦上堂。驀豎起拂子云。西天二十八祖。東土六祖。盡在拂子頭上。說心說性。論玄論妙。山僧忍俊不禁。見怪笑一聲。箇箇面熱汗出。諸人還見麼。若也不見。擊拂子一下云。滿地落花春已過。綠陰空鎖舊莓苔。

佛生日上堂。指天指地。墮尊貴。滿目青山笑點頭。自從雲門行令後。不風流。處也風流。諸人向者裏會得。不妨報恩有分。其如未然。靜處婆娑。

結夏小參。僧問。看雲亭上月。明明古巖松下風。拂拂見成公案絕遮欄。不涉言詮。願聞法要。師云。九九八十一進云。恁麼則山自青。水自綠。師云。隨後婁搜漢。進云。九旬禁足。剋期取證。則不問。七尺單前。三條椽下。學人一夏。如何履踐。師云。眼畔重千斤。進云。古德道。參須實參。悟須實悟。如何是實參。師云。金香爐下。鐵崑崙。進云。實悟底。又如何。師云。何必進云。實參實悟。畢竟作麼生。師云。心不負人。面無慙色。

乃云。言前句後。舌根裏難藏。身上向下。驀拶挨葫蘆子。背面終不落好手。首尾何處該萬類。

遠超象外。迥脫天真。是處雲山溢目。鬧市大蟲誰不解。見見即見。因甚文殊頭黑。普賢頭白。會得三月安居。九旬禁足。循規守矩。脚底不帶五色索。其如未然。靜處婆娑。

復舉臨濟示衆云。一人在孤峰頂上。無出身路。公案師拈云。古來作者。弄嶮落草。等是難禁。只是要須人人在背後點頭。大眾還會麼。鬱頭藍已定。全身。何假周行跨七步。

次日上堂。僧問。如來聖制。禁足護生。衲僧朝游西天。暮歸東土。學人此間。禁足即是。游歸即是。師云。南番大舶主。本此土商人。進云。已道。禁足安居。因甚文殊三處度夏。師云。曲終人不見。江上數峰青。進云。記得雲門示衆云。十五日。已前不問。憍十五日。已後道將一句來。意旨作麼生。師云。什麼處去。進云。自代云。日日是好日。又作麼生。師云。倒退三千。進云。和尚若逢韶陽垂示。向佗如何道。師云。法堂上寸草不生。

乃云。今朝是結制。不敢謾却諸人。只因現量。以舉揚正法眼藏。驀拈拄杖。卓一下云。者箇是龍寶拄杖子。阿那箇是正法眼。若也不會。雨過遠山綠。靠拄杖下座。

解夏小參。三月安居。九旬禁足。山色夕陽時。泉聲中夜後。圓覺伽藍。平等性智。竹有上下節。松無古今青。箇裏無取證。誰成熟慧身。正與麼時節。衲僧活脫處。要行便行。要坐便坐。東西南北。無有遮障。連奔執捉。全超象外。諸人一夏。結眉交肩。今日何必苦口叮囑。雖然如此。擊拂子云。勸君盡此一盃酒。西出陽關無故人。

復舉舉巖夏末示衆公案。師拈云。翠巖爲衆竭力不少。只得箇三枚把不住。老凍膿。若有中郎鑑。何同野舍薪。

上堂真空不礙有，真空不異色，忽拈拄杖卓一下云：且道是有是不有，是色是不色，若是劄利，粥僧和水喫乳，其或踟躕，拄杖穿卻鼻孔，又卓一下。

奉謝大王上將入山下百味佳齋，伸台山供養上堂僧問：日月輪邊氣象高，魚龍穴下蟠根固，師云：好，進云：上將忽入山下，來奇齋，供養大衆，未審和尚說什麼法得報此恩，師云：風行草偃，進云：怎麼則蘋葉風涼，桂花露香，師云：好也，與麼去，進云：只如達磨未來已前，還有這箇消息也無，師云：銀山鐵壁，進云：來後又如何，師云：鐵壁銀山，進云：來與未來且置，如何是這箇消息，師云：鐵壁鐵壁，銀山銀山，進云：學人今日小出大遇，便禮拜，師云：撒手那邊去。

乃橫拄杖云：大士三十二應身，天大將軍最是真，摧蕩諸障與慶快，提持百福救窮貧，大衆要會者，箇大機大用麼，卓拄杖云：看看巍巍堂堂，煒煒煌煌，四海九州，威風凜凜。

材木採用歸謝普請並善源雲和尚上堂，拈拄杖云：萬仞峰前千仞底，者邊那邊擇良材，斧頭用得諸人力，集此大成相呼回，正與麼時作麼生，卓拄杖一下云：行到水窮處，坐看雲起時。上堂：葛藤拄杖，舉肇法師云：近而不可見者物性耳，卓拄杖云：者箇是寶山拄杖子，阿那箇是物性，又卓拄杖云：一槌兩當，蓋覆將來。

宗持禪尼逆修拈香，當陽突出，迥脫根塵，薰天炙地，舉體全真，乃佛乃祖，由佗出氣，粥僧巴鼻，從此方親，況是宗持大姊，借山僧手拈出，等閑一見便見，自然一得永得，感生生正果，結世世正因，馥郁香風清徧界，靄然和氣恰如春。

除夜小參，年窮歲盡，黑漆桶裏盛墨汁，交頭結尾，半夜烏雞飛上天，所以師僧家，自從空劫已

前威音那畔，一日日未嘗逐，一日一時時未嘗隨，一時墻壁瓦礫，露柱燈籠，背後面前，真珠爛爛，雖然如是，今夜與諸人分歲，其中爲國一句作麼生，擊拂子云：村裏盡好驅儂，來年定是熟年。

復舉香林因僧問：萬頃荒田，是誰爲主，林云：看看臘月盡，師云：山僧不然，若有人發此問，便答佗道：昨日相見人，忽問是何人，劈口便擲。

正旦上堂，僧問：年年是好年，日日是好日，正與麼時，請師祝，聖，師云：萬年松下有茯苓，進云：怎麼則萬民樂業，唱謳歌，師云：好音在耳，人皆聞，進云：記得僧問古德，新年頭還有佛法也無，意在那裏，師云：舌頭無骨，進云：德云：元正啓祚，萬物咸新的當也無，師云：藕絲孔裏騎大鵬，進云：只如古人祇對如何辨別去，師云：風暖鳥聲碎，進云：一句了然超百億，師云：富嫌千口少，進云：非但學人，四衆咸霑恩，便禮拜，師云：也何妨。

乃云：今朝大年朝，東廊下相賀，西廊下相賀，喚作佛法底，拂子與佗點頭，喚作世法底，拄杖與他點頭，且道：諸人孰與阿那箇點頭，若於此會得，便解山僧適來道箇箇道體，起居萬福。

二月旦，爲出材木勸下大衆上堂，梅腮柳面吐香鏡，榮春山春水，湛綠疊藍，衲子清興，時哉時哉，許爾始隨芳草去，又須後逐落花回，忽回來時如何，箇箇萬福萬福，侍者急手點將箇好茶來。

佛生日上堂，僧問：青春已去，朱夏初臨，瞿曇今日降生，此是現成底，請師別舉揚，師云：鐵丸無縫罅，進云：二月十五不會滅，因甚鶴林中，示雙趺，師云：天上星地下木，僧云：四月八日不會生，

爲甚九龍吐水灌沐金軀。師云：九九八十一。僧云：指天指地，道天天下，唯我獨尊。師云：芍藥花開菩薩面。僧云：雲門云：我當時若見一棒打殺與狗子喫，卻意旨作麼生。師云：因邪打正。僧云：雪竇云：我若見便與掀倒禪床。意在那裏。師云：把手相共上高峯。僧云：二大老用處，是同是別。師云：南山起雲，北山下雨。僧云：上來一一蒙指示，向上宗乘事又如何。師便喝。乃拈拄杖卓一下云：淨法界身，撐天拄地，本無出沒。種瓜得瓜，便恁麼領去，報恩有分。其如未然。二龍溫涼水。

結夏小參。僧問：綠暗紅稀，孟夏漸熱，應節一句，願開提唱。師云：薰風自南來，殿閣生微涼。僧云：禁足安居，誰似我掛角羚羊，不露蹤。師云：有路可上，高人更行。僧云：朝到西天，暮歸東土，是什麼人分上事。師云：是安居底人分上事。僧云：恁麼則一聲黃鳥，青山外，占斷風光。作主人。師云：那裏得與麼地。僧云：松源有三句，許咨參也無。師云：何妨。問將來。僧云：大力量人，因甚擡腳不起。師云：草鞋和露重。僧云：開口因甚不在舌頭上。師云：不見牙齒一具骨。僧云：明眼衲僧，因甚腳跟下紅絲線不斷。師云：腳頭也。僧云：學人今夜小出大遇，便禮拜。師云：向人作麼生舉。乃云：西天嚴規，東土嚴令，齊要知有箇劄利漢。大坐當軒底事，克得此事，三月安居，九旬禁足，天覆不得，地載不能，日用四威儀中，全坐聲色堆上，專做聲色堆主宰。箇中有領覽，都墮魔界，所以道：以大圓覺爲我伽藍，身心安居平等性智，警喜警瞋，無理會。新羅夜半日頭明，雖然如是，諸人切忌刺腦入膠盆。何故。良久云：綠樹陰濃夏日長，樓臺倒影入池塘。復舉德山小參不答話，有問話者三十棒公案。師拈云：盡謂開口卽錯，動舌卽乖，殊不知九曲

黃河混底流。

次日上堂。僧問：西天舊令，東土共遵，諸方依樣畫葫蘆，龍寶門下標格作麼生。師云：莫孤負山僧。進云：綠水青山，元來安居，露柱燈籠，終日禁足，衲僧家因甚別立規矩。師云：嚴師出好弟子。進云：恁麼則行到水窮處，坐看雲起時。師云：更須子細。進云：記得乾峰示衆云：法身有三種病，二種光，須是一一透得，始解穩坐地。意在那裏。師云：細想會裏有人。進云：雲門使出衆云：庵內人爲什麼不見庵外事。意旨作麼生。師云：果然。進云：峰呵呵大笑。又如何。師云：藏身無路。進云：門云：猶是學人疑處在，如何委悉。師云：有爭臣則君不落不義。進云：古人底且置，作麼生是正當今日法要。師云：水到渠成。

乃卓拄杖云：二千年前有此制，四聖六凡都不出者箇。二千年後攀其例，五湖衲子大家在者裏。又卓拄杖云：出與不出，在與不在，且喜靜處婆娑訶。

五月上堂。僧問：松竹陰陰夏日長，好箇時節，請師提唱。師云：三十年後莫錯商量。進云：恁麼則黃鶴樓中吹玉管，江城五月落梅花。師云：人無遠慮，必有近憂。進云：只變大地作黃金。攬長河爲酥酪，則不無和尚且道，如何是向上宗乘事。師云：南斗七，北斗八。進云：向下又作麼生。師云：金香爐下鐵崑崙。進云：畢竟如何領略去。師云：阿彌全舌去亦可。

乃舉鼓山問新羅僧上山來作什麼。對云：禮拜和尚。鼓山云：盡世不標，向什麼處禮拜。對云：向不標處禮。鼓山云：念爾是新羅人，放爾二十棒。師云：者僧若於盡世不標，向什麼處禮。作摸著左右之勢，拜得鼓山。鼓山若於向不標處禮，亞身合掌，接得者僧，二俱莽鹵。爾師僧家，有什麼

救處以拂子擊禪床一下便下座。

端午上堂僧問今朝正是端午節昔日善財採藥來憑據如何領會師云放過一著進云將逢佳辰底莫不盡大地是藥麼師云何必進云恁麼則薰風自南來殿閣生微涼師云可謂諸侯避道進云記得文殊當年出女子定不得意旨作麼生師云雲在嶺頭閑不徹進云下方罔明爲甚却出得師云水流湖底太忙生進云文殊爲無神力罔明爲有神力師云釣魚船上謝三郎進云不行尊貴路爭踏上頭關便禮拜師云且看腳下

乃云強不用切菖蒲剛不要掛靈符祇僧家別在長處消殞盡天下妖怪去卓拄杖云頭長三尺知是誰相對無語獨足立

上堂僧問綠樹布陰濃薔薇吐晚香正好看雲亭下避暑處賞佳景句請師提唱師云閣浮樹下笑呵呵進云如無寒暑田地如何踏著師云墮坑落壑進云恁麼則處處綠楊堪繫馬師云蹉過也不少進云記得古人道大用現前不存軌則如何是大用現前底時節師云勘破了也進云與麼則可謂隨處作主立處皆真師云雪上加霜進云學人今日親聞法要如何保任師云踈田不貯水

乃舉趙州因僧問如何是趙州州云東門南門西門北門僧云不問這箇州云備問趙州師云山僧不然若有問如何是趙州只向他道石橋度來也未道不問這箇便道待下山去腋裏汗出且道與古人道底那箇親那箇踈請各辨別看

半夏上堂僧問山連嵩嶺地近洛川一機一境無不勝槩不涉唇吻如何通津師云心不負人

面無慙色進云九句已過半諸人自知時當頭與麼時節學人如何領略師云且過者邊進云恁麼則杲日麗天清風匝地師云放下著進云僧問智門蓮花未出水時如何門云蓮花此意如何師云風吹不入進云僧云出水後如何門云荷葉又作麼生師云水洒不著進云蓮花出水與未出水相去多少師云秦甸幾人蹈著

乃云半夏已前我爲諸人隱隱而彌露半夏已後我爲諸人顯顯而不露正當今日半夏不隱不顯我爲諸人說破卓拄杖一下云六月已熱五穀好熟

寺莊等賜公據上堂拈拄杖云自家田地觸處全彰公驗一回得入手百劫千生不曾荒正與麼時作麼生卓拄杖云皇風與祖風鎮扇帝道與佛道退昌又卓一下便下座

重九上堂茱萸帶露金菊發花大用現前不存軌則諸禪德若識箇中意南山東籬一家家二月旦上堂拈拄杖云雪霽千山綠正濃梅腮柳面轉縱容爲君擬報箇中意幽鳥喃喃入亂峰卓拄杖一下

佛涅槃上堂僧問滿街楊柳綠絲煙畫出長安二月天應節一句請師提唱師云寥寥天地間獨立望何極僧云瞿曇今日入般涅槃未審向什麼處去師云向人人鼻孔裏去還覺麼僧云恁麼則哭底便是笑底便是師云將謂爾是不領話僧云若謂我滅度非我弟子若謂我不滅度亦非我弟子意旨作麼生師云黃河點魚僧云不因今日節餘日實難逢便禮拜師云向後向人莫錯舉

乃橫按拄杖云雙趺出柳事難親有也累人無累人瞻部州中休不得年年二月費萍蘋喝一

喝擲下拄杖下座。

龍翔正眼二塔主至上堂寶山有一句子只許人聽不許人舉已是許人聽因甚不許人舉擊拂子云辨龍蛇眼俱正擒虎兒機也全。

上堂卓拄杖云百億須彌百億日月恒沙諸佛恒沙國土盡在拄杖頭上諸人見得不妨一生參學事了畢其如未然開眼瞌睡又卓一下下座。

四月旦上堂拈拄杖云此事無去來因甚昨日春去今朝夏來迄乎道物性住一世肇公也是盲龜入空谷禪僧家牙如劍樹口似血盆到者裏作麼生道著若無人道著以拄杖畫一畫云喜。

結夏上堂僧問今日是結制結底是何物師云猛虎當路坐僧云恁麼則官池水深看雲亭高師云吾常於此切僧云只將老師兩句子布施七十員禪佛師云只有阿彌吞吐不下。

乃云是箇水牯牛山邊水邊賴自無事今日無端逗入欄裏鼻貫索頭全在別人手裏要行也不能要臥也不能才擬恣情痛加鞭策道叱者畜生嗚啞嗚只可自知擊拂子一下。

上堂卓拄杖云人情若似者箇孔丘打殺顏回道情若似者箇遠磨失却少林便下座。

端午上堂僧問文殊小男爲誰要藥師云古佛廟前自顛蹶進云善哉童子採來何草師云無根滿地無葉普天進云父子得便處千古遭檢點師云備有老成之勢。

乃云端午天中節不用咒土書壁只以一神咒消殞一切妖怪除却佛病祖病且道是那箇神咒便振威一喝。

上堂舉三祖云一卽一切一切卽一驀拈拄杖云三祖大師在非非想天擲下一箇木楔子換却諸人眼睛忽爾下來旋轉舞踏恰如獨樂而見諸人不見不知高聲唱云龜毛長三尺兔角長七尺卓拄杖一下云參。

上堂橫按拄杖舉芭蕉示衆云備有拄杖子我與爾拄杖子備無拄杖子我奪爾拄杖子拈云芭蕉與奪不無只是擒縱未在山僧尋常向皴皴鱗鱗地要出人猶不救得一半在豈況吐出山形邊事太遠之遠矣卓拄杖一下。

解夏上堂僧問三通鼓罷四衆臨筵好箇時節請聞舉揚師云崑崙嚼生鐵進云九旬期已滿稍僧脚頭闊正當恁麼時如何是自恣一句師云柳栗橫擔不顧人直入千峰萬峰去進云記得洞山云秋初夏末直須向萬里無寸草處去意旨如何師云步步清風起進云石霜云出門便是草又作麼生師云草鞋和露重進云和尚恁麼答話爲是與古人出氣爲復與古人雪屈師云平蕪盡處是青山進云與麼則一言無別路萬世盡同歸師云傍觀有分進云只將老師四五轉話甘當九夏賞勞之功便禮拜師云可謂南北東西皆可。

乃舉翠巖夏末示徒一夏已來爲兄弟東說西話看翠巖眉毛在麼保福云作賊人心虛長慶云生也雲門云關師云三大老俱出隻手扶樹翠嵩家風龍寶今夏不爲兄弟說話看眉毛如箭筈長數寸只是缺人覷破雖然如是落霞與孤鶩齊飛秋水共長天一色。

八月旦上堂拈拄杖云向上一路千聖不傳八月初一龍寶山前卓拄杖下座。

中秋上堂舉長沙與仰山翫月次仰山指月云人人盡有這箇只是用不得長沙云恰倩備用

那山云：備試用看長沙一踏踏倒，仰山起來云：備大似箇大蟲。師云：仰山起來道，果然用不得。見盡長沙擡脚不起，雖然恁麼，月到中秋滿，風從八月涼，擊拂子一下。

九月旦因：太上法皇惠種種剪采上堂，舉須菩提巖中晏坐，帝釋而花話。師云：天帝釋雨花動地，與太上法皇惠此花，是同是別？若謂別，眼裏无筋；若謂同，其意作麼生？良久云：住住，秋色登平楓葉序，西風轉冷草花天，擊拂子一下。

重陽上堂：採菊東籬下，悠然見南山。靖節阿轆轤處，作衲僧一重關。且道：他是俗漢陋韻，爲甚作衲僧一重關？喝一喝云：參。

上堂：山僧卽今在須彌頂上說法，諸人也是在鉢輪峰頂聽法，坐底立底，賓主歷然，還會麼？會得盡十方界乾坤大地，在諸人眼睫上放大光明，其如未然。樹頂老山顏醉，擊拂子一下。

開爐上堂：舉趙州示衆云：三十年前，南方火爐頭有个无賓主話，直至而今，無人舉著。師云：趙老面皮厚三寸，要須炙手助熱，其如爐下似春何？直饒而今有人舉著，方知三个枯柴品字燒上堂，一句去一句來，慶快備一平生，忽然傾湫倒岳，入那裏出那裏？昨夜三更失却牛，天曉起來失却火，卓拄杖一下。

上堂：舉盤山云：向上一路千聖不傳，慈明云：向上一路千聖不然。師云：二大老只解鬼爭漆桶，山僧便道：向上一路千聖齊行。

大德寺語錄終

頌古

淨居於窻牖中叉手

玉函鑑月不期秋，夜靜方知波浪別。從此相逢路似迷，崔嵬檀特硬如鐵。

爾時迦葉告諸比丘：佛已茶毗，金剛舍利非我等事，我等宜當結集正法，無令斷絕。列三折半信何通，回首白雲眼力空。鷄足峰前未歸去，多羅葉上動悲風。

行思禪師問希遷云：汝什麼處來？云：曹谿來。思乃舉佛子云：曹谿還有這箇麼？云：非。但曹谿西天亦無，思云：子莫曾到西天否？云：若到卽有也。思云：未在，更道。云：和尚也須道取一半，莫全靠學人。思云：不辭向汝道，恐已後無人承當。

明暗雙雙絕，對揚愁人未說斷。愁腸金毛獅子解踞地，冤苦蒼天又一場。

僧問：大隨劫火洞然大千俱壞，未審這箇壞不壞？隨云：壞。僧云：與麼則隨佗去也。隨云：隨佗去。

劫火隨佗喚不回，遠離西蜀去還來。大千摠等者僧眼，古佛光中笑口開。

百丈懷海：一日謂衆云：佛法不是小事，老僧昔被馬大師一喝，直得三日耳聾眼暗。黃檗開舉吐舌，丈云：子已後莫承嗣馬祖。衆云：不然。今日因師舉得見馬祖大機大用，然且不識馬祖若嗣馬祖，喪我兒孫。丈云：如是如是。

一喝耳聾天地黑，當機吐舌生荆棘，承虛接響意難論，兩兩三三好動着。

保福長慶遊山次，福以手指云：「只這裏便是妙峰頂。」慶云：「是即是，可惜許。」雪竇著語云：「今日共這漢遊山圖，什麼復云，百千年後不道無，只是少。」後舉似鏡清，清云：「若不，是孫公便見，獨體徧野。」

妙峰孤頂難人到，只看白雲飛又歸，松檜蒼蒼歷幾歲，莫教巖畔鳥聲稀。

僧問巴陵：「如何是提婆宗？」巴陵云：「銀椀裏盛雪。」

提婆宗難分節，誰道銀椀裏盛雪，大地山河一等風，人間天上蕭洒絕。

盤山垂語云：「三界無法，何處求心。」

千峰雨霽露光冷，月落松根蘿屋前，擬寫等閑此時意，一溪雲鎖水潺潺。

巖頭問僧：「什麼處來？」僧云：「西京來。」頭云：「黃巢過後，還收得劍麼？」僧云：「收得。」頭引頸近前云：「因僧云：『師頭落也。』頭呵呵大笑。僧後到雪峰，峰問：『什麼處來？』僧云：『巖頭來。』峰云：『有何言句？』僧舉前話。雪峯打三十棒出。」

黃巢過後劍難收，提去提來傷手憂，不是山藤三十下，梵天餘血五湖流。

雲門垂語云：「古佛與露柱相交，是第幾機？」自代云：「南山起雲，北山下雨。」

古佛光中第幾機，南山雲外少人知，千溪日晚樵歌路，歸去來兮來去歸。

仰山問三聖：「汝名什麼？」聖云：「慧寂。」山云：「慧寂是我。」聖云：「我名慧然。」仰山呵呵大笑。師著語云：「什麼處去也。」

煦日影中雪霽春，梅腮柳面鬪芳新，詩緣風興無限意，獨許苦吟野外人。

雲門垂語云：「乾坤之內，宇宙之間，中有一寶，祕在形山，拈燈籠向佛殿裏，將三門來，燈籠上。」

宇宙乾坤同一寶，燈籠佛殿形山中，青松雪霽岩勢晚，寒月風清溪畔空。

禾山垂語云：「習學謂之聞，絕學謂之隣，過此二者是爲真過。」僧出問：「如何是真過？」山云：「解打鼓問，如何是真諦？」山云：「解打鼓問，即心即佛，即不問，如何是非心非佛？」山云：「解打鼓問，向上人來，如何接？」山云：「解打鼓。」

天上星地下木，觀機那肯涉離微，明明歷世無別物，猛烈身心更不疑。

仰山問僧：「近離甚處？」僧云：「廬山。」仰山云：「曾遊五老峰麼？」僧云：「不曾遊。」仰山云：「闍梨不會遊。」山云：「此語皆爲慈悲之故，有落草之談。」

看看落草不遊山，的信何通千里關，敲唱當鋒見禪悅，一圓空裏二三三。

外道問佛：「不問有言，不問無言，世尊良久，外道讚歎云：『世尊大慈大悲，開我迷雲，令我得入。』外道去後，阿難問佛云：『外道有何所證，而言得入？』佛云：『如世良馬見鞭影而行。』」

不問有言異道事，鐵山當面勢崔嵬，孤峰雲散千溪月，鞭影追風直下來。

魯祖山寶雲禪師，因僧問：「如何是言不言？」雲云：「汝口在什麼處？」僧云：「無口。」雲云：「將什麼喫飯？」僧無對。洞山代云：「他不飢喫什麼飯。」

超然一句錯流布，強弄爪牙未作家。箭後路頭端的別，誰知高處有風波。

鴻山因仰山問，如何是西來意。鴻云：大好燈籠。仰云：莫只這箇便是麼。鴻云：這箇是什麼。仰云：大好燈籠。鴻云：果然不識。

機意交馳何處去，陣雲千里鎖重關。大家問著不相識，堪笑古風匝地寒。

江州龍雲臺禪師，因僧問：如何是祖師西來意。臺云：老僧昨夜欄裏失却牛。昨夜欄裏失却牛，不風流處也風流。枯禪無限喚得作，祖意西來特地辭。

南泉一日東西兩堂爭貓兒，南泉見遂提起云：道得卽不斬，衆無對。南泉斬却貓兒，爲兩段。南泉復舉前話問趙州，州便脫草鞋於頭上，戴出。泉云：子若在，恰救得貓兒。兩堂爭處南泉斷，王老放時趙老收。頭上草鞋多少重，白雲流水共悠悠。

僧伽難提知衆生慢，乃曰：世尊在日世界平正，無有丘陵。江河溝洫，水悉甘美，草木滋茂，國土豐盈，無八苦行，十善自雙樹示滅，八百餘年，世界丘墟，樹木枯悴，人無至信，正念輕微，不信真如，唯愛神力，言訖以右手漸展入地，至金剛輪際，取甘露水，以琉璃器持至會所，大衆見之，卽時欽慕，悔過作禮。師著語云：拈得也未。

日暮雪晴空眼界，清風況是草離離。松根石上與誰說，月到中峰猶未歸。

迦耶舍多尊者，領徒到一舍，舍主鳩摩羅多問云：是何徒衆。尊者云：是佛弟子。羅多問佛號，心神悚然，卽時閉戶。尊者良久，自扣其門。羅多云：此舍無人。尊者云：答無者誰。羅多聞語，知是異人，遽開關延接。

踏斷春風千萬峰，蒼苔青蘚鎖靈蹤。落花啼鳥夕陽裏，雲合雲開晚寺鐘。

梵摩淨德云：弟子衰老不能事師，願捨次子以令出家。

退已進人無可比，百千年後有誰知。室羅城畔金水上，佛放光動地時。

不如蜜多聞偈再啓祖云：法衣宜可傳授。祖云：此衣爲難故，假以證明。汝身無難，何假其衣。蜜多聞語作禮而退。

月高松頂孤光冷，風弄殘雲隨意寬。四海涓涓百川落，琉璃殿上夜遊關。

玄沙示衆云：諸方老宿盡道接物利生，忽遇三種病人，作麼生接。患盲者拈槌豎拂，它又不見，患聾者語言三昧，它又不聞，患瘧者教伊說，又說不得，且作麼生接。若接此人不得，佛法無靈驗。僧請益雲門，門云：汝禮拜著，僧禮拜起，門以拄杖拄僧退後，門云：汝不是患盲，復喚近前來。僧近前，門云：汝不是患聾，乃云：還會麼。僧云：不會。門云：汝不是患瘧，僧於此有省。

盲聾瘡癩誰能接，退後近前指下明。多向珍候沉動處，不知三種一毛病。

翠岩夏末示衆云：一夏已來，與兄弟東說西話，看翠岩眉毛在麼。保福云：作賊人心虛。長慶云：生也。雲門云：關。

偷眼才開先下手，眉毛生也月方明。雲門關子萬重鎖，直至而今絕夜行。

鹽官一日喚侍者云：與我將犀牛扇子來。侍者云：扇子破了也。官云：扇子既破，還我犀牛兒來。侍者無對。投子云：不辭將出，恐頭角不全。雪竇拈云：我要不全底頭角，石

霜云若還和尙卽無也。雪竇拈云：犀牛兒猶在資福畫一圓相於中書一牛字。雪竇拈云：適來爲什麼不將出。保福云：和尙年尊別請人好。雪竇拈云：可惜勞而無功。犀牛扇子清風起，坐斷清風出氣難。破了當年重用去，和烟搭在玉欄干。

雪峰住庵時，有兩僧來禮拜。峰見來以手托庵門，放身出云：是什麼。僧亦云：是什麼。峰低頭歸庵。僧後到岩頭。頭問：什麼處來。僧云：嶺南來。頭云：曾到雪峰麼。僧云：曾到。頭云：有何言句。僧舉前話。頭云：佗道什麼。僧云：佗無語。低頭歸庵。頭云：噫，我當初悔不向佗道。末後句若向伊道。末後句：天下人不奈雪老何。僧至夏末再舉前話。請益頭云：何不早問。僧云：未敢容易。頭云：雪峯雖與我同條生，不與我同條死。要識末後句，只這是。

同條生處不同死，拈却明頭收暗頭。從此放身歸庵去，至今簾外鬼神愁。

馮山五峯雲岩同侍立百丈。百丈問馮山：併卻咽喉唇吻作麼生道。馮山云：却請和尙道。丈云：我不辭向汝道，恐已後喪我兒孫。復問五峰。峰云：和尙也須併却。丈云：無人處斫額望汝。又問雲岩。岩云：和尙有也未。丈云：喪我兒孫。

東街柳色和烟翠，西巷桃花相映紅。幾度春風晚鐘裏，遊人著意到寥空。

南泉參百丈涅槃和尙。丈問：從上諸聖還有不爲人說底法麼。泉云：有。丈云：作麼生是不爲人說底法。泉云：不是心，不是佛，不是物。丈云：說了也。泉云：某甲只與麼和尙作麼生。丈云：我又不是大善知識，爭知有說不說。泉云：某甲不會。丈云：我太煞爲爾

說了也。

從上爲人事，不容老胡知。寒雲抱幽石，霜月照清池。

大隨問僧：什麼處去。僧云：禮普賢去。隨舉拂子云：文殊普賢，總在這裏。僧作圓相，拋向背後，乃展兩手。隨云：侍者取一帖茶與這僧。

遠聞近見一賓主，半暗半明孰與提。若是箇中全用去，普賢特地逐亡羊。

三角總印云：若論此事，眨上眉毛早已蹉過也。麻谷便問：眨上眉毛卽不問，如何是此事。角云：蹉過也。谷乃掀禪床角打之。谷無語。

地獄天堂阿剌刺，機關直下沒應把。姦生多變卻難得，雙放雙收過新羅。

維摩詰問文殊師利：何等是菩薩入不二法門。文殊師利云：如我意者，於一切法無言無說無示無識。離諸問答，是爲入不二法門。代維摩打出。於是文殊師利問維摩詰：我等各自說已。仁者當說，何等是菩薩入不二法門。維摩默然。代文殊乃喝。

不二法門何再說，二千三萬一齊來。當年妙吉親用去，扶得病翁使口開。

僧問趙州：初生孩子，還具六識也無。州云：急水上打毬子。僧復問：投子急水上打毬子，意旨如何。子云：念念不停流。

六識問來難識破，趙州老大只麼時。可憐同道實頭漢，道道念念不停流。

京兆米和尙因有老宿問：月中斷井索，時人喚作蛇。未審七師見佛喚作什麼。米云：若有佛見卽同衆生。宿云：千年桃核，師別米和尙。葛口一拳。

斷井索子，月中爲蛇，衝氣吐毒，跳沫馳波，生兮佛兮，齊難話，多劫潛微歸滅磨，不滅磨，紫金光聚照山河。

雲門云：古人道，人人盡有光明在，看時不見，暗昏昏，作麼生是光明？代云：厨庫三門，又云：好事不如無。

九天雲淨衆星微，風與何餘一句詩，今夜與君無事去，時人喚作那斯祈。三門厨庫是光明，見不見時難辨別，好事元來不如無，烏鷄半夜啄生鐵。

馬大師不安，院主問和尚近日尊候如何，大師云：日面佛，月面佛。

日面佛，面佛，三三兩兩太無端，二十年來苦辛客，照絕精微見大難。

僧問雲門：如何是超佛越祖之談？門云：胡餅。

觀面胡餅難下口，摩斯吒徒入瀾中，者回休吐黑雲霧，寥廓天邊無白虹。

百丈惟政禪師，一日謂衆云：汝爲我開田，我爲汝說大義。僧衆開田，竟請和尚說大義，百丈便展開兩手。

閃電激怒雷馳，眼裏耳裏箇觀機，昨夜三山三跳後，北辰鬼谷作擬議，作擬議，七佛祖師曾未知。

平田普岸禪師，因有僧到參，平田打一拄杖，其僧近前把住拄杖，平田云：老僧適來造次，僧卻打平田一拄杖，平田云：作家作家，僧禮拜，平田把住云：是闍梨造次，僧大笑，平田云：這箇師僧，今日大敗也。

一向一背不易親，互換韜略鼓旗別，干將劍未斬甲釜，夏服箭何穿七札，鬼哭神悲崖崩石裂，還顛蹶，師僧今日大敗缺。

大慈山寰中禪師住庵時，南泉至問：如何是庵中主？寰云：蒼天蒼天，泉云：蒼天且置，如何是庵中主？寰云：會即便會，莫切切，南泉拂袖而出。

庵中主見還難，句裏藏身太無端，偷眼暫時休也未，夜深誰共過關山。

僧問藥山：平田淺草塵鹿成群，如何射得塵中塵？山云：看箭，僧放身便倒，山云：侍者拖出這死漢，僧便走，山云：弄泥團漢，有什麼限，雪竇拈云：三步雖活，五步須死。

塵中塵走得三步，五步未堪趁虎兒，趁虎兒，獵人徒莫覓坤維。

慧忠國師與紫璘供奉論議，既升座，供奉云：請師立義，某甲破，忠云：立義竟，供奉云：是什麼義，忠云：果然不見，非公境界，便下座。

祖風迥振機輪轉，學海瀾忙自沒頭，大鵬一舉九萬里，離邊燕雀空啾啾。

僧問洞山：如何是佛？山云：麻三斤。

木落岩崗鋒骨冷，月斜禪石曉難開，寒雲伴來閑不徹，飛瀑從他起忽雷。

六祖云：不思善，不思惡，正當恁麼時，還明上座本來面目來。五步款行三步疾，莫教正眼頂門開，悠悠不見痕，嶺路腳後腳前歸去來。

霍山和尚，聞祕魔岩和尚，凡有僧到禮拜，以木叉叉著，霍山一日遂往訪之，才見不禮拜，直入祕魔懷裏，祕魔拊霍山背三下，霍山起拍手云：此老一千里地，賺我來，使

回。

當機提觀面疾，取次用來若爲宗，箇箇一千應走卻，草鞋跟斷起清風。

梁武帝問達磨大師，如何是聖諦第一義，磨云：廓然無聖，帝云：對朕者誰，磨云：不識廓然不識有幾人，古路橫行鎖嶺烟，從此少林深雪裏，斷臂刀下別疎親。

風穴垂語云：若立一塵，家國興盛，野老嘸覺，若不立一塵，家國喪亡，野老謳歌雪竇，拈拄杖云：還有同生同死底衲僧麼。

嘸覺謳歌在一塵，同生同死憑何人，紅霞碧靄籠高低，芳草野花一樣春。

南嶽懷讓遣一僧到馬祖處去云：但問作麼生，伊道底，言語記將來，僧去一如懷讓旨，回謂懷讓云：馬祖云：自從胡亂後三十年，不曾闕鹽醬，讓然之。

朝三千暮八百，箇箇放過一著，生鐵如和土塊，大冶可解拈却。

頌古終

拈古

舉臨濟上堂云：一人在孤峯頂上，無出身之路，一人在十字街頭，亦無向背，那箇在前，那箇在後，不作維摩詰，不作傅大士，珍重，師云：將謂龍頭蛇尾，元來只是蛇尾龍頭，雖然如是，深領指示。

舉欽山同岩頭雪峰到德山，乃問：天皇也，恁麼道，龍潭也，恁麼道，未審德山作麼生道，德山云：汝試舉，天皇龍潭底看，欽山擬議，德山便打，欽山歸延壽堂云：是則是，打我太煞，岩頭云：偏與麼，他後莫道見德山，師云：可惜許。

舉雲門上堂云：遇人卽鼻孔遼天，師云：堪笑這老漢，赤脚上刀山，披毛入火聚，其爭奈解，笑底也少。

舉僧問雲門：如何是透法身句，門云：北斗裏藏身，師云：衆生若非法身卽非衆生，法身若非法身亦非法身，透之一字因誰致得，直饒是北斗裏藏身，可謂修羅三目似伊字。

舉雪竇示衆云：譬若二龍爭珠，有爪牙者不得，或有衲僧問：既有爪牙者爲什麼不得，請大衆爲雪竇下一轉語，師云：其貧不學儉，富不學奢，此是俗漢之陋韻，卻可謂知言也，且問諸人：二龍爪牙，孰與雪竇爪牙，他既爭珠不得之，這老爭箇什麼而不得，請各下一點語。

舉趙州問投子：大死底人，卻活時如何，投子云：不許夜行，投明須到，師云：趙州移步不移身，投

子移身不移步，雖然承虛接響，爭奈他後舉得者少。

舉臨濟令侍者傳語德山，侍云：德山要打人，濟云：汝但去，待伊拈棒接住，與一送，管取不打。爾侍依所教，果然不打，歸舉似臨濟，濟云：我從來疑著者，漢師云：蓋是作者動止，神鬼難測，一人向海枯終見底處，坐斷千聖之頂顛，一人向人死不知心處，瞎却衲子之眼睛，可貴可賤。舉雪竇一日問僧，爾浴未，僧云：某甲此生不浴，竇云：爾不浴，圖箇什麼，僧云：今日被和尚勘破，竇云：賊不打貧兒家，師拈云：雪竇老漢才兼文武，出將入相，今日遭拈出一口鉛刀子，高豎降旗，諸人要識雪竇麼，一種是聲無，無意有，堪聽有，不堪聽。

舉風穴因僧問：如何是清涼山中主，穴云：一句不遑，無著問：迄今猶作野盤僧，師云：古人恁麼答，褒清涼主，貶清涼主，若是道褒，因什麼有不遑，無著問之句，若也道貶，他有箇什麼過，道不褒不貶，風穴何必有恁麼語話，無端觸著獅子哮吼。

舉臺山路上有一婆子接待，凡有僧問：臺山路甚麼去，婆云：驀直去，僧才去，婆云：好箇師僧，又與麼去，如是既久，游僧傳到趙州，州開得云：待我去勘破他，遂去問：臺山路，婆隨例云：驀直去，州才行，婆又云：好箇師僧，又與麼去，州回云：我勘破婆子了也，師云：盡謂：日下挑孤燈，殊不知失錢遭罪。

舉臨濟上堂云：有一人論劫在途中，不離家舍，有一人離家舍不在途中，那箇合受人天供養，便下座，師云：這老漢，威容嚴肅，衲子到者無不失，其舉措，大家寢默，俛仰過日，不見道衆人之唯唯，不如一士之諤諤，若是人天供養，要擇取一人。

拈古終

大燈國師行狀

大燈國師唱臨濟宗旨於橫嶽，萬壽建長也，幾乎四十年矣，其間振衣者不知幾何，師其一也，師諱妙超，宗峰其號也，生於播州，揖西縣紀氏子，父母禱於本州書寫山如意輪觀音，母夢一僧手携白花開於五葉而與之，有妊，妊而後如寐而不寤，至其誕之時，熟睡而不知也，保母俄聞呱呱一聲，往而見之，未澡浴而肌體瑩潔，克岐克嶷，頂骨聳立，伏犀插額，目光射人，隨面前人能轉顏目，五歲時見人發刀於劊云：何爲而作也，云：貴圖快利，云：不快利處有快利，爾還知麼，其人罔測，師呵呵大笑，觸事以言折挫人，若比親族有諫而欲使住之者，拈棒便打，鄉黨稱爲神童矣，十有一歲而師事於書寫山戒信律師，每屏坐靜處，志厭俗塵，經書過目成誦，一日慨然云：假使究九流三藏，百家異道，書爭若入，不立文字，直指單傳，宗未剝染而發足，至京城并相州，參問諸尊宿，尊宿雖氣吞佛祖，底不敢嬰其鋒，謁建長老，問曰：路逢死蛇，莫打殺，無底籃子，盛將歸，意旨如何，老曰：放下着，者般底，直下便看取，師云：只如道直下便看取，如何，老擬議，師乃喝，造萬壽，問佛國禪師曰：佛法無多子，着衣喫飯，處即是，纔作恁麼理會，早是不是了也，國云：未知恁麼事，以前與而今如何區別，師云：區區別別，則不別，國云：試區別看，師指露柱云：喚者箇作露柱，則與昔時迥異，不喚者箇作露柱，則而今已別，國云：豈是佛法，師云：和尚好箇時節，國云：只與麼受用，與老僧別，師云：若見有和尚某甲，佗日悔去，國云：平生日用處，直

下道來看師云步步踏着毘盧頂言言勘破維摩詰次日又來問云昨日與今日請師辨別國云說什麼昨日直道今日事師云雲從龍風從虎國云雲未起風未來時如何師云天上天下唯我獨尊國云雲門云我當時若見一棒打殺與狗子喫貴圖天下太平如何師曰一口吞却了也國橫點頭曰此語不敢肯師乃喝國亦喝師又喝而出去國送出門曰我見多少學者未嘗逢如公俊底宜祝髮披衣棟梁吾道師翌日重參佛國國見來曰古人云大用現前不存軌則時如何師曰和尚未問以前已現前久矣國云在甚麼處師曰夜來狂風吹折門前一枝松國云如何是狂風師搖手中扇子國休去師云狂風豈不是扇子國大笑云纔見相似却也蹉過師於此服膺矣自歎曰人身難得佛法難遇遇賤則貴豈丈夫志遂落髮受具且夕留心於此事一夕坐僧堂聞僧隔壁誦百丈語云靈光獨耀迥絕根塵體露真常不拘文字驀然有省夜半扣門呈其見解國云既是真正見解也宜建法幢立宗旨厥後大應國師應詔自橫岳來京師館于韶光庵師在相州聞其手段辛辣趨于京徑詣其室問云學人遠遠來化下請師一接師云老來無力且坐喫茶師云恁麼用去只恐不肯國師云備是新到爭知這裏事師云千里同風豈不是君子國師云室中物色備試指出看師云七九六十三國師云無慚愧漢來處也不知師云謹謝老師以學人托上梵天國師云今日自領出去明日事備作麼生師云天際日上月下檻前山深水寒國師云一死不再活師便休國師便問五祖演示佛眼云牛過窓樞頭角四蹄全出尾巴因甚出不得備試下一轉語看師云曲心已露國師云如何是曲心師云拄天拄地國師大笑云與麼空過他日有悔三日後師下語曰抄卜聽虛聲國師云方得相

似自爾畫參暮請不敢退轉國師時臥疾經旬閉方丈戶止學者參問唯師見許參請國師云備是天然衲子也不是一兩生參學士國師承詔住京城萬壽師從之侍巾瓶國師示以翠岩眉毛在麼雲門云關之語也師下語云將錯就錯國師曰是則是備能於關字着精彩他時別須有生涯德治了未國師赴于相州住建長師乃參隨至彼未經十日因案上放在鎖子忽然打透關字到了圓融無際真實諦當大法現前處汗流浹背急趨方丈下語曰幾乎同路國師大愕云夜來夢見雲門入吾室備今日透關字備是雲門再來也師掩耳而出翌日呈二偈云一回透過雲關了南北東西活路通夕處朝遊沒寶主脚頭脚底起清風透過雲關無舊路青天白日在家山機輪通變難人到金色頭陀拱手還妙超胸懷如是若不孤負師意伏望賜一言近擬歸故都莫惜尊意以爲大幸耳國師援筆自書其後云備既明投暗合吾不如備吾宗到備大立去只是二十年長養使人知此證明矣爲妙超禪人書巨福山南浦紹明延慶戊申臘月國師示滅心喪既畢歸京而下居於洛水東衲子纔六七輩刻苦自厲至忘寒飢一夕夢有六人僧狀若羅漢居第一位僧云出世時至何不出也師云仁義盡從貧處斷僧卽領而以竹針挑破腦後云爲備扶出貧肉覺後頭腦尚痛焉不幾而去雲居徙居城北紫野不立佛殿唯樹法堂洗心子玄惠法印偕儒者九人奏於朝欲被禪宗禪宗若有奇特事吾儕豈敢諸儒徵詰諸方禪將無有當意者諸儒問師名而特來問云禪宗手段如何師云以虛僞示真實儒云聖人有虛言否師云有云既是聖人有甚虛言師云不見孟子有之象謂已殺舜了而入宮見舜在床琴舜見象來而喜豈不是虛僞其間激揚鏗鏘問答罷儒却問師云畢竟如何決

斷此義去也。師云：舜却殺象了也。諸儒皆稽顙而執弟子禮，就中洗心子入室參禪，造詣不淺，不勝崇信之至。施第宅而作大德方丈，今雲門庵是也。師氣宇如王人，少近傍數年，罕有爲檀越外護者。一旦萩原法皇聞其風而召入內，上遣中使告師而欲披道服而除一重坐席。談話師再三乞着袈裟而對坐，一一許之。帝勅云：佛法不思議，與王法對坐。師奏云：王法不思議，與佛法對坐。上動龍顏。一日，上勅問云：不與萬法爲侶者，是什麼人。師搖手中扇子云：皇風永扇。一日，面有勅云：朕欲以大德寺爲朝廷第一祈禱處，去。師受命而云：唯唯。後醍醐天皇卽位，如前所勅禮敬彌敦，寵恩益渥。帝召弟子僧入內，帝問云：不與萬法爲侶者，是什麼人。僧起而鞠躬，僧却奏云：不與萬法爲侶者，是什麼人。上以手中珪劃一劃云：這箇是。師上法語云：億劫相離而不相離，盡日相對而不相對，不審是什麼物。請聽。綸言：帝御筆書紙尾云：昨夜三更露柱，向和尚道了也。上書投機頌，賜師云：二十年來辛苦人，迎春不換舊風烟，着衣喫飯恁麼去，大地那曾有一塵。又書紙尾云：弟子有箇悟處，以何驗。朕師又書云：老僧恁麼驗。又御筆書古人節角，誦訛則語問師。師謹書紙奏對，不可勝計。勅洞院都護請師入禁掖，就五節所，俄設法座，請師陞座。面前懸百丈禪師頂相，帝亦於法座右側設御榻，側天聽。月卿雲客皆在於左右前後，拈香祝聖罷。師下法座，帝亦下御榻。師奏云：臣僧適來許多鄙俚言說，功歸何處。帝指百丈真云：百丈禪師爲證明。師云：此外更無有人作證明麼。帝便堅起拳頭，師云：與麼則南山朝北闕，夜夜見明星。帝瞬目而祇揖，師鞠躬而出去。皇情大悅，次日賜兼金縷帛等，兩朝特賜與禪大燈高照正燈國師號，所賜庄田，澁州長

森播州小宅三職方，并浦上，總州遠山方，御厨，信州伴野，紀州高家，仍見下官府。宣正中年中，南禪虛席，詔下請師再三，竟不赴。建武初下，綸旨云：大德禪寺宜處五山之一也。師却而不受之。又下詔云：宜相並南禪淨刹。萩原法皇後醍醐天皇親宸翰，有一流相承不許他門住。涇渭殊流，貽言於龍華。御製臨之刊之，見懸於塔額左右。萩原法皇自剪御髮，造小塔安於其中，被置在靈光塔左邊，蓋爲結與大燈。當今來世香火緣也。筑州太宰府都督司馬少卿上帖於師，請住橫岳山崇福禪寺，詣闕而以此事奏。帝堅留之，重敷奏，以師翁行道地。帝乃允之。纔作百日主而告退，迂歸于大德。垂三轉語示衆云：朝結眉夕交肩，我何似。露柱盡日往來，我因甚不動。若透得箇兩轉語，一生參學事了畢。建武丁丑冬，一夕召首座德禪開山徹翁和尚也。曰：我化緣已盡，衣法并本寺末寺住持職事，悉付與爾。克令子孫接續，使不斷絕。未幾得疾，臘月二十一日夜書，享首座相從久矣。悟徹既人皆知之，語而授焉。又示遺誠於諸弟子云：我行而後，置骨於丈室，莫別造塔。其有以也。夫汝等宜委悉。二十二日午時，欲端坐胡床示滅，而久有足疾，患不克結跏趺坐。首座出以此爲憾語，師自以兩手加左足於右股上，左膝傷折，血流霑衣。至今血痕尙存焉。乃書辭世偈云：截斷佛祖吹毛常磨，機輪轉處虛空咬牙，擲筆而逝。大鑑禪師時住南禪，有人傳誦遺偈，鑑聞而大驚云：不意日本有明眼宗師也。平生欲會面，而人皆沮止之。遺恨不少，欲赴茶毗，而緣有朝廷祈禱事，不能也。且遣僧人伺茶毗時，至馳歸告之，乃率大衆出山門頭，諷經，遣侍者二人贈瓣香，溫中和尚，正翁和尚也。瓣香至今爲寺什物。世壽五十六，僧臘三十四，門人悉遵遺誠，親承印可，嗣其法者，妙心關山

和尚、興德海岸、池寺白翁野州了翁、長福壁峰、金剛日山、貞庵主、可監寺、和典座、各據一方、接引學者、師平居與物爲春、無町畦也、迄于夫陸堂而秉拂子、開室而握竹篋、以機攻機、如張良躡足而封韓信、是賊知賊、若孫子滅竈而敗龐涓、阿脩羅王托動三有大城、金翅鳥王擊破娑竭羅海、談笑而起臨濟於已仆、叱咤而破雲門之機關、到于極處、穿山透石、壁鼻孔血淋漓、有語錄三帙、一帙雪竇錄、着語有自來矣、按夫雲門遺誠云、吾滅後、置吾於方丈中、上或賜塔額、祇懸於方丈、勿別營作、又遺表云、聯叨鳳詔、累對龍庭、繼奉頒宣、重疊慶賜、師示遺誠、准雲門故事、置骨於方丈、塔賜靈光、額沐兩朝、寵光優渥、嬰足疾患、大應雲門再誕語、絲髮不爽也、大應滅後、十有九白、嘉曆元年奉詔開大德法堂、一香供大應、二十年長養記、萌若合符節、入滅纔九十年矣、夫何門庭冷落、子孫寢微、所謂強弩之末勢、不能穿魯縞者歟、寔足歎息、應永三十三年龍集、丙午九月日、德禪遠孫小比丘禪興謹狀、梗槩以備大方尊宿名公銘塔之日云。

大燈國師語錄終

國譯大覺禪師坐禪論

解題

大覺禪師坐禪論一卷は、鎌倉建長寺の開山勅諭大覺禪師の撰述にして、禪師來朝後、參禪學道者のために坐禪の用心を説示せられたるものなり。外に大覺禪師の省行文、大慧禪師の發願文、中峰和尚の坐禪論等を添へたるは、後年本書の開版者が婆心の餘に出でたるものにして、之を彼此對照せば、其の得る所尠からざるべし。

傳を案するに、道隆、諱は蘭溪、宋の西蜀涪江の人なり。姓は冉氏、寧宗の嘉定六年に生る。年十三、甫めて成都の大慈寺に投じて薙髮し、諸方に遊歴して講席に侍す。後、江を下りて浙に入り、無準師範、癡絶道冲、北磻居簡等を歴訊し、終に陽山に抵つて無明惠性を訪ひ、東山の牛應機を過るの話を擧するを聞いて忽然大悟す。其の明州の天童山に在るや、偶々我が入宋僧の日本の教界を語りて、教法のみ蕃榮して禪宗未だ振はざるを嘆するを聞き、深く東渡の志を懷く。淳祐六年、我が國の商船來遠亭に在り、遊志頗る動き、遂に義翁、龍江等の數神足を率ゐて博多に着す、時に我が後醍醐天皇寛元四年にして、師年三十三歳なり。始め博多の圓覺寺に留まり、尋いで京都に上り、泉涌寺

の來迎院に寓す。時に鎌倉壽福寺に大歇了心のあるを聞いて、之に赴き、錫を席下に掛く。執權北條時頼、道隆の來化を聞き、延いて常樂寺に請じ、政務の餘暇、常に其の室に入つて道を問ふ。遂に一寺を山之内の地に瘠めんとし、建長元年寺地を卜して工を起し、同五年成る。乃ち丈六の地藏を中尊とし、巨福山建長寺と號し、道隆を屈して開山となす。道隆乃ち常樂寺七年の居を去つて、建長寺に入り、四來の大衆を接して、大いに宗風を擧揚せり。同七年、時頼更に千人に募縁して巨鐘を鑄る、道隆之が銘を作る。正元元年、師四十六歳、請によつて京都の建仁寺に移る。時に東福寺には聖一國師圓爾あり、都下の禪風大いに興る。後嵯峨上皇、師の道譽を聞き、宮中に召して宗要を聽き給ふ。師一偈を進めて曰く、「夙縁深厚にして扶桑に到る、忝く精藍を主ること十五霜、大國の八宗今鼎に盛なり、禪門の廢を建て賢王を仰ぐ」と。建仁寺を董すこと三歳、席を義翁に譲り、去つて鎌倉に歸り、建長寺に退く。之れ延曆寺衆徒の、道隆が建仁寺に在つて、専ら禪宗を弘通するを嫉めるを知りたるが故なり。而も尙ほ衆徒は更に不平を朝に訴へたりと聞き、師は其の煩累の身に及ぶを惡み、逃れて甲州に赴き、東光寺に匿る。師曰く、「我れ法を弘めんが爲に海を踰えて此の國に入る、而も唯だ皇畿侯服に周旋するのみ、未だ遠陬に誘導するに遑あらず。偶々譏誣に會し、僻地に入る、是れ我が弘道の素懷なり、天龍豈に意あるか」と。居ること三歳、再び歸つて建長寺に就く。而も謗議未だ已まず、復た甲州に移る。後時宗の懇請により、再び鎌倉に還りて壽福寺に入る。弘安元年五月建長

寺に歸り、七月微疾を示す。二十四日、偈を書し、衆に辭して寂す、年六十六。遺偈に曰く、「日に翳晴の術を用ふること三十餘年、筋斗を打翻して地轉じ天旋る」と。即ち靈骨を山の東南に收めて塔を樹つ、西來庵是れなり。翌弘安二年、時宗、朝廷に奏して大覺禪師と諡す。蓋し我が國に於ける禪師號の嚆矢たり。

國譯大覺禪師坐禪論

夫れ 坐禪は 大解脱の 法門なり。諸法是れより流出し、萬行是れより通達す。 神通智慧の徳、此の内より起り、人天性命の道、此の内より開く。諸佛已に此の門より出入し、菩薩行じて即ち此の門に入る。二乗は猶ほ半途にあり、外道行すと雖も正路に入らず。 顯密の諸宗、此の法を行せずして、佛道を成ずるものあらざるなり。

問うて曰く、「坐禪は諸法の根源たりと、意志如何。」
答へて曰く、「禪は佛の内心なり、律は佛の外相なり、教は佛の言語なり、念佛は佛の名號なり。是れ皆佛心より出づ、是の故に根本とするなり。」
問うて曰く、「禪法は無相無念にして、靈徳露れず、見性もまた證據なし、何を以てか之を信すべき。」
答へて曰く、「自心と佛心と一味、豈に靈徳にあらずや。我が心我れ知らずんば、誰を喚んでか證據とせん。 即心即佛の外、何の證據をか求めん。」

神通智慧の徳、

①坐禪。六祖壇經に曰く、「外一切の善惡の境界に於て心念起らざるを名けて坐となし、内自性を見て動ぜざるを名けて禪となす」と。

②解脱。煩惱の繫縛を解き、迷界の樂苦を脱すること。

③法門。法は教法なり、門は通入の義。佛法は衆生をして生死を脱して涅槃に趣かしむるの門なるが故に、法門と云ふ。

④神通。神變不思議にして自在無礙なる作用を云ふ。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通を六神通と云

問うて曰く、「能く一心法を修すると也た萬行萬善を修すると、功德争か之を比すべき。」

答へて曰く、「頓に如來禪を覺了すれば、六度萬行體中に圓なり。然るときんば禪の法、一切の諸法を備へたり。豈に道ふことを見ずや、三界唯一心、心外無別法、縦ひ萬行を修すとも、心法を知らずんば、悟を得べからず。若し悟を得ずして、成佛すと道はど、豈に其の理あらんや。」
問うて曰く、「此の法如何が修行すべき。縦ひ修行をなすとも、開悟することを得ずんば、成佛不定なり。若し不定ならば、修行をなすと雖も、何の益かあらん。」

答へて曰く、「此の宗は甚深微妙の法門なり。若し一たび其の耳を経るるとあれば、長く菩提の勝因となる。古人云く、「此れを聞いて信せざるものも、福人天に超ゆ、學んで得ざるものも、終に佛果に到る」と云云。此の法は佛心宗なり。佛心本より迷悟なし、正しく如來の妙術なり。縦ひ悟を得ずと雖も、一座の坐禪は、一座の佛なり、一日の坐禪は、一日の佛なり、一生の坐禪は、一生の佛なり、未來も亦是の如し。只だ是の如く信

するものは是れ大機根の人なり。」

問うて曰く、「若し是の如くならば、我も也た修行すべし。云何が安心し、如何が用心せんや。」

答へて曰く、「佛心一切、相に着することなし。相を離るるを以て、實相とす。行住座臥、四威儀の中、坐を以て安穩の義とす。以て端坐思實相と云ふ。」

問うて曰く、「端坐思實相の義、微細に之を説け。」

答へて曰く、「端坐とは如來の結跏趺坐、思實相とは、所謂坐禪なり。

法界定印を結んで、身心動せず、眼半目を開き鼻端を守つて、當に一切有爲の法は、夢幻泡影の如しと見るべし、念頭に繫ぐることを莫れ。」

問うて曰く、「足を結び印を結ぶは、如來の威儀なり、半目を開き鼻端を守るは、何事ぞや。」

答へて曰く、「眼を開いて遠く見れば、紛飛の境に侵されて、心散亂し、目を塞げば又昏沈の境に落ちて、心中明かならず。眼半目を開くとくんば、念々恐々ならずして、身心一如にして、明察なるとき、生死煩惱、近傍す

① 二乗は聲聞・緣覺なり、共に小乗教の聖者。

② 顯密、顯教と密教なり、密教とは眞言宗及び天台宗の一部を云ひ、顯教は其餘の諸教宗を云ふ。

③ 律、佛の制し給へる戒律、即ち規矩法度なり。

④ 即心即佛、僧あり、馬祖に問ふ、「如何なるは是れ佛、祖曰く、「即心即佛」と。

⑤ 一心法とは見性悟道の禪法を指す。

⑥ 如來禪、釋迦如來より迦葉に傳へ、以後轉々相傳したる禪法。

⑦ 六度、度は梵語、波羅密の譯語なり、生死の此岸を度して涅槃の彼岸に到る意にして菩薩の修する行を云ふ。六度は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、是れなり。萬行はよろづの善行なり、大藏一覽に云く、「開いて六度となり、散じて萬行となる」と。

⑧ 三界唯一心、心外無別法とは森羅萬象悉く一心に外ならざるを云ふ、此の意華嚴經に詳かなり。

⑨ 菩提は梵語なり、智、道、覺などと譯す。佛の正覺を云ふなり。

⑩ 佛心宗とは禪宗を云ふ。他の諸宗の佛の言説即ち經論を所依として立教開宗せるに異なりて、直に佛心を相承するが故に斯く云ふなり。

⑪ 一座の坐禪は一座の佛云々。多時の坐禪修行の功を積みみて、而して後、佛となるにあらず、他念を離へず三昧に坐する當體、即ち是れ佛に外

べからず。是れを名けて、立地成佛、大機大用と云ふなり。」

問うて曰く、「是の如きの事を聞くと雖も、尙ほ以て信心及び難し。經咒を誦誦して其の功を積み、持齋持戒、名號を唱へて、其の徳を累ねて専ら憑あり、只だ何事をもなさずして安禪せば、何の奇特かあるべきや。」

答へて曰く、「是の如く疑ふを生死の業と云ひ、是の如く疑ふを煩惱と云ふなり。一切の法を行じて所得の心なきを、名けて深甚般若となす。般若は智慧なり、此の智慧能く生死の根源を切る利劍なり。善根を修して、其の果報を願ふは、凡夫の迷なり。菩薩善根を修して、其の果報を求めず、大慈大悲に向つて善根を修するが故に、菩提の資となる。果報を願つて善根を修し、人天の小果を成ずる人、定めて生死の業なり。」

問うて曰く、「善根の功徳を聚めずして、争か萬徳圓滿の佛を成すべきや。」

答へて曰く、「善根功徳を聚むれば、三大阿僧祇劫を歴て、當に成佛すべし。因果不二の法を行じては、一生に成佛す。自心を明め自性を悟る人、自己本來の佛を見るなり、今始めて成佛するにあらず。」

ならざるを云ふ。

① 機根。根は物の本となる力、機は此の力の發動する作用なり。大機根とは即ち佛道修行の大能力あること。

② 相に著す。相はすがた、かたちなり、著は執着なり、外相に執着すること。

③ 四威儀。行住座臥のこと、威儀とは規矩禮節に合へる動作のこと。

④ 結跏趺坐は坐禪の際の座り方なり、右足を左の股の上におき、左足を右の股の上におくを云ふ、精しくは坐禪儀等を見よ。

⑤ 法界定印。定印とは入定の相を標する印契なり、法界定印とは、一に佛部の定印ともいひて大日如來の住定印なり。

⑥ 有爲。因縁によりて生じたるもの、爲作造作を有するの意なり。

① 念々は念通なり。

② 持齋は、午後に食事せざること、持戒は佛の制し給へる戒律を守るなり、名號を唱ふは佛の名號を唱ふること。

③ 般若は梵語、譯して智慧と云ふ、此の智慧と云ふは菩提に入る智慧にして、世間普通に通用ひらるゝとは其の意味を異にせり。

④ 三大阿僧祇劫。阿僧祇は梵語譯して無數とす、劫は非常に長き時間を云ふ、算数の及ばざる長年月なり。菩薩は此の長年月間、修行を積みて後成佛するなり。

⑤ 因果不二の法。修證不二即ち修因と證果と別ならざるを云ふ、前に一座の坐禪は一座の佛云々と云へるは即ち此の義なり。

⑥ 自己本來の佛とは衆生が本來

問うて曰く、「見性成佛の人は、因果によらず、善根を修すべからざるか。」
答へて曰く、「見性成佛の人、善根を修して利益をなすと雖も、果報のためにはせす。衆生を教化するが故に、因果を教ふるなり。我が身のため所得なきが故に、功徳に憑らず、一切無心なり。」
問うて曰く、「無心といふは如何。若し一向に無心ならば、誰か見性し誰か悟道し、誰か又說法教化をなすべきや。」
答へて曰く、「無心とは、一切愚痴の心なきを言ふ、邪正を辨する底の心なきを言ふにはあらず。我れ衆生を思はず、亦佛を望まず、又迷を思はず、悟を求めず、人の尊敬にも從はず、名利養聞をも望まず、毒害怨讎をも厭はず、一切の善惡について、差別の念を起さざるを、無心の道人と言ふ。故に云く、「道、無心にして人に合ひ、人、無心にして道に合ふ」と云云。」
問うて曰く、「持齋持戒、經咒を誦誦し名號を唱ふる功徳、勝劣ありや無や。」

答へて曰く、「持齋は食貪の欲を離れて、來生に當に大福徳を得べし。持戒は又惡心をやめ善心を生せんがためなり。善心あるものは、人天の中に

生れて、位尤も高し。經呪を讀むものは、佛法を護持する故に、此の人來世に當に大智慧を得べし。名號を唱ふれば、佛に歸するが故に、當來に必ず佛土に生ず。又此の無心といふは佛心なり。佛心の功德は、言語も及ぶこと能はず、思量も到るべからず、實に不可思議なり。」

問うて曰く、「此の如きの善根は、面々に其の功德疑なし。無心の功德は尙ほ以て不審なり。」

答へて曰く、「佛の威儀を學び、佛の言語を傳へ、佛の名號を唱へて功德あらば、又是れ無心の道人にも功德あるべし。若し無心に功德なしと道はば、餘行も也た功德あるべからず。一切の善根功德は、天上人間の因縁なり、無心は即ち是れ頓證菩提の道なり。功德之を言ふに足らず、實に一大事因縁なり。生死煩惱も自ら消滅して、身心一如なり、即心成佛、何の疑かあらんや。故人の云く、「三世の諸佛を供養せんより、一無心の道人を供養せんにはしかり云云。」實に是れ唯佛與佛の境界なり、凡夫二乘の測るべき處にあらざるものなり。」

問うて曰く、「諸教には無心と説かず、又讚歎せず。何に由つてか宗門に之を貴ぶ。」
答へて曰く、「諸教にも其の説なきにあらす。或は言語道斷と説き、或は不可説と曰ふ、或は畢竟空、

具有する佛性なり。

① 修行。持齋、持戒、讀經、念佛等を指す。

② 言ふに足らず。言ひ盡す能はずの意ならん。

③ 唯佛與佛の境とは佛と佛との默契領會し得る境界にして、他の窺知し能はざるもの、世語に英雄あつて英雄を知るに云ふが如し。

或は一大事因縁、或は又諸法寂滅と説く。釋迦室を掩ひ、淨名口を閉づ、是れ豈に無心を示すにあらずや。影嚮の菩薩は、已に證智するが故に、佛之を説きたまはず、二乗は及び難きが故に、佛又之を説きたまはず。故に法華經に、「無智人中、莫說此經」と云ふ、此の意なり。諸教に八萬四千の法門ありと雖も、色空の二法を出でず。一切形相ある者は、皆色なり身なり。形相に顯はれざるものは皆空なり。身は形あるが故に色と云ひ、心は形なきが故に空と云ふ。一切の經は、皆此の色空の二法を離れず、是れ不可説無心の境界なり。所以に斯の事を讚歎せず、言語も及ばざるが故に、教外別傳と云ふなり。」

問うて曰く、「則ち此の身迷とすべきや、悟とすべきや、又心は是れ何物ぞ、迷悟の根本、之を知らずんばあるべからず、又心は身内にあるか、身外にあるか、何れの處よりか起る。」

答へて曰く、「四大五蘊の色身、十方に遍滿して、一切衆生を根本となす。因縁和合するときば、身體を建立す、是れを生と名け、果報遷謝するときば、四大分散す、是れを死と名く。色相は凡聖あり、心體は迷悟なし。然りと雖も假に迷へるを衆生と名け、悟れるを諸佛と名く。迷悟は

④ 室を掩ひ口を閉づ。佛、摩訶陀國にありて室を掩ふて說法を止め、維摩、毘耶離城に文殊と對して默然たり、共に妙法の不可説を示すなり。淨名は維摩の譯名なり。

⑤ 影嚮。諸佛菩薩が形を變へて所化の衆生の姿を現じ、如來説法の會座に連りて之を助くるを云ふ。

⑥ 四大。地、水、火、風なり、此の四者は一切形體あるものを構成する大作用ある故に大と云ふ。五蘊とは、色、受、想、行、識なり、蘊は積集の義、有爲の一切萬法を此の五に總攝するなり。

只だ妄心に因る、真心には迷悟なし。生佛は本一心の迷悟に因る、本性を了るときんば、畢竟して凡聖の差別あることなし。故に首楞嚴經に曰く、「妙性圓明にして、諸の名相を離れたり、本來世界衆生あることなし云云」と。

問うて曰く、「心性はもと迷無しと、若し然らば迷情は、何れの處よりか起るや。」

答へて曰く、「妄念若し起れば迷隨つて來る、迷來るが故に煩惱も又生ず。妄念若し滅すれば迷則ち去る、迷去るが故に煩惱も又滅す。煩惱は生法なり、生死の種となる、菩提は滅法なり、寂滅の樂となる。迷ふとさんば諸法皆煩惱、悟るときんば諸法皆菩提なり。世人此の迷悟の根本を知らず、生死の念を壓へて起さざるを、而も一念不生と思へり。又是れを無心となす。猶ほ是れ生死の念なり、無心にあらず寂滅にあらず、念を以て念を息むるは、生死相續なり。」

問うて曰く、「小乗は空理に墮して無心を知らず。大乘の菩薩は此の無心を得べきや否や。」

答へて曰く、「菩薩は十地に至りて、猶ほ惑智の二障あり、故に無心を得ず。一に惑障といふは、第七地に至つて、求法の心あるが故に障となる、第十地に至つて、覺照の心あるが故に障となる。成等正覺の時に至つて、此の無心に合ふと云々。」

問うて曰く、「菩薩だも尙ほ十地に至るまで之を知らず、初心の學人、争か無心に合ふべき。」

答へて曰く、「大乘は不思議なり、直に一念の根源を截つて、頓悟するもの之あり。教家に三賢十聖の位を立つることは、鈍根機のためなり。利根の人は初發心の時、便ち正覺を成すといつて、直に成佛するもの之れあり。十地等覺に至つて、無心に合ふと即今見性成佛すると、無心の理は差別あることなし。」

問うて曰く、「見性成佛といふは、如何なる道ぞ、性といふは何物ぞ、見といふはいかなる見ぞや、智を以て知るべきか、目を以て見るべきか、如何。」

答へて曰く、「經論を學んで得る智は、見聞覺知の分別の智なり。此の修

①生佛。生は衆生なり、佛と衆生とを云ふ。

②心性。人間の本心本性にして、心性の實體は佛心なれば、迷ひあることなし。

③煩惱生法菩提滅法。煩惱は是れ迷妄の基源、菩提は佛果の現實なり、故に迷妄せば諸法幻現して、一切の有情に纏綿し、佛果を證すれば、諸法頓に蒙塵しつゝして如々不動なり、法は是れ生滅の主體、生滅は法の示現なり、法の示現ある時は、是れ煩惱の中ありといふべし、菩提を證する時、一切の法を蟬脱して、虚空理に自在なり。

④一念不生。煩惱は一念生ずる時に起る、一念とは法の幻示なり、即ち一念を生ずる時法生ず、法生じて煩惱生ず、一念不生の時、法滅す、法滅して菩提を證す、一念不生とは

三昧の狀態にして、生なく死なく頭なく、色なく、一切忘我の時なり。

⑤小乘。自己一人の成佛するものをいつて小乗といひ、覺照覺の如きものは所謂小乘なり。宗派でいへば、念佛宗、有部宗の如き是なり。

⑥大乘。自他共に成佛するものをいふ、佛菩薩の如きものは所謂大乘なり。宗派でいへば法相宗、天台宗の如き是なり。

⑦教家とは禪家に對して他の佛敎諸宗派を云ふ、禪の直ちに佛心を相承するに異なりて他は佛の言敎、即ち諸經論を所依とす、故に之を教家と云ふ。

⑧三賢十聖。菩薩の位次階級なり、三賢は十住、十行、十回向の三位を云ひ、十聖は此の上位する十地を指す。